THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年　第二號

第二百三十九號

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

市内は御一報次第直に御一覽に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手答整ひ居候



內地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處昨年合名會社トモエヤ解散後は同店を辭し右の場所に合名會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候敬具

◉市內は電話又は御一報次第早速店員御用伺に參堂可仕候

◉地方の御注文は迅速御發送申上候

アヲキ商店

京橋區南傳馬町二丁目東側

電話本局 一三八二番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限內ニ死亡セバ）の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都本店　京都市下京區油小路御前通角　（電話　七貳貳番）
東京支店　東京市京橋區南槇町壹番地　（電話本局五壹八番）
大阪出張所　大阪市東區大川町御靈筋角　（電話東壹貳五參番）
長崎出張所　長崎市榎津町六十五番地　（電話　七貳六番）
廣島出張所　廣島市紙屋町（秦　忠兵衛方）　（電話　六〇八番）

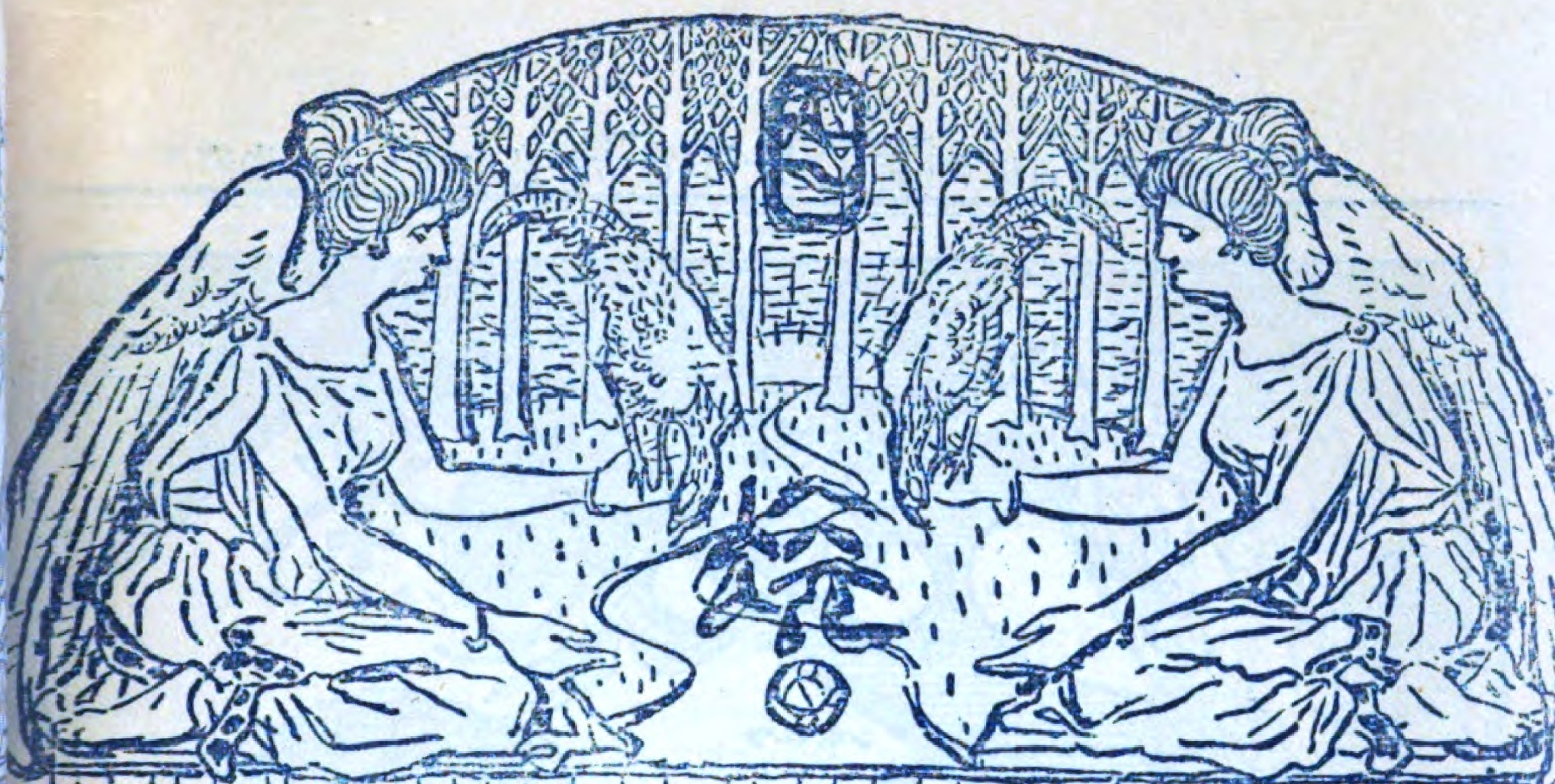
信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

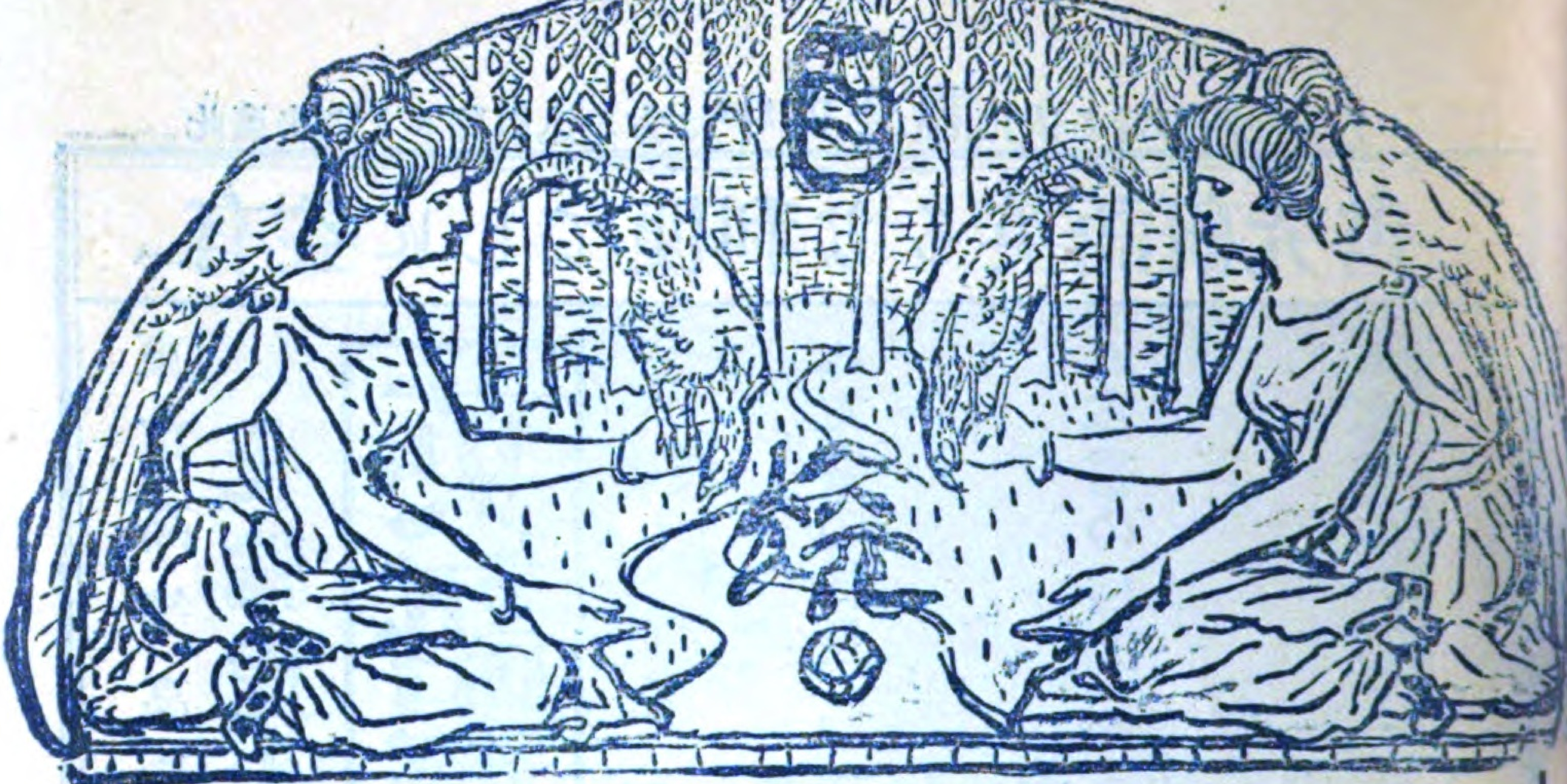
信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ





中央公論第二十四年第二號目次



有益にして便利なる英語研究書

東京高等商業學校教授
花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

全一册　定價金五拾錢

▲本書の特長

英語研究の書籍は極めて多いが和文英譯と英文和譯と書取と文法との四種の學習を一書に集めたのは本書の特長である

▲本書の目的

中學の四五年級、中學卒業生、殊に試驗を經て高等の學校に入學せんとする者に以上四種の充分なる智識を與ふるを目的とする

▲本書の内容

半巻は試驗問題に擬した問題集　半巻は答案に擬した解釋集。日々數題づゝ併せ研究して五十日にして修了するやうにしてある

發行所　東京市本郷西片町十番地　電話(下)九一　振替東京二四　反省社出版部



Daniel



第二十四年
第二號
（第二百卅九號）

進歩黨の將來

（一）

進歩黨の改革非改革兩派は、今尚ほ暗鬪を繼續し、一勝一敗しつゝあり、而して其の間自然に新政黨を釀成するの機運を促進するに於て、頗ぶる注目を要するものなきに非ず。

進歩黨の前身たる改進黨の創立されしは、實に明治十五年の春なりき、今尚ほ之と並立せる政友會の前身たる自由黨は、之よりも稍ゝ早く、明治十四年の秋を以て組織せられたりき、自由黨には熱血性の男兒多かりしも、智識辯力には缺く所あり、改進黨に至ては、河野敏謙、小野梓、矢野文雄、牟田口元學、小鷹狩元凱、沼間守一、藤田茂吉、犬養毅、島田三郎、尾崎行雄、箕浦勝人、須藤時一郎、益田克德、肥塚龍、波多野傳三郎、小畑美稻、高田早苗、天野爲之、山田喜之助、岡山兼吉、市島謙吉、砂川雄俊、山田一郎の諸氏を始め、當時最も學問智識あり、辨力文才ある紳士のみを網羅して、其の總理大

隈重信氏と共に、儀容實に堂々たりき。

斯くして彼の壯士然たる自由黨と對抗し、地方に財産ある多くの紳士を黨員として、一時は殆んど政界を左右する狀態なりき、當時を以て今を視るに、果して如何の感ありとするぞ、竟に去つて實業界に入り、若くは學問教育に一身を委ね、又は遙かに遠く幽冥界に轉籍したる人多きも、人物の落莫、殆んど言語に絕す、吾人は今多く詳敍するの勇なしと雖も、後に九州進歩黨とも合し、自由黨中の河野派と握手して、更らに人材を網羅すると雲の如くなりしに拘らず、島田、尾崎の如き宿將を去らしめ、河野、柴、中村の如き雄物を喪へるは何ぞ。

（二）

蓋し改進黨は多く巧妙なる運動に出てたりき、彼の對外硬論の盛んなるや、自から六派の中堅となりて政府及び自由黨に當り、自由黨の星亨氏を彈劾して議院以外に放逐し、自由黨をして最も痛烈なる打擊を蒙むらしめたりき、當時貴族院にも近衞、二條、谷、曾我等改進黨に同情するもの多く、其の勢威頗ぶる盛んに、明治二十九年三月に至り、革新黨、中國進歩黨、財政革新會、大手俱樂等と合併して、茲に始めて進歩黨なる名稱を生ぜし也、而して大石正己、工藤行幹、長谷場純孝、神鞭知常氏等も之に加はり、柴四郎、中村彌六、河野廣中氏等亦實に進歩黨に屬せし也。

自由黨が、板垣伯の入閣に由て伊藤內閣と提携したりしが如く、進歩黨も亦大隈伯の入閣によつて松方內閣を援助したりき、伊藤公は板垣伯と相背かざりしも、大隈伯は忽ちにして松方伯と爭ふて其の內閣

を破壞し去れり、斯くて三十年六月二十二日自由進歩の兩黨合同して憲政黨を組織し、以て時の伊藤內閣に當るに至れり。

此の時に方つて、伊藤公は自から政黨を組織して以て憲政黨に當らんとしたるも、山縣公等の反對によつて果さず、竟に現職並びに爵位を併せ辭せんとを奏請し、且つ大隈板垣の兩伯を後任として推薦したりき。

六月廿七日大隈板垣の兩伯は竟に內閣組織の大命を拜し、大隈伯自から總理兼外務大臣となり、板垣伯を內務大臣とし、大石正已氏を農商務大臣、尾崎行雄氏を文部大臣(後に犬養毅氏と代れり)松田正久氏を大藏大臣、大東義徹氏を司法大臣、林有造氏を遞信大臣としたりき、是れ純然たる政黨內閣にして實に破天荒の現象也。彼等政黨者流が得意滿面なりしと想ふべし。

然れども進歩黨が得意の色あるに反して、自由黨は稍〻不滿なりき。加ふるに獵官其他の競爭ありて、舊進歩舊自由の兩黨日に反目の度を高め來れる時、米國公使を罷めて歸朝せる星亨氏先づ破壞運動に着手し、十月廿八日自由黨側より解黨の動議を提出せしめたれど、進歩黨側に沮まれたるを以て、翌廿九日神田青年會館に自由黨側の黨員のみを召集して解黨の決議を爲し、更らに新しき憲政黨を組織するととし、其の主義綱領をも決議して即時內務省及び警視廳に屆出てたり、內務大臣板垣伯、警視總監西山志澄氏共に自由黨なるを以て事皆意の如くなりき、斯くて星氏等は芝公園の憲政黨事務所(今の政友會本部)をも乘取れるが、進歩黨側は之に抗議し、十一月一日更らに大會を開かんとしたるも、內務大臣

は其の存立を認めずと唱へて之を解散したるを以て、三日新たに憲政本黨なるものを組織するに至れり。

板垣伯等は十月廿九日大隈伯の專横を唱へて辭職を上つれり、大隈伯等進步黨側の大臣は其の御裁可を奏請したるも聽納されず、卅一日竟に一併に辭表を上つれり、此の結果十一月八日山縣内閣は成りぬ而して憲政黨と稱する星氏等の自由黨は此の新内閣と提携したりき。

吾人が兩黨合同と分裂の事情とを詳叙せるは他なし、之を以て多く進步黨の反省を促さんと欲する微意のみ、改革非改革の訌爭も竟に斯の如くならんとを恐るゝが故のみ。

（三）

苟くも政黨を作らずんば則ち止む、既に之を作る以上、必らず自から政局に立ち、若くは政府者を助けて以て其の政見を實行せしむるとを期せざる可らず、語を換へていへば、其の信望を上下に繋ぎ、其の勢力を中外に知らしむるがため、第一自から大ならざる可らず、大ならずんば政局に立つ能はず、又政府者を助けて其の政見を實施する能はざれば也。

進步黨は今議衆院に六十六の議席を有するに過ぎず、曾て天下を三分して其の一强を領有したりしもの、今や六分の一をだも有するに至らず、衰たりと謂ふべき哉

何故に爾く衰へたる乎、吾人は今其の原由を探索する必要を視ず、唯だ彼等に告ぐるに自から大なる所以の方法を以てせんのみ。

自から大なる所以を知らんとせば、進歩黨は先づ主として二十年來對峙し來れる自由黨の歷史を回顧せば足る、自由黨は其の始め板垣伯を總理とせしも、猶ほ進歩黨が大隈伯を戴けるに同じ、然かも板垣伯あるを不便とするや、之と相別れて幾んど惜む色なく、曾て藩閥と稱して正面の敵たりし伊藤內閣と提携し、後には山縣內閣とすら提携し、山縣內閣との提携破るゝや、所謂藩閥の主腦たる伊藤公の膝下に全黨を捧げ、歷史ある自由黨憲政黨の名を棄つると敝履の如く、伊藤公專制の下に政友會となり、一にも二にも總て伊藤公の節度を奉じたりき、其の政敵とせる藩閥黨中の錚々たる大岡元田の諸氏と握手し、之を一方の領袖として恬然怪む色なかりき、勿論伊藤公の直參たる本多、金子、末松諸氏の去れるに由て、竟に總てを自由黨化せるも、猶ほ支那人屬が辮髮に改めながら竟に滿人屬を支那化したるが如し、而して竟に漸く自から大に、今や衆議院に絕對の多數を占めしのみならず、盛んに貴族院に其の勢力を扶殖して、所謂藩閥の基礎を搖撼しつゝあり、其の垢を含み辱を忍び、陰忍して藩閥に降るを辭せず、又新分子を迎ふるに急に、區々の名分に拘泥せず、紛々たる議論に趨らず、常に歩調を一にし、節度を守りて以て一意自から大なるを努めたりし苦心に至つては、實に驚嘆に値ひするものあり。

進歩黨は大隈伯が如何なる場合にも饒舌して、寸毫の餘裕を存せざるの不便なるに苦み、竟に巧みに敬遠主義を以て之と手を絕ちたりき、曾て松方內閣と提携したりしも、議論多くして實情少く、竟に松方、樺山、高島の諸豪をして、進歩黨恃む可らずと浩嘆せしめたりき、自由黨と合同して憲政黨を作り、竟に隈板內閣を組織するに至ても、動もすれば舊自由派の愚に乘じて之を凌ぐの傾向あり、曾て自から損抑

して他を同化せしむるが如き作用なく、依然議論と智巧とを以て他を屈服するに力めたりき、自由派が怒り怨みて漸く爪牙を磨し、星氏の怪腕に由て竟に破壊せられたるも此の故ならずや。

是れ以來、進歩黨は智巧に過ぎて親み難く、議論多くして合し難しと稱せられ、漸く孤立の形勢に陷るに至りし也、然かも今尙ほ悛めず、依然として其の智術と議論とを以て外に爭はず、却つて內自から鬩ぐは、果して何の心ぞや、嗚呼果して何の心ぞや。

（四）

西園寺內閣の成るや、進歩黨の領袖中、密かに西園寺侯を訪ひ、內閣中一二の椅子を得て、全黨之に與みすべきを提議したるものありき、而して侯の謝して之を受けざりしは、他なし、進歩黨の智巧に過ぎて議論多きに辟易したれば也、賴母しき味方と爲すに足らざるを信じたれば也。

後に此の領袖等、屢々桂侯に接近せんと欲して頗ぶる畫策する所ありき、第二次桂內閣成るや、或は一二椅子の自黨領袖に落ち來るを夢想したるもありしといふ。勿論桂侯は、進歩黨を敵視せざるべし、或は場合によりて一視同仁以上に考ふるも知る可らず、然かも竟に之と握手するに至らざるは何ぞや。

單に桂侯のためよりいはゞ、寧ろ其の一族郞黨を率ひて政友會と合同し、西園寺侯と共に政友會の所有者たるを便宜とすべし、西園寺侯は上至尊の御信任を受くると篤く、器度高邁にして自から天成の良首相なるも、奈何せん健康佳ならず、且つ政事家に必要なる執着力を缺如せり、而して政事家的資質に至ては、素より多く桂侯に讓ると言を俟たず、桂侯は山縣公に宜しく、伊藤公井上侯に宜しく、又軍人

中に資望あり、西園寺侯の爲す能はざる所を爲すの伎倆と便宜とを有するのみならず、伊藤公の政事的繼嗣者としては、寧ろ西園寺侯の上にあり。政友會員と雖も、其の前途發展のために、從來の感情を一掃して考慮せば、寧ろ桂侯を迎へて之を戴くを可とするも知れず、況んや吾人の曾て論告したりしが如く、政友會と桂侯と一致せば、啻だに衆議院に鞏固なる大多數を占むるに止まらず、貴族院にも亦多く顧慮するの要なきに至るをや、果して然らば、桂侯たるもの、少數にして節度なく、議論多くして秩序なく、智巧にして統御し難き進步黨を味方とするよりも、寧ろ斷然政友會に投ずるを利なりとすべし、侯が屢々進步黨の送れる秋波に應ぜざるは抑も此の故ならざらんや。

進步黨の領袖等、桂侯が進んで進步黨と握手するや否やを試みしこと一再ならず、其の都度要領を得ざるを以て以爲らく、桂侯の智にして而して狐疑する、意に斷じて我が黨に與みする能はず、我が黨若し進んで桂黨たらんとするも、却つて其の容るゝ所たらずんば、是れ垢辱を天下に晒す所以なり、容易に爲す可らざる也と、進步黨は斯くして斷然桂侯に趨る能はず、所謂改革非改革の爭を續けて日も亦足らざるのみ。

（五）

進步黨領袖の謀るが如く、桂侯は容易に自から進んで進步黨と握手せざるべし、然れども侯をして竟に握手せざるを得ざるに至らしむる方法なきや否や。

世に新政黨組織を計畫するものあり、以爲らく、政友會が桂內閣に柔順なるは當分のみ、西園寺侯の

所謂好意なるものは第廿五議會に止まらん、次期議會に至ては、政友會の結束漸く成り、天下また憚かるに足るものなしとして强梁を逞くし、眼中また桂内閣なきに至らん、此の時に臨んでは、桂侯また自衛のため自から進んで一黨を組織せざらんと欲するも得ざるべし、而して天下政友會の跋扈に苦むものも皆翕然として新政黨に赴かん、新政黨の成る必至の勢ひのみと、然れども政友會にして遠大の計畫を懷き、次期の議會にも、また其の次の議會にも、依然として今日の體度を繼續せば如何、且つ竟に進んで桂侯を迎ひ取らんとするに至らば如何、進步黨たるもの抑も指を啣へて之を羨望するに止まるの愚を敢てするか。

　進步黨の政友會を學ぶは實に玆にあり、他なし、進步黨を擧げて、桂侯の膝下に投ずるのみ、進步黨自から身を桂侯の前に投げ出し、死活唯だ侯の意のまゝなりとせば、侯は果して如何とかするや、西郷南洲は私學校黨のため竟に叛賊の名を甘んじ受け、且つ笑つて一身を彼等に與へしにあらずや、吾人の知る所によれば、桂侯は智術餘りあるも然かも全く血なき人物には非ず、其の涙脆く多情なると却つて世人意料の外にあり、進步黨にして所謂垢辱を天下に晒すといふが如き掛念を懷かず、全黨を提げて桂侯に投せば、侯豈徒らに之を捨つ可んや、例へば自由黨が曾て伊藤公の前に全黨を捧げたるが如くすべし、否、其れ以上の大決心を以て、全然侯の命のまゝと爲すべし。

　幸ひにして侯竟に進步黨のため南洲たらん乎、侯は徒らに城山の土と爲るべき人にあらず、必らずや進步黨を中堅とし、大同、戊申の兩俱樂部を合し、且つ政友會の一角を崩し、又新會の一部を拔きて、

茲に百數十人の議席を衆議院に有する一黨派を作るに至るべし、所謂新政黨組織の理想實にせられて、政界の分野は、茲に截然として桂黨西園寺黨によりて縱斷せらるべし。然らずして桂侯若し政友會に入り、政友會と大同派と合同するとき、吾人主張の如くならんか、進歩黨の勢力益々孤小にして、少くも向後十數年間は政權を得ること能はざるべし、進歩黨の策士豈之を思はざる乎、機會は後頭の白髮の如し、容易に捉ふ可らず、進歩黨若し今の如く、訌爭にのみ日を送らば、是れ益々小にして自から衰亡を速く所以のみ、解せりや。

電車値上の失敗

(一)

東京鐵道會社が電車値上の請願を公然東京府廳へ提出したるは十二月廿一日なりき、東京府知事が所請調査を重ねて之を鐵道院に進達したるは一月十九日にして、翌廿日鐵道院と内務省と合議の上、廿一日不認可の指令を下したり。請願書の提出以來、茲に至つて正さに一ヶ月。

世多くは政府の英斷其の宜しきを得たるを激賞す、或は然るべし、然れども内務大臣平田男の剛堅にして而して質實なる、豈漫りに値上げを許す可けんや、鐵道院總裁後藤男に至ては、今始めて大臣たるのみ、其の政界に於ける將來は尚ほ甚だ永し、男自から、機會あらば、竟に内閣總理大臣たるをも期待すべし、電車値上げの許可と交換に二三十萬圓の目腐れ金を得、其の利殖に出て一生を微かに而して

安らかに送るといふが如き隱居考へを聽かざる限り、男たるもの何ぞ此の人氣なき値上問題に認可を與ふるの愚を倣す可んや。

且つ今の內閣には、電車の値上に由て黨費を貪ぼらんとするが如き與黨あるとなし、政友會は曾て十萬圓（或は廿萬圓とも稱す）の政黨費を電車會社より納附せしめ、之と交換に內務大臣をして會社の請托を容れしめんとしたりと傳へらる、桂內閣には幸か不幸か、未だ斯の如き與黨あらず、彼の大同倶樂部の如きは、殆んど黃金を欲すると食色の如くならんも、會社は其の微力を知つて顧みず、且つ吾人の聞く所によれば、桂侯は嚴に其の倶樂部を戒飭したりしのみならず、會社のため早くより値上げの運動を爲したるものに對しても、厲色厲言、大同派其の他に送賄すると寸分だも我が耳朶に觸れば、値上げの事假令許さるべき理あり、當局大臣等之を許さんとするも、自から首相の職權を以て斷然認可せざるべきを告げたりしといふ、値上げの到底許可されざると、苟くも事情を知るもの夙に之を察せん、彼の市民大會を開かんとせしが如きは、寧ろ殆んど贅々者流に近きのみ。

（二）

西園寺內閣の時、電車問題を調査すと唱へて、其の許否を決せざると約半歲に及びたりき。此の間與黨收賄の說傳はり、會社の運動處々に行はれしとまた已むを得ざるのみ、今の內閣が願書の進達を受くるや、僅々一日にして不認可を決せしは、其の敵人と雖も敏活と稱する所たり、而して彼の大博覽會を延期したりしも之と同一筆法のみ。

（三）

電車會社には醜聞多し、而して其の方面の殊に舊自由黨乃ち今の政友會に多きは、會社重役として最も勢力ある利光（鶴松）、井上（敬二郎）の兩氏が隠れもなき星の郎黨なるが故なるべし、而して其の黃金力が多く自由黨筋に通じたりと稱せらるゝも亦勢ひの自然なるべし。

岡崎邦輔、森久保作藏の兩氏は、殊に有力なる黑幕と稱せられたりき、吾人は素より其の眞否を知らず、又公言するを好まずと雖も、單に社會の一角に私語せられし所によれば、東京市會に於ける自由派の勢力は、主として此の黑幕の支持する所にして、常に市會の大勢を左右するも、亦黑幕の籌策と、電車會社筋よりの黃金力に待つもの多く、市會が大多數を以て電車の値上げを可決したるも、實に其の結果なりといへり。

舊自由派が市會に勢力を揮ひ、市參事會を左右し、市長助役をして其の鼻息を窺はしむるも、實に此の黑幕の力にして、而して黃金に乏しからざる故なるが如し、如何なる場合に於ても、東京市會が電車會社の意の如くならざるは莫く、而して市會の大勢が常に自由派の意のまゝなるを視るものは、蓋し思ひ半に過ぎん乎。

進歩派の宿老たる肥塚龍氏の如きも、市會に在ては常に自由派と同一歩調を取り、電車會社に反對したることなきが如きは、曩昔牟田口元學氏との交誼深く、現に知事時代に、行き掛けの駄賃的に鐵道馬車の値上げを許可したりし緣故あるが故なるべし。

吾人は亦茲に一異聞を耳にせり。去秋城南の某處に於て、舊曆九月十三日夜の觀月と稱して淺酌低唱の宴を催ふせしものあり、會するものは電車會社の安藤氏(保太郎)と、一代議士、二新聞記者なりき、此の代議士は政友會と常に反對の體度を取るのみならず、公然電車にも反對するを例とし、而して記者は最も强硬なる電車反對家なれど、其の實電車のため參謀たる者也、當夜は電車値上げの方略として、實業家の一派と聯合の政治的大會を催ふし、而して此の實業家の電車値上げに賛成すべきを豫期し、實業家を殊に重んずる内閣をして、若し實業家の意思を容れずんば、一般の政治的大會亦擧つて實業家の尻押しゝて内閣に反對するに至らんと危惧せしめ、以て値上げを認可せしむべき計畫にして、先づ其の運動費として、安藤氏より二萬圓を提供せしむるを約したりしも此の記者等に避く可らざる支障起り、且つ其の計略稍々外間に漏れたるを以て、竟に中途にして沮止したりしといへり、吾人は亦頗ぶる惟まざるを得ず、何となれば此の代議士も、記者も、電車値上には極力反對すると亦例の如くなりしを以て也、但だ其の會合したりし場所が今尙ほ代議士と記者等の本陣の如くなる丈けは事實也。

吾人は電車會社に思議す可らざる暗處多きに驚ろくと共に、又政治的運動、殊に電車に對する運動に怪聞多きを異とするのみ。

(四)

電車會社には、更らに明白に怪むべき所多し、其の現在線路の百哩に過ぎざるに、資本額の四千萬圓といふ巨大なるは最も著るしき一事也。

京濱電氣鐵道の線路は約十七哩にして、其資本三百萬圓也。阪神電氣鐵道の線路は二十哩にして、而して其資本及び社債を合せて三百萬圓也、即ち前者の一哩平均は十七萬六千餘圓にして、後者は十五萬圓也、然るに東京電車のみは一哩平均四十萬圓にして、殆んど彼れ等の二倍半以上なるは何ぞや、尚ほ未成線を布設すべき材料ありといふ乎、市區改正に費用を要すと謂ふ乎、營業費に多額を要すと謂ふ乎、然れども京濱と阪神とには、線路敷地を買收する費額あることを忘るゝ勿れ、兎にも角にも、一哩平均四十萬圓なるは餘りに高し、否、資本の孰れにか消散せしものあること爭ふ可らず。

其の消散せしは、最初利益金として株主に配當されたるか、將た政治運動、殊に醜運動として諸種の方面に配布せられたる乎。

（五）

電車會社は實に一種の恠社也、其の初め星亨の鐵腕に由て成立したりし時より、既に恠社たる先天的性格を具備し來れり、之を聞く、當時雨宮敬二郎氏は電車のため二萬圓の手形を懷中して、屢々政客の間を遊說したりと、今の電車會社は、雨宮派、星派等の合同したりしものたることを忘る可らず。

野性の政事家的、壯士的重役をして、常に萬金を政客新聞記者の間に散布せしむる會社の如き、世間豈多く類ある可んや、斯の如き恠社は、宜しく其の組織を一變して眞の會社たらしめざる可らず、然らずんば絕へず惡毒を市政及び政界に橫隘せしむ可ければ也。

思ふに電車市有を心よりして希望するものは、今を以て正に其の好機會なりとすべし、電車を市に買

上ぐるに、株主に交附するに額面五十圓(株式額面五十圓の代價)として大約六朱内外の利子を附するも、株主は多く異議ある可らざれば也、東京市長、市參事會、市會議員其の心なき乎、會社の贈賄を受け會社の指揮を奉ずるにあらずんば、手も足も出でずとするが如きは、餘りに無能無知ならずや。



至適存續論

和田垣謙三

至適存續の四字は予の新に案出したる字面、從つて始めて此語に接するものは、或は多少奇異の感なくんばあらず、之を分り易く言へば俗に所謂優勝劣敗の義なり、否義に近し、去れど至適存續と優勝劣敗と此二者間には大なる相違あり、予の今少く辯を試んと欲するものは職として此一義に存す、

世の學者、下は動植物より上は人間並に人間社會に關する凡ての學問に進化の理を適用し説明することに一致せるが如し、進化論とは所謂 Evolution にて、その此の如きを致すものは詮ずる所之が最も眞理に適合し、一切の説明に便なるが爲のみ、進化論の聲を聞くこと我國に於ては比較的早く、明治十年前後、予等の書生時代に始めて敎場に於て之を聽き、尚ほ敎場外に於ても內外先輩の講演に於て之を耳にし、存外速に此說の普及を見るに至りぬ、されど短日月の歷史の間にも尙ほ多少の進化はあり、現時進化の說は何人も容易に了解するところなるも、その初に當つてやエヴリユーションの譯字は諸說紛々一定し難かりき、予の知れる限りに於てもその變化實に五六回に上りぬ、即ち「變遷論」といひしを嚆矢とし、次いで「轉化論」「轉遷論」あり、予等の就いて學べる中村敬宇先生は「變進」の字面を用ひられぬ、その後予等七八人の同人、當時の文學部に在りて多少哲學を研究するに至りし時、今より回顧すれば頗る生意氣なる談ながら、當時未確定の諸術語に統一を與へ一個の字書を編まんとの企をなし、外國の哲學書を基礎となし、之に邦字の譯語を當て行

きぬ、斯くて遂に四五名の名の下に哲學字彙と名けて出版し、その後更に有賀長雄氏の増補して公にするに至れるが、中に就いてエヴリユーシヨンの譯語には頗る肝膽を碎きたりき、同人中易を引證して「變進」「變遷」「轉化」等の字面悉く妥ならずとなし、易には萬物化醇の語あり、化醇又は醇化といふもの即西洋のエヴヲリユーシヨンに當る、之を棄てゝ他を用ふべきにあらずと説ける者あり斯くて予等同人は「醇化」或は「化醇論」の、譯字に一決しぬ、然るに此譯字も今日に於ては一般に忘却し去られ、別に「進化」なる字面の行はるゝに至りぬ、案出者の誰なりしかを明にはせざれど、字義の妥なる之に加ふべきなしと信ず、兎に角此の如くエヴリユーシヨンの譯語それ自身に於て右の如くにエヴリユーシヨンあり、小歴史あり、自餘進化論中の諸熟語諸用語の、今日に至るも猶未だ歸一を見ざるものあるは固よりなりとす。

進化の本は生存競爭にあり、英語にて言へばストラツグル、フオア、エキジステンスにして、ストラツグルは競爭、エキジステンスは生存なるが、その結果として更にセレクシヨンなるもの來る、即ち淘汰なり、淘汰に亦二あり一はナチユラルセレクシヨン即ち自然淘汰、一はアルチフイシアルセレクシヨン即ち人爲淘汰是なり、此等の字面は三十年前に成立して爾來世に多く用いらる、されどこれ以外に進化論には更に必要なる語あり、原語の所謂サアヴイヴル、オヴ、ゼ、フイツテストなるもの是なり、予等は曾て之に當つるに至適生存の文字を以てし、其儘字書にも用ひて自ら怪まず、世人も亦攻撃を試みざりしが、熟思すれば粗漫の失を免れず、前にはエキジステンスの原語を譯すに「生存」を以てし、後に又サアヴイヴルの原語を譯すにも同じく「生存」を以てす、エキジステンスとサアヴイヴル、兩者その意義を異にするに對して等しく「生存」なる同一字面を當つること素と有るべからざるの事のみ、然るに當時に於て疑はれざりしのみか、今日に於ても惰力よりして往々猶ほ右の文字を見ることあるなり、されど一般より言へば、此字面は左程普遍に

用ひられ居らず、用ひられ居るは却つて優勝劣敗の四字之なり、此四字は弱肉强食、優勝劣敗などと熟し、恰も生者必滅、會者定離などいふ字面と同じく、語調に詩的なるところありと雖も義に於ては決して原語の「サアヴイヴル、オヴ、ゼ、フイッテスト」を正しく傳ふるものに非ず、フイッテストは形容詞の比較最上級にて、「至善」などの「至」の義を帶ぶるものなり、然るに優なる文字に曾て此義あることなし、從つて進化論の眞理を傳ふる文字としては決して妥當なりといふを許さず、此かる譯語の穿鑿だては、學者側には必要にもあるべけれ、一般社會に見れば尙ほ不妥なる譯語例へばエキスヒビシヨン若くはエキスポジシヨンに對する「博覽會」の如きものの存すること少からず、それのみを左迄に尤めずもあらんといふものもあるべけれど、それにして苟も害なき種類に屬せんには已む、然らずして此優勝劣敗の文字の如く、誤用濫用の結果が、惡用害用となり、少しく誇大かは知らざれど、人を過り世を害する恐あるものに對しては等閑視すべからずとなす。

予は徒らに文字の末に拘りて爭はんとするものにあらず、實に意義の關するところに重要なるものあればなるのみ、それには少しく進化論の由來を語らん、今日進化論と稱ふるものの發生發達は實は進化の結果のみ、印土哲學に「能生」「所生」を說く、能生はアクチヴにて所生はパッシヴなるが、進化論は或る意味に於ては能生なり、又或る意味に於ては所生なり、斯くて所謂「能所一如」「能所不二」の哲理にも附會し得べき程に、その由來する所決して一朝一夕にあらず、凡そ物無くして突然生ずるものはあらず、既に有るものの變化し來ることが即進化論の說く所なれば、進化論自身も亦自ら然らざる能はず、進化論は希臘にもありき、ヘラクリタスにパーペチユアル、フラックスなる語ある之を證す、東洋にも易などの中にあり、否易なる文字そのものが既に變化を意味す、而して化醇などいふ文字に至れば更に然り、日本に於ても鴨長明は言はずや、「行く川の流は絕えずされど元の水にあらず」

と唯只一個のもの而かも生々化々として動いて止ますとの思想は、東西共に多少古よりあり、されど之を完全なる學說に完成し、一個秘密の函を開く鍵となし、形而上形而下を分たず、その適用を圖るに至れるは極めて近世の事に屬す、それにも亦種々の歴史あり、以下少しく之を語らしめよ、事予が所修の專門學界の事となり、多少我田引水の嫌なきに非ずやを保し難きも、而かもその事實なるを如何せん、

經濟學界にマルサスの人口論なるものあり、困難なる問題にて動もすれば誤解を招くの恐あれども、詳なる事は玆に省く、氏の著書は初め千七百九十八年に公にせられたり、その所謂人口論なるものは、單に書齋裡に思索せられたるのみにはあらず、身親しく各國を廻り、之を事實に徵し之を眞理に鑒みたるもの、一々根柢あり、然れどもその初に當りては種々の誤解を買ひ攻擊を受けたる事も少からざりしかど、此の人口論に貫通する思想はと問はん乎、そは實に生存競爭の四字に存す、マルサスは之を人類の上にのみ論じたるも、生存競爭の事たる啻にそれの上にのみ限らるべき事にはあらず、生きとし生ける禽獸蟲魚、否更に動物より低き植物界に至るまで、總て此生存競爭を見ざることなし、故に社會的或は經濟的の目よりマルサスの論究したるものを、百尺竿頭更に一歩を進めて生物學界に移さば何くんぞ其處に應用の道なからざるを得んや、學者はその着眼高くして且つ大なり、即ち此見地よりしてダーウヰンの進化論なるものは生る、後又スペンサーその他の人々ありて愈よ益す應用の範圍を擴張し、是に所謂一切の秘密の函を開く唯一の鍵とはなせしなり、ダーウヰンの進化論のマルサスの人口論に胚胎したる事實は、そは彼が獨逸のヘッケルに與へし書信中に詳なる所、ダーヰウン如何に偉なりと雖も、此ゝる思想の突然彼が腦裏に湧出すべきにあらず、之と同じく、マルサスの人口論將た、突然彼によつて生れ出づべきにもあらず、進化には種々の階段あり、進化論には永き歴史あり、而かも此の進化論が、我國の一般には如何ばかりの意味に解せらるゝか、進化論の我

國に行はるゝ頗る早しと雖も、之にして誤解せらるゝあらんか、啻に益なきのみならず却つて害ある事とならん、曾て獨逸人に對して貴國にサアヴイヴル、オヴ、ゼ、フイツテストに當る好字面ありやと問ひしに、無し、唯ユーベルレーブング、デル、ゲアイグネテステンの字を當つと答へたりしが、その譯語は頗る晦澁なり、之を邦語に譯せば適種生存、適者生存、否至適生存の文字最も可ならんとてそれに定めたる事己に述べたるが如くなりしとはいへ、熟思すればそれも猶ほ完全にサアヴイヴルと、エキジステンスとの譯語の區別を有せざるを如何せん、是予の此處に新に至適存續なる字面を提案する所以なりとす、

存は生存の存、續は繼續の續、之を熟して一字となせば其處に長く續きて生き殘るの義を含ましむるを得、サアヴイヴルの原語を傳ふるに最も忠實なるもの他辭の之に代ふべきものなしと信ずるなり、されど此譯語果して世に普及せられて存續するを得べきか、是れ既に至適存續の問題たり、兎に角予はアラユル機會を利用して勉めて此語を江湖に紹介せんとするもの他意あるなし、今日優勝劣敗なる誤譯大に世に行はれ、害用せらるゝものあるを見て、その誤を正し害を除き、代ふるに穩健妥當なる文字を以てせんとするもの、是れ過を改むると共に兼ねて眞理を普及するといふ、積極消的兩様の力の存するを信ずればなり、然り、此處には更に優勝劣敗なる文字の何故に不可なるかを見ざるべからず。

優勝劣敗の文字が原語を傳ふるに忠實ならざるは既に說ける所重ねては言はずもあれ、その意義に就いて詮考せんか、之を優るものは勝ち劣るものは敗るの意に解し、重きを優劣の二字に置き見んか、優の勝ち劣の敗るは自明の理にして別に斷定すべき程の價値あらず、然らば更に注意の方面を變へて重きを勝敗の二字に置き、優劣の別を結果の上に立て、勝者は優なり敗者は劣なりとし、勝者をのみ徒らに謳歌せしむるの語となさんか、此の如き勝てば官軍敗くれば賊軍流の語には、實に恐るべき危險の分子を包含するもの所謂

成敗を以て事を論ずるものにて、その害や計るべからざるものあるべし、之が爲には暗殺も行はれん、之が爲には毒殺も行はれん、謀反行はれん、盜賊行はれん、放火行はれん、勝たんとの目的の爲には如何なる卑劣手段も亦辭せられざるべし、近來我國には成効なる文字一種の流行となり、亞米利加に於けるサクセスなる語と相呼應じて喧傳せられ、一向ら事功の結果にのみ着目しその他を問はざる傾あり、此の如きは果して喜ぶべしや否や、

實情を探れば彼等に斥けらるゝ失敗者中にも世に現れざる美點を有することあり、只自己が劣敗者として葬らるゝが爲に、天知る地知るそれ以外には何人にも知られざる美點は、遂に其儘にして又同じく無何有の中に埋沒し去らるゝに至る、之に反して成功者に至れば、所謂月明にして星稀なりにて幾多の缺點あり汚行あるも、唯一成功といふに糊化せられて全然忘却し去らるゝものあるなり、之を小にすればボートレース若くはベースボールの如き些々たる競技の上にも見るべし、誰も知るべし英國にはフエヤプレーなる語あること、我武士道に於て見る如く、卑劣なる手段を忌む、その爭や君子ならんことを欲す、夫れ君子の爭には勝敗以外別に見るべきサムシングを有するなり、さればそ斯る空氣に養はれたる靑年が、他日社會に出でて或は實業界若くは政治界に立ち、角逐を試むるの際にも常に此心を持し、胸中曾てフエヤプレーの語を忘却せざるを致す、然るに我國に在つては只念を勝敗の結果に懸けて手段の如何を顧みず、優勝劣敗なる、誤られたる意味のエブリユーションを以てこは天則なり、人性の自然なりとし、金科玉條として尊みて一向ら勝敗の跡にのみ心を奪はれんとす、此の如きは英國等にて見るを得べからず、競爭は可なり、競爭は社會の發達に連れて元々免るべからざるの數なりとはいへそれが此の如き優勝劣敗の美名の下に行はるゝは斷じて與するを得べからず、例へばフリーコンペチシヨン、即ち自由競爭なる事は或る意味に於ては甚だ可なり、されど所謂自由競爭なるものは、競爭即その義の全分にあらず、或る

意味に於ては强者は多少自ら抑損する事あり、然るに日本にては然らず、競爭以外何等の意味なく、勝を制すれば可なりとなすもの往々にしてあり、ある猶ほ可なり、之が學理的好名の下に隱れてサインチフヰックサンクション、即ち承認を受くるが如き觀をなすに至つては弊害甚だ多しとなす、サアヴイヴル、オヴ、ゼ、フイッテストには決して如上の義なし、弱肉强食は如何にも生存競爭の實況にてもあらん、されど只それのみにて盡せるものならんか、此世に何の法律をか要せん、政府をか要せん、將た風俗その他の一切をか要せん、單に優勝劣敗、世は紛爭の儘に任して可なる事とならん、これ此誤譯文字の實際社會上に弊害をなすの恐れあるを知るべし。

更に此意に通曉し易からしむべく、サアヴイヴル、オヴ、ゼ、フイッテストの語の背面を語らんか、之を經濟の例に籍らんに、誰も知るらん如く、貨幣にはグレシャム法なるものあり、之を簡單に說けば貨幣中に自ら優劣の二種あり、金若くは銀の中にもあり、或は硬貨軟貨といふが如く優劣の別あることとなるが、これが同一貨幣市場にありといふ場合の如き、その勝敗の決は甚だしく普通人の考ふる所に異なるものあり、現にスペンサーの如き此の點に於いて大なる間違をなしてその痕跡を著書の上に止めぬ、即ちグレシャム法によれば前に自明の理としたるもの此處には自明の異理とならず、優敗劣勝となることあるなり、優貨が敗れて劣貨が勝を取るなり、例へば我國に於ても明治十年頃の事なりき、墨西哥弗の惡貨に代ゆる爲貿易銀なるものを大阪にて造りし事ありしか、忽ち海外に流出して跡形を止めず、探査の結果、その良貨幣なるが爲に支那に行きて鑄潰さるゝものなるを知りぬ、是ぞ所謂グレシャム法の敎ふる所にして、失敗談とはいへ學術上頗る興味ある事實なり、スペンサーと我政府と共に此理に暗かりしが爲めに失敗を致せり、その由て來る所は人情に存す、ベーコンの言へるが如く、貨幣は肥料なり、之を散ずるに於て用をなすもの、而かも一度手にしたる貨幣を己が手より放つに當つては、その品

質の佳なるを殘して可ならざるを渡すこと來と自然の傾向たり、此に於て惡貨幣却つて頻繁に融通せられて貨幣の本分を盡すに至る、所謂憎まれ子世にハビコルの類なり。此の如き場合に於て優勝劣敗の文字は全然其權威を失ふことを知るべし。

更に又一例を言はんか、蟲に保護色といふ事あり、山野を跋渉する銃獵家の如きは熟知する事ならん、人又は鳥類の眼を免れんが爲には、夏木立の翠色滴る嫩枝に棲む蟲の色は自ら青く、冬木立の病葉黄なる老枝に棲む蟲の色は自ら黄なり、其他白き蝶の白き花に、黄なる蝶の黄なる花に止まるも亦同一必要よりして來れるもの、以て適種の存續を結果するものたりと雖も、その色に就いては彼と此との間に優劣を分つべきなし、彼の色は彼にありての適種なり、此色は此にありての適種たり、兩者の間、單に適不適といふ以外何等優劣の判斷を容るべき餘地あらず、

之を人間に就いていふも亦然り、世に大は小を兼ぬといふ語あるも、大才を小處に用ひては實際大に過ぐ、適才を適所に用ふる事是れ實に至適存續の要求する所なるが故に、局長の事務を草履取に任ずの不可能なると同時に、草履取の事務を局長になさしむる事亦不經濟の弊に墮す、優劣と適不適の義の異なるは、斯の如く相去る事萬里なり、予の聞く所によれば支那の一部分朝鮮又は球琉等には泣男なるものあり、涙を垂れて葬式に從ふを以て職となし、その巧なるもの程厚遇せられて日當を受くる事多しと、誰の涙の長さ五寸なり、一尺なり、一尺二寸なり、羨しくて學ばんずるにも學び得ざるべき特種の藝能にはあれど、決して是れ優者とはいふべからず、普通人としては劣者たるに相違なし、而かも此る風俗の存在地に於ては明かに一種の適才なり、サアヴイヴル、オヴ、ゼ、フイツテストとは唯周圍境遇に順應し適合し行くの謂なり、而して存續するの謂なり、決して優劣の品等によつて解を立つるものには非るなり、之を是れ思はず、學術的價値ある用語を優勝劣敗の義に誤認し誤用するに至つては、原語の意味洞焉として沒了するのみならず、今日實業界

並に政治界にて行はるゝ一種汚劣なる競爭に當し、それをすら學理上自然の約束なるが如くに解し世人をして安心してさる場裏に立たんとするに至らしむべく、此の如くは既に字面の適不適といふが如き些々たる議論の末にあらず、事實社會に與ふる弊害の鮮少ならざるべきを信ず、此に於いて一方にはそのごとき有害なる譯字を去ると同時に、更らに他方には予の提案に掛る至適存續の文字を用ひられんことを渴望するものなり、

議員選擧に敗を取るも却つて或は稱すべきものあるやも知れず、その方却て立派なるやも測るべからず、世には賄賂を使はず、虛僞を言はざるが爲に落選するものあり、而して又黃白を自由に散じ虛僞を以て人を籠絡する等、非常手段を以て當選するものもあり、その然るに於ては、敗者却つて勝者に優りて貴むべき性質を具すべきも、唯時勢の溷濁腐敗の爲に、腐敗漢が却て勝を占めたるに外ならず、此場合に於ける勝者は恰も蟲の保護色と擇ぶ所なく、白き蟲は白き花の上の勝者たり、靑き蟲は靑き葉の上の勝者たり、而して白と黑との色彩間には何等優劣の言ふべき無きと同じく、此の場合に於ても腐敗したる境遇に於いて腐敗漢勝者たるのみ單に適種の存續あるのみ、一勝一敗の跡に見て、その性質に迄遡り、優劣を定むべからざるなり、勝者の必ずしも優者たらず、敗者のかならずしも劣者たらざることを明にするは、その治敎の上に影響するところ果して幾干ぞや、是れ大に顧みざるべからず

餘事ながら次に尙ほ一言すべき事あり、昨年亞米利加の艦隊員來るや、彼等には異邦を見たる驚もあるべし、觸目只好奇心に打たれて、此も可なり彼も可なりとし日本の物を持ち歸りぬ、草履面白し、日傘面白しとて持ち歸りぬ、されど草履といひ日傘といひ、盡く日本人に適するが如くに作くられたるもの、日本人の小なる體軀に應じてのみ、足に穿ちて不便ならず手に持ちて不調和ならずとはいへ、碩身仁王の如き彼等に在つては其草履を强いて穿たんか、足に苦痛を免れず、

其日傘を強いて持たんか何處かに不調和の潛むを覺ふべし、こは僅に一例のみ、その他一切の裝飾品の如きに於ても、總て他のものとの配合如何と見て造れるもの、即ち左右に顧みて事情に最もフイツトしたるものを選ぶ、それをしも想はず、一圖に珍しとて彼地に齎し歸るとも決して實用に適すべくはあらず、日本人の歐州に行くに於ても亦同じ、歐州に往き、蟲のみを見てその葉を見ずに捕へ來るが如き事少しとせず、而かも自ら覺らず、青き蟲を白き葉に置き白き蟲を青き葉に置きなどし、遂に蟲と葉と相得ず、空く嗤笑の料となることあり、玩具の如きものにすらあり、而して大きく言へば社會の制度文物の上に於ても存す、物の取捨を誤り、取るべきを取らず捨つべきを捨てずして、徒らに悔を貽すこと稀なりとなさず、至適存續は不磨の眞理なり、常に此眞理に顧みて動止するに非んば誤る。如何に華麗なるものとて、それにして歐州の氣候に適せざらんか、その品の何の種類たるを問はず、彼地に輸送せば唯一瞥視の下に嫌惡し去らるべし、故に商人の如き、貨物を輸出して市場を彼地に擴めんとするものに在つては、毎時その空氣は如何、人々の嗜好は如何と細心の顧慮を拂ひ、凡ての事情に篏まるべく勉めざる可からず、テーストにして合はざらんか、先づそのテーストより輸出し、彼地のテーストを改め齎きて然る後に事に從へば可なり、之を政治に移して語らんか、代議政治を施すの前には、先づ以て一國の人民を政治的に教育し置かざるべからず、然らずんば彼等にそれだけの知識なく、從つて代議政治の妙用を盡すを得ず、此事至難なりとはいへども必ず先づ爲さゞるべからざる事なりとす、日本の如きは此用意に於て多少粗なるところあり、至適存續の眞理は隨處に顧慮せられざるべからず、然らずば勞徒らに多くして功は之に伴はざらん、此頃も或る人の依頼を受け、下らぬ事に十四五日頭を惱ましき、小堀遠州愛吟の句、茶道といはんか茶味といはんか、その眞諦を語れるものに、

夕月夜海少し見ゆ夏木立

なるものあり、之を英譯してよとの事なりき、予は咄

嗟の間には少しく寫せざる能はず、暫く時を與へよ、切めても一週間程はとて諾したりしが、さて寫したりきその「木立」といふことに。こは支那にもあらず、强いて宛つれば「叢」字ならんか、兎もあれ日本の「木立」なる語は面白し、夏木立といふは、冬木立の反對なり、而して空は日中にあらで夕月夜なり、月の光も淡し、而して木立は夏の木立故繁からざるを得ず、淡き光に濃き森を透して海を見るといふ事故、海の見ゆることも亦少からざるを得ず、「海少し見ゆ夏木立」オブジエクチーヴに解釋すれば、一方には夕月懸る、彼方に海纔つかに見ゆ、而して木立あり、唯此れのみ、されどこは決して單にオブジエクチーヴの觀を爲すを許さず、遠州先生の之を見たる、實に美術的に見たるなり。而して此趣味は正に日本の趣味なり、日本の趣味を代表するものなり、之を婦人の着物に見るも、表に盡く現はれて綺羅やかなるを採らず、中に隱れて趣の忍ばるゝを愛す、即ち夕月夜海少し見ゆなり、覗いて見れば海は大きく見ゆれど、表にはその小部分のみを示す、示さるゝその小部分は、決して茶碗底の溜水にあらずして、實に渺茫たる無際の大海原なり、全面は其處に呈露せられず、露骨を嫌ふ、餘地あるを喜ぶ、これ我趣味の特色なりとす。

A moonlit eve:
A glimpse of sea,
Through the summer grove.

豈唯美術のみとなさんや、人にも亦然るところあり、人には奥行の知れざるところあれかしと思ふ。大人は鐘の如し、强く打てば强く鳴り、輕く打てば輕く鳴る、鳴るの量や測るべからず、といふ如きもの是れ正に東洋の趣味にして從來一部の人には最も能く適したる主義なりき、而して今後とても尙ほ幾分此主義此趣味を保持し行くこととなるべく、此の如きは東西兩洋明にその方途に於て差異を見るところ、而してその差異あるところ、却つて彼等西洋人より見て面白しと感ずる節なりとはいへ、此事は直に西洋に移植し得可からざること、猶ほ西洋の事はその儘直に我國に移植し得べか

らざると理相同じ、されば將來流行の衣服下駄等の細より凡ての事情、大にしては一國の文學に至るまで、何處までも此サアヴイヴル、オヴ、ゼ、フイツテストの眞理を眼中に浮べざるべからざるなり、此意味を以てすれば、至適存續なるものは實に有らゆる秘密の寶庫をアンロツクすべき鍵なり、煌々たる燈明臺の如く、渺茫たる海面を照すなり、その義や無邊なり、此くも無邊の意味ある言語を只優勝劣敗なる俗字にて譯するは、啻に學者が苦心の餘に、形而上形而下に大功を奏せし、その語の鋭き勢と面白き趣とを一併して失ふのみならず、却つて意外なる點に於て害を社會に及ぼすべしと信ず、予は優勝劣敗なる文字を呪ふ、されど此呪はれたる文字が、永劫に亘りて行はれんか、至適存續の字面を主張する予の敗北とならん、兎もあれ勝敗は時の運豫め必すべからず、されば先づ一たびは土俵の上に上せて輸贏を試みしめざるべからざるなり、此に於てか此意を公にして敢て江湖に訴ふ。

トルストイ

上田敏

昨年露國ではトルストイ八十の祝賀があつた。其數月前から歐米の新聞雜誌は此催について、とりどりの評判を掲げて、或は露國官僚の禁遏があるだらう、いや各國の老伯崇拜者が盛大な會合を催すだらう、などゝ云つてゐる內、伯は突然かゝる祝賀めいた事は好まぬ、自分平生の主張にも合はないと言出したので、折角の企も一時頓挫の姿となつたが、熱心な信徒たちは仲々の意氣込で、終に地方地方に集會を開いたり、新聞雜誌等の上よりして、頌德讃歎の辭を呈したといふ。十九世記の一大偉人、近代文明の根柢を震盪しようとした老伯が、八十の高齡に達して、なほ精神の衰弱を見ず、今に其獅子吼を絕たない壯觀に對してかゝる祝賀は當然の事である。

この獅子吼の一聲を小生は昨年の夏巴里で聞いた。祝賀の噂が世間に傳つてゐた頃であつた、一日、マタ

ン新聞の數頁に、老伯はいつもの如く近世文明の虛僞を痛論して、加ふるに露國内政の悲酸苛烈なる事を暴露した。鮮明の印象を讀者に與へる所を見ると、如何にも觀察の深刻なのが察しられ、慈悲哀愍の情は文辭の外に溢れてゐた。何事も現狀を標準として、少しても根本の改革を恐れる人々には、勿論同意を得難い議論であるが、苟くも人生の不備不完全を感情の上から觀察する者には、論者の眞面目と同情とが會得される。然るに稍不思議に思つたのは、其翌日の同新聞に、巴里在住の露國革命黨の一部が、老伯を非難した記事の載つてゐた事である。彼等は老伯の言行が露國政治上の改革に何等の良好な影響を與へないのみならず、所謂無抵抗主義の主張を以て、露國農民の向上心を麻痺せしめる爲、憂國の志士の運動が妨害せられ、焦眉の急とも謂ふ可き幾多の革新施設が遲延する事に憤慨して、終に老伯を僞の預言者とまで罵つてゐた。トルストイは勿論露國官僚派の憚る所であるが、さりとて政府に反對する幾多の革命黨にも信仰されてゐない。露國の新思想を代表する政論家、道德論者、はた又藝術家は、老伯の道德、社會、政治、宗敎等に關する言論に一も二も無く、渇仰盲從してはゐないのである。是邊の事情を稍明らかにするには、昨年老伯八十の祝賀に當つて、露國の言論界が如何なる狀況を呈したかを知るのが早手廻てある。

現代思想界の渦中に身を投じて、老伯の如く萬事、攻擊應戰の態度を取り、近世文明の諸制度、即ち軍隊、敎會、國家、法律、政府等を容赦無く攻擊するのみならず、宗敎や、學術や、藝術に迄根本の非難を加へる時は、假令如何なる天才と雖も、猛烈な反感を買はねばならぬ、從つて非常な憎惡を招ぐのも怪むに足らぬ。老伯反對の徒が抱いてゐた平生の怨恨は、今回の祝賀に會して爆發した。まづ希臘敎會の最高府、神聖（シノド）宗敎會は第一着に反對運動を開始して、此祝賀に少しでも參加する事を信者たちに嚴禁して、熱情ある、又信仰心のある露國大民衆を祝賀者の群より引去つた。露國敎會と少しも關係の無い人は、之を目して頑冥不

義の擧と許するであらうが、苟くも希臘教會としては、當然取るべき態度であつて、何も今回急に思立つた處置では無い。然し一見不思議なのは、かの革命黨員の同情が少しも老伯に向はなかつた事で、現に極端な其一派は老伯を暗殺すると迄脅迫した。實に奇拔な祝賀法である。昔より預言者は其故郷に重ぜられぬとはいへ、事情如何に關はらず、老伯の如き絶代の天才にとりて最も痛ましき事である。

莫斯科はヤスナヤ・ポリヤナの莊にも近く、老伯の屢々滯在した都會であるが、此處の官府から一切の祝賀を嚴禁する命令が出た。市會は大多數を以て祝典參加の決議をしたが、此禁止令の爲、政府と市廳の間に多少の衝突があつたといふ。其他シムビルスク、タムボフ、ツウラ等の諸縣でも祝賀禁止の爲、幾多の騷擾があつたが、一番烈しかつたのは、サラトフ縣であつた。此處の議員は官府の禁止令があつたのにも拘らず、祝賀の當日、市の諸學校を休ませて、尊敬の意を表はさうとした處、會々一議員が斯る決議は不名譽だと云出だしたので、忽ち大混戰を惹起して、今に兩派の葛藤が已まぬさうである。其他ツァリチンでは熱狂した一僧侶が、大群衆の前で、トルストイ及び其作品を咀つた、ロストフでは市街に喧嘩があつたといふ。

然し以上は官僚や教會の所業である、或は無教育の人民が騷いだのである。さて一般文壇の評判はどうであつた、智識ある國民精華の士はどういふ態度を取つたらうかといふに、流石に此社會の老伯に對する態度は、頗る體を得てゐる。群衆の躁暴な示威運動や、地方官吏が奉公振つて、何等の命令をも發しなかつた中央最高府の爲に、檢束牽制を加へるのとは全く異ひ、露國各黨派の主な新聞雜誌に掲げられた評論、記事、註釋、追想談等は、皆老伯に對する熱心な讃美頌德であつて、衆口一致して、彼を露國の光榮と仰ぐ可き大文豪としてゐる。一見何等の不和もない讃歎の合唱であるが、さて、また何となく言外に多少控目の所もあり、甚しきは反對の聲も雜つてゐる。

茲に不思議なのは露國思想界また政治界の二大黨派

が、揃ひも揃つて、老伯の宣傳する思想又は論理觀に反對する事である。一方の自由派には種々の色合があつて、極端な革命黨も穩和な進歩黨も含まれてゐるし、他方の保守派とても亦同樣に小區別はあるが、兎に角此二大潮流が今日の露國を代表して、其勢力の消長が大帝國の歷史を作つて行くのであるが、老伯は今双方より稍疎外されて來た。老伯を目して天才の小說家、藝術家、文學者とするのに誰も異論は無い。然し其社會改革家、人類救濟家として、幸福の未來を指示し、文明の結果を放擲せよといふ、說敎に對しては、あまり耳を傾けない。かゝる種類の贊辭が老伯に取つて不愉快であるのは勿論である。然しそれは始から解つてゐる事で、寸毫の假借無き革命黨にも、頑固な保守黨にも、彼の無抵抗主義、又は虛僞文明破壞論が喜ばれないのは、當然期待すべき結果である。而も此兩派の中間に立つ進歩主義の人々と老伯との間が面白からずなつたのはこゝ數年來の事で、新時代の露西亞人は國家軍隊戰爭財產を全然禁遏せよといふヤスナヤ・ポリヤナの神秘的虛無論者から漸々離反して來た。

今回の祝典に臨んで、露國思想界は幾多の頌辭、幾多の感歎を老伯に捧げたが、終に一の事實を掩ふ事が出來なかつた。トルストイは現代露國の最大文豪である、稀有の天才である、而も其宗敎的社會的哲學的理想は、今日の最も進歩した人士の多數に喜ばれないといふ事實である。トルストイはぴしぴしと容赦無く、其學說を論理上に押進めて終に進歩といふ事を全然否定した。抑もこれが政治上の新紀元に入つて、前途に光明ある好望を抱く今日の露西亞人と氷炭相容れざる所である。露國代議制は運未だ草昧に屬してゐる、而もこれ既に動かすべからざる大勢ではないか。

露國の青年が新時代の曙光を仰いで、熱狂し、喜悅した其當座よりして、老伯は此政治上の新機運を攻擊し嘲笑し罵倒して、必らず其近きに頓挫すべきを預言して、第一議會（ドウマ）解散の識をなしたが、かの不幸なるドウマは、新露西亞の眼には兎角、神聖な自由の象徵であつた。老伯の天才と盛名とを以てするも、國民精神

の此大發揚を誹議するに至つては、人が許るさぬ。殊に遺憾とすべきは、革新の露國に多幸なる未來を望む眞面目な愛國者が、漸く老伯を疎んずるやうになつた事である。彼等も老伯と同じやうに、甚しく舊時代及び其醜事、罪惡、暗黑を惡んでゐるから、其心臟も亦老伯の理想を望んで鼓動すべき筈であるのに、今回の祝典に際してさへ、老伯の主義に反對であると明言してゐる。道德や哲學の見地よりすれば、トルストイは彼等に取つて、赤の他人である、否殆ど敵であると云つてゐる。單に文學の雄を以て屑しとせず、露國精神界無冠の帝王を以て任ずる老伯に取つて由々しき大事てはないか。老伯と自由派との仲違に就いて、なほ委しく調べるのは無益の業でもあるまい。

數年前露國第一議會の頃、多くの人は政界の形勢に關して老伯の意見を求めたがつた。元來今日の露西亞文壇に於ける老伯の地位は他國に比類無い卓絶の座であつて、誰も其文藝上の天才に就いて異議を挿むものは無く、彼は黨派、流派の上に超絶してゐるから、一問題の起る度毎に之に關する意見の發表を望まれるのも無理は無い。そこで此時も諸新聞から訪問記者が押掛けたが、終にノォヴイエ・ウレミヤの記者が面會を許されて、早速老伯の議會觀を尋ねたところ、直に即答を得た。老伯曰く余の議會觀は三つある。第一、滑稽なものだ。第二、厭なものだ。第三、胸が惡くなると。いかに天才でもこれは非道い。成る程、代議制に就いては人々の思はくはあるもので、其意見を發表する自由はあるが、苟も一民族の運命に一新紀元を劃した改革運動を、かう無造作に、同情無く罵倒されては、其運動に熱中してゐる人から反感を買ふのは當然である。老伯はなほ進んで、露國の議會は西歐諸國の糟粕を嘗めるものに過ぎない、寸毫も獨創の分子が無いと斷言した末、自己の改革案を提出した。元來露國目下焦眉の大問題は土地分配の問題であつて、國民の幸福は實に其解決如何に依つてゐるのであるが、之に對して老伯は殆ど信じられぬほど不思議な意見を吐いた。即ちかの名高い米國の經濟論者ヘンリ、ジョオジの單税論を採

用せよといふのである。租税を土地だけに課して、他の税を廢せば、忽ち黄金世界が現出して、あらゆる社會上の不公平が已むといふ奇論を、この天才が採用したとは實に驚くべき事で、無數の社會政策中、特に此單税論を選出して、確證ある科學的事實又は命令的確説のやうにしたのを見れば、ドゥマだけを目して獨創の分子を缺いた摸倣物とする事も出來まい。而もだんだん意見を質して行くと、老伯は詰り土地收容の原理に關して、第一議會の急進派と同意見のやうだ、否、議會其者より遙かに極端である。議會は少くとも現在の所有者に對して、道德上法律上に賠償の義務を認めてゐるが、老伯の學説に據れば、自ら耕作に從事しない者が、全國民の傳來財産たる土地を占有してゐる事それ自身が罪惡である、無道であるといふので、土地は皆農民に返付すべしといふ簡單な結論に歸する。して見ると單税論とは何の關係も無い。老伯の説はたゞ偉大な收容、否掠奪を恣にして、其必然の結果は團體制の世を作り、私有財産を禁遏しようといふのである。

かゝる矛盾不合理の意見は到底新時代の心服する所で無い。幾多の謙譲ある抗議が表はれたうち、ノオヴィエ・ウレミヤ紙上に出た、近時露西亞文壇で令名嘖々たる評論家メンシコッフ氏の文が最も明快である。氏は曰く、實にわが大文豪の言はるゝ如く、政治は道德的生活又人間活動の最高なる表現では無い。政界俗事のはるか上に位して、冥想もある、内部生命もある、宇宙を理解し再造する哲學もある、文藝、詩歌、美術等、人生の悲しい夢、運命の苦境を慰めるものもある。然し公衆生活を巧に按排して、人民の狀態を改善するものも誰ぞゐなければならぬ。成程法律は益々慈悲寛大に赴くてあらうが、どうあつても無くて叶はぬもの故、之を發布し運用する人が必要だ。實に政治にのみ熱中するのは愚である。而も全く之を除く事は出來無い。而して政府議會等は、平凡且つ必要な物で、それはとても哲學者大詩人の高遠な思索に及ばない事は勿論であるといふので、老伯に對する抗議は一時この文に依つて段落を告げた。

其後露國の議院制も漸々緒に就いて、政治上の革新運動は稍々成功して來が、此間老伯は代議制、單稅論、財政策に關して絕ず意見を變じた。而も進步に對し、社會主義に對し、革命思想に對し、即新時代の崇拜物に對しては、依然として猛烈な反對者である。かくて各黨派中の熱心家は漸々老伯を疎ずるやうになり、之に加へて露西亞國粹黨も以前からの反對を持續し、又最後には資本、軍隊、官府、司法等を後生大事に防守する多數の中流社會は、假令如何なる天才の詩人なりとも、彼等の生命と賴む所の者に一指をだに染めさすまいと自衞する。かくて祝賀の日は近づいたのである。

此時保守派の機關紙ル・ヌウヴオ・タン及び有力なるノオヴイエ・ウレミヤ紙上に、メンシコッフ氏はまたトルストイを評論して、其大小說家として技倆の絕群なる所以を明にし、口を極めて此の大藝術家を讃美したが、老伯自身を評して單なる癇癖家としたのは、あまり極端と思はれる。又た才筆の譽ある評論家ロザノフ氏は、文藝家として老伯を非常に讃歎した末、一日ヤスナヤ・ポリヤナを訪問した事を追憶して、老伯を一の老耄者の如く描いた。成程老伯の病中であつたと庇護してはゐるが、祝賀の日に思出す追想としては妙なものだ。文豪として熱心に老伯を讃美して仕舞ふと、直にかういふ調子で批評するのが、保守派諸新聞の態度であつた。獨りノオヴイエ・ウレミヤの主筆で、殆どトルストイと齡を同うする老大家スヲオリン氏のみは、徹頭徹尾熱烈な讃辭を老伯に呈して、此近代露西亞の天才を頌め揚げよ、社會上哲學上政治上の思想の如きは今關する所で無い。此大詩人の創作した光や美や悲喜の情緒に充滿した作品を味へ、此の人を裁く勿れ、其の高尙な謬見、過失に眼を閉ぢよ、永く人類の記憶すべき此大文豪のみを賞歎せよといつてゐる。かういふ風に文學者として老伯を評論したものは他の新聞紙にも見えた。莫斯科のルスキヤ・エドモスチにはシエンキエヰッチ、ブランデス、カラレンコ、レエンフエルド等歐州文壇の名家が祝辭を呈し、彼得堡の新聞リエチはメレジュコウスキイの長論文を掲げ、ロシヤ及び

彼得堡ガセットにも精密な評論が出た。

然しながら、老伯に關して斯の如く種々の方面から興味ある記事が出たが、皆自から言外に同一の思想をほのめかしてゐる。トルストイは偉人である、不世出の天才である、吾等は其感歎者である、然し其門弟では無い。異を穿ち、悲を湛へ、而も不朽の生氣に富んだ其名作は、永く文學史上の光明として殘るであらう。憂愁の日、失意の時、之を讀んで、吾等は常に高尚な忘我の恩惠に浴する事が出來ようといふのが、一般の批判である。

老伯八十の祝賀に當つて露國文壇の態度は斯の如くであるが、千九百一年巴里の一文藝雜誌ラ・プリウムの特別號トルストイの卷にある佛蘭西知名文學家の讃辭を比較してみると面白い。マルグリイト兄弟、エドゥワアル・ロッド、等の祝辭のほか、エミイル・ゾラは文に、余は小說家としてのトルストイには頗る敬服する。唯道德論者としては、福音を傳ふる人としては、大に意見の相異がある。これはとても短文で述べ盡くされぬ。而して文學家として其天才を認める他に、もう一つ感服するのは、其慈悲心と余と同じく戰爭を憎む精神とであると明言してある。また同號にマアテルリンクの評論が載つてゐる。殆ど凡べての問題に就いて、常に此白耳義詩人の意見に心服してゐる小生は、此トルストイ評にも深く感心した。曰くトルストイはイブセンと共に現代の最大藝術家である。かくまで、切實に、深大に、道德上の感化を與へてゐる人はほかに無い。こゝに道德上の感化といふのは、風教上、或は人間の感情又は思想上に與へる眼に見える作用を指すといふよりは、寧ろ思想より更に遠くに傳はる漠然たる勢力を指すのである。此勢力は一種の洞徹力放散力を以て直に生命の不可思議なる中心に觸れ、無意識ながら既に其活動してゐる精神界感情界の空氣中に一の新元素を輸入するのである。此どうしても分析し難い新元素は漸々此空氣の化學的成分を變更する。而してわれらの思想、否あらゆる思想の不可思議なる母は、此新空氣を明日呼吸するのである。此感化力は二三藝術

家の天稟である。他方面に於て大家と稱すべき他の藝術家には、さういふ跡方が少しも無い。例へばゾラの如きには斯の如き感化力が無い。又近時正義の爲に戰つた彼の行爲の後て、トルストイ風の感化力を授つてもよいやうな正義を再び行ふとも、終に決してトルストイの如き感化力があるまいと思ふ。之に反してイブセンには此才能があるが、どうも其根本が病的なので、其効果は之に依て激發された反動に表れるのみてある。トルストイの感化力は始め曖昧てあつて、中頃慈悲深く、人情に富んで來たが、なほまだ一種病的な幼稚の基督教に囚はれてゐた。然るにそれが日に日に淨化して、近時の作品に表はれたものは、現代の人類が假にかうと定めて考へる思想の最高理想と融會してゐる所が感歎に堪へぬと。

トルストイは近代の大藝術家である。而も其倫理觀宗教觀は採るに足らないほど偏頗なものであると迄は、尋常批評家が論定てきる所て、小生も素よりさう考へてゐる。然し一歩進んでマアテルリンクのやうに考へれば、さきに偏頗として無造作に放棄しようとした倫理觀宗教觀までが活きて來る。然り、トルストイのみては無い、凡べて大天才は實際論よりも絶對論をするものだから、政治風教等の問題を超絶して、生命の根本を突き、道理以上の境に進入する。基督の言、釋迦の教は常識を以て律すべきて無い。降つて近世のショペンハワア、ニイチュはたまたトルストイ等の價値は、マアテルリンクの所謂『思想より更に遠くに傳はる漠然たる感化力』の有無て定まるものであらう。此意味に於て小生はマアテルリンクの説くが如く、老伯トルストイを現代の大天才と敬服崇拜するものである。(完)

桂侯論

無名氏

(前號所載諸家の桂侯論を評し併せて予の桂侯を述ぶ)

『中央公論』の新年號に桂侯に關する評論が出るといふ豫告があつたから極めて興味を以て待ち受けて居

た。一國の政治家は一國の共有物である。其長所も短所も、裏も表も、黒い所も白い所も悉く國民が知つて居るといふ事は國民の當然有つべき義務とも又權利とも、どつちからでもいふ事が出來る。處が雜誌が出來て、いよ／＼之を一讀して見れば—批評は銘々の勝手であつて、褒めたい人は褒め、惡口したい人は惡口するがよいが—何れも餘り急所に當つて居ないやうに思ふ。其中でも三宅博士と島田君の評論丈けはやゝ肯綮に中つて居ると思はれる點もある。殊に三宅博士の主我、沒我兼有の性格として桂侯を擧げたるなどはなか／＼の眼識といつてよからう。然し夫れさへ尚一膜を隔てゝ居るかの如く感ぜらるゝ。依て自分も遲馳せながら諸君の後に從いて一言して見たいと思ふ。

近頃は桂侯も一本立の政治家として世間に許す人が多くなつたが第一次桂内閣の中頃までは桂侯を斯く認めたものは殆んどなかつた。若し世の中に最も知られない政治家ありとすれば桂侯も其一人であらう。或は誤解せられたる政治家としても又同樣であらう。然し何れかといへば、誤解せらるゝは、知られざるに比して寧ろ仕合せである。桂侯の如きは誤解所ではない。殆んど眞面目に第一流の政治家として相手にせられなかつたのである。之は侯が世間の反對を招かず、嫉妬を誘はず、相手に過度なる準備をさせず、我思ふ事をスラ／＼と爲し遂げたる、三宅博士の所謂「エラク見られずしてエラクなつた」一の便宜であつたかも知れん。然し桂なる一個の物體は未だ其眞相について適當なる評價を得て居らぬ。居らぬ所以も即ち亦此所にあるであらう。

若し政治家として、若くは普通の紳士として桂侯の缺點を擧ぐれば、其缺點は多くの人の目に附かぬまでも隨分ない事はない。又た附た所にも可なりにある。島田君は桂侯が常識の大いに發達したる故に其趣味が他の事物に散漫に流れない事を以て政治的成功の因由としたが、之には何人も異存は無いとしても其れが或意味に於ては缺點でないとも限らぬ。即ち桂侯は其容

貌からして何となくフワ／＼して剛膽の人とも見えず、又鬼神をも取拉ぐ强健なる意志の人とも思へぬ。一見して豪傑らしくもなければ英雄らしくもない。此頃米國より來りし或新聞記者は桂侯の容貌を見てビスマークそつくりと評したけれども、此れは桂侯の何人たり、又何事を爲したるかを知つて、知つて、知り拔いて居た上の評論て、若し偶然停車場でゞも出逢ふたならば、まさかビスマークに似た容貌とはいひ得まい。容貌が其通りであると仝時に其擧動も、其言行も通常である。直言すれば一切平凡である。伊藤公などは小さき體を大きく振舞うて、誰が見ても、何所から見ても、己れは大政治家であるといふ自覺心が張りちぎれる程ある。山縣公の如きは頗る謙抑であるけれども、何處やら山縣流の凛然として犯すべからざる所がある。所が桂侯に於ては別段何等の自覺心も見えぬ。人間であれば誰にも自覺心のない筈はない。然し之が見えぬのは兎に角桂侯の特色である、其所で今てこそ左樣の言葉はいふものもなく、又いひ得るものもないけれども、七八年前までは桂侯を目してサーベルを下げた幇間であるといふたものもあつた。夫れから桂侯は東洋の英雄學に最も必要なる大酒も呑まぬ。詩も作らぬ。風流の嗜みもない。伊藤公の如きは書も立派であるし、詩も作る。山縣公も文學にかけては伊藤公に優るとも劣りはせぬ。其書も山縣流の氣骨あり、其和歌は或は伊藤公の詩以上であるといふ黒人の評もある。所が桂侯は其點に於ては殆んど比較にならぬ。又趣味の多角なる點よりいへば西園寺侯などは其標本であらう。處が桂侯は僅かに攝津大椽の義太夫を聞く位が關の山で、俳句もやらなければ盆栽もやらず。書畫骨董は勿論のこと、殆んど何等の趣味もなければ嗜好もない。政治家といへば政治一方で立つ物のやうであるけれどもが、廣翁の人望は政治的手腕と共に其頑迷ともいふべき宗教論や、其獨斷的なるホーマー論などや、甚しきは木を伐り倒す運動や、古本屋漁りや、種々樣々の事で其人望を繋いだのである。所が桂侯は明けても政治、暮れても政治、政治以外に道樂もなければ趣

味もなく、政治專門である。之れは强點といふ事も出來るが又弱點といふ事も出來る。夫れに政治家として桂侯程の如才なき人てあれほど演說のまづい人もあるまい。會話は珠の如く演說は瓦の如しとは桂侯の事てある。日本ては演說は政治家たる資格に英國程大切てないから差支ないもの丶、それても上手に增した事はない。又桂侯は獨逸語は讀む事も出來。話す事も上手てあり、英語も亦一通りは出來るもの丶、讀書といふ事が嫌ひといふてはあるまいが好きでもない。それて其智識は眼から入る分量は耳から入る分量よりも多しといふ事は出來ぬ。あれほどの素養がある人て讀書でもしたならば鬼に金棒と思はる丶が、なか〳〵金棒を持つことをせぬ。それと共に桂侯は氣早き人といふ事は出來ぬ。其缺點は速決てなくして遲決である。然し改めて斷つて置くが、遲決と不決とは別事てある。不決とは早くも遲くもとう〳〵決斷せぬ事てある。遲決とは練りに練つて決斷することてある。此點に於ては桂侯は故兒玉伯に及ばない。然し及ばぬ丈け其れ丈安全であるといふ事も亦爭はれない。斯く見來れば桂侯を目して「一種の投機的政治家で、隨て危險なる政治家てある」といふ冷眼子とか申す人の評論は恐らくは見當違ひと思はれる。

世間ては桂侯が株屋に親しんて投機をするとか、又妾宅を造つて美人を蓄ふるとか、種々の攻擊をする。吾人は如何なる政治家にせよ、其の內行まて穿鑿して批判を下だす必要はないと思ふが、若し無遠慮に云へば、其の素行の如きは必ずしも理想的とは思はれぬ。若し弱點と云はゞ、明眸皓齒の慾は侯に取つて弱點と云ふべきであらう。併し政商に親み國家の大權を弄んて相場をすると云ふが如き事は、恐らく非常なる冤罪てあらうと思はれる。桂侯は數字の考もあり、財政の事にも、又た民間經濟の事にも略々通じて居るから、金錢の事にも多少の趣味はあるてあらう。併し何れかと云へば此の慾は寧ろ淡泊の方で、能く取ると云ふ方よりも能く散すると云ふ方である。桂侯は金持とならうと云ふ考もなく、富家の翁となつて一生を安樂に暮さう

と思ふ人でもない。彼れの本領は政治である。彼れの生命は政治である。政治の爲めに金を棄つる事はあるけれどもが。金を取る爲めに政治を狂ぐる事はない。

元來桂侯は筋書なくして芝居の出來る男でない。人次第では躍りつゝ其筋書を作つて行くものがあるが、桂侯は筋書なくては一歩も動けんのである。其處で善にせよ。惡にせよ、筋書が出來て内閣が出來るのであつて、内閣が出來てから筋書出が來るのではない。例へば昨年來遣り來つた財政整理も、對淸政策も、米國との提携も、國有鐵道の處置も皆其筋書の或部分が行はれて行きつゝあるのに外ならぬのである。若し其缺點をいへば餘りに筋書を考へ過ぎるかも知れぬ。然し臨機應變當るを幸ひ大博奕を打つといふが如き事は之を善き意味に於ても惡しき意味に於ても桂侯には殆んど出來にくい藝當である。例せば三十七八年戰役の如きも一氣呵成に彼處に落着したのではなくて、煉りに煉て、煉り詰めた結果である。其處で桂侯は耳に怯にして目に勇なりといふ事も出來る。物を決斷するまでは右にも考へ、左にも考へ、啻に再び思ふのみならず三度も四度も思ふた上で決するけれどもが、決した上は如何なる事があつても之を動かさぬ。決して動かさぬ。其處で決斷して實行する丈けの事から見れば或は投機的ともいひ、或は一擲乾坤を賭にするともいひ、或は末は野となれ山となれともいひ、或は重大なる事を無責任にやるともいふが、然しそれまでの逕路を考へて見れば、彼ほど叮嚀愼重なるはなく、時としては傍目で歯痒く思はるゝ程馬鹿念の入り、時には入り過ぎて困ると思はるゝことさへある。例へば三十三年役に於て當時の外務大臣青木子が出兵を迫りたるに際して容易に動かなかつたのも、當時の陸軍大臣桂侯であつて、又兒玉臺灣總督等が厦門に出兵した時に際して反對したのも桂山本の陸海軍大臣であつた。かゝる例はいくつでもある。此等の點については、兒玉將軍は固より川上大將の如きも桂侯と多少趣を異にして居る。其處で若し安全をいへば桂侯程安全の政治家はなからう。彼は勇氣はあるが謀議の際には之を出さぬ、彼は只實行の

上に於て之を出すのである。

只實行の上に於て勇氣を出すけれども、出さなくても實行さるゝ時には出さぬのである。彼は何處までも政治上に於ては實行論者であつて虛名論者でない。彼の目的は正味であつて風體でない。其處で名に勝て實に負くるよりも實に勝て名に負くることを取る。其結果で或は陰險とか、東洋流の宦官とかいろ／＼批難されるが、然し宦官でもなければ陰險でもない。只最も手數を掛けず、最も輕便に事をするのが彼の目的であるから、役に立たぬ所に殊更に餘計な力味などをせぬのである。德川家康が日本一の馬乘りといはれつゝ、山川の一本橋を渡る時に馬より下りて徒歩立となり、其家來に負ぶはれて渡つたといふ話の如く、彼は一本橋を渡る事によつて馬乘の達人であるといふ事を證明するが如き見得坊ではない。餘り見得坊でない結果、餘り實行的である結果、餘り物事に空騷ぎをせずして其目的を達せんとする結果、餘り敵にも味方にも手疵を負はせずして相談づくで事をやらんとする結果、いろ／＼惡口もいはるゝが、然し彼は國家の利益と信ずる爲めに、自己の所信を行ふ爲めに、其如く行ふのである。宦官とか何とか國家もなければ何もない只自己本位のものと同一視するが如きは殆んど相手にならぬ批判である。

桂侯が政治家として一つの長所は、スウヰートテンパーである。乃ち其の性質が何時も和平にして、肝癪も起さず、自暴も起さず、如何なる場合に於ても常識の權衡が維持せられて居る事である。井上侯は肝癪の大博士であれば、云ふ迄もなく、伊藤、山縣二老も流義は違ふが何れも晴天曇天の變化がある。處が桂侯には秋空一碧拭ふが如き淸々したる晴天もなき代りに、蒸し苦しく頭痛のする曇天もない。全く無いでも無いが、人の氣に附く程にない。それで滅多に調子にも乘り過ぎぬが、又た滅多に失望落膽もせぬ。且つ如何なる匆卒の場合でも、滅多に疾言遽色せぬ。西園寺侯などはあの顏をして頭から人を叱り飛ばすが、桂侯には殆んと其例がない。之れと同時に又た思切りが甚だ良い。

執着力の強い者は必ず未練が多い例であるが、桂侯は愈よ見込のある事ならば、何時迄ても、執着するが、愈よいかぬと諦むれば塵も附かず全く諦めて了ひ、愚痴も云はず泣言も並べぬ。それで思案の多い癖に餘り胸中に凝滯がない。又た物の表裏を考ふるに拘らず比較的に樂天家である。言ふて見れば晴天もよければ雨天も悪るくはない。傘さへあれば雨天も晴天同樣と云ふ樣な量見である。愈よセッパ詰まれば頭痛鉢卷。蒲團を被つて寢ると云ふ調子では無くして、寧ろ雲隱にでも駈込み鼻歌でも歌ふて居ると云ふ流義である。此れは寧ろ修養の結果であらう。

彼はポリチシアンであつてステーツマンでない、只當座を旨く誤魔化して行く男であつて、徹底したる見解がないといふ論も見えたやうであつたが、それは恐らくは間違てあらう。前にもいふ通り彼は筋書をしてから事をするのであつて、其筋書の根底には國家に對する大經綸、大方針、大主義、大綱領がなくては叶はぬ事である。彼は此點に於ては確かに及第すべき一人である。一言にしていへば彼の政治思想は穩健なる帝國主義であつて、保守黨より見れば進歩黨といふ事も出來、進歩黨より見れば保守黨といふ事も出來る。兎にも角にも事實についていへば凡そ韓國に對して彼ほど明白なる意見を持したものは、最近十年の間に於て多くあるまい。彼は京釜鐵道の完成を早むる爲めに臨時支出を斷行せしめてより東洋拓植會社の設立に至るまで一貫したる方針でやつて居る。又米國に對する彼の政策も殆んど一貫して居る。彼は潮がさして來ぬ時には舟を出さぬ。風が凪いだ時には帆を上げぬ。然し彼の到着すべき港は如何なる場合でもチヤンと定まつて居る。其處で帆を下ろしたからといつて方針を換へたのでもなく、錨を下ろしたからといつて目的を忘れたのではない。彼は部分的には臨機應變黨である。全體としては最も主義主張を貫徹する一人である。處が世の中の人は只一部一部の事を刻み刻んで評論して、却て彼が大體に亘る大方針大政策を閑却して居るのは彼の爲めに些か遺憾である。立法行政の智識は必ずし

も彼れの特長とは云へまい。併し彼れは能く何事も譯が分かるのみならず、理論家たらざる理論家である。彼れは行はれない事は考へぬ代りに、考ふる事は行ひ得べき筋途を捉へねば已まぬ。即ち行ひ得べき道理の上に立たねば行はぬ。世間では近頃彼れも頻りに暴斷をやる樣に思ふが、之れは暴斷ではない猛斷である。或は英斷である。又自分で物事を考ふる者は兎角人が馬鹿に見ゆるが、桂侯は周圍の智識を吸收するに多大の力を持つて居る。自分で發意せぬ事でも、善き事は遠慮なく大膽に無差別に時としては無遠慮に取つて行く。又足許の掛引とか方便とかと云ふ事を考ふる者は、兎角大局の見渡しがお留守になるが、桂侯は何事も對世界の關係より割出して居る。此點では假令へ其の見識では伊藤公に超越せぬ迄も、仕事の上に於ては或は斯く言ひ得る事もあらう。

若し伊藤、山縣の諸公が經世家であるといふ事が出來るならば、彼も同樣の意味に於て經世家であるといふとが出來る。が玆に注意すべきは世間では彼は山縣流の相續者であるといふて居るが、之は山縣公にとつても彼にとつても幾分か寃罪である。事實をいへば彼は伊藤、山縣、井上三人の相續者である。殊に伊藤山縣二元老については彼も多少私淑したに相違はない。然し私淑の仕方は彼等の跡形を其儘踏んだといふてはなくして彼等の跡形について其成敗のあとを考へ、仔細に之を研究して成るべく彼等の短所を避け、覆轍を踏まぬ樣に心掛けたに相違はない。其が全く成功したか若くはせぬか、そは今日に於て評論するは早きに失するも、兎に角二人の缺點を考へ成るべく之を繰り返さぬ樣にとは、彼が最も苦心した所であらう。山縣公は立派な政治家であるけれども彼は何處までも武人たるの本領を固持して、總理大臣として立つも元帥のサーベルによつて立つたのである。其處で其立場は不敗の地であるが、其れが爲に堅苦しくなるのである。例へば山縣流にして立てば第一軍備繰延などいふ事は其本領よりしてする事が出來ぬのである。或意味に於ては山縣公の用心は堅固ではあるが、我れと我手足を縛つて自

由を失はしむる弱點もある。伊藤公は自ら世界的大政治家を氣取り、如何にも大網を打つが、然し計畫多くして實行疎なりといふ傾がある。例へば計畫は定るが、一つの面倒に逢へば直ぐに自暴を起して之を放り擲げるといふ弱點もある。極端をいへば山縣流は政黨を無視し、伊藤流を押し詰むれば或は政黨内閣に歸着せぬとも限らぬ。其處で家康が信長と秀吉の跡を見て成るべく其覆轍を踏まぬやうに心掛けたる如く、桂侯も伊藤學、山縣學を研究して成るべく彼等の長所を取り短所を捨て、其取捨の間に於て桂流といふ一個の機軸を出す積りであらう。其處で政黨に對しても山縣流のやうに無視もせず、又伊藤流のやうに重視もせず、政黨は政黨丈けの評價をして平和の出來る限りは平和の間に政黨と交渉して其政策を行ふべく勤め、若し萬一行けぬ時には憲法上の權力を施行して至尊の御親任ある限りは自家の本領を發揮しようと心掛けて居るのであらう。それで桂侯は山縣流の相續者でもなく、伊藤流の相續者でもなく、桂は其處までも桂であるといふ時節が來るであらう。否な今既に來たのである。其れならば桂は伊藤よりも山縣よりもエライかといへば、其成し遂げたる所、若しくは將來成し遂ぐる所は或は斯くいふ事も出來やう。然し如何なる場合でも前に居るものは前、後に居るものは後で、伊藤山縣は桂に對して今日に於ても先輩である如く、明治の歷史の上に於ても先輩であらう。彼等は桂に比して或は缺點があるかも知れん。然し缺點があるとしても桂をして茲に到らしめたのが、順に取ても逆に取ても彼等の洗禮である。其處で之れは歷史家の任であるが、桂侯は春畝含雪二老に對して或は同位置に立つことが出來るけれども、之を超えて其上に立つことは六づかしいといはねばならぬ。其れは伊藤山縣二老が木戸大久保西郷等を超へて立つことが出來ぬのと同樣である。管仲を起すものは鮑叔である。處が桂侯の爲めに活ける模範を供へたる二元老はなか〳〵鮑叔ではない。彼等も亦特性ある大政治家である。

然し桂侯は後進といつても世間が思ふ程の後進では

ない。島田君もいはれた通り今年が六十三歳であつて、同じ長州人でも鳥尾、三浦などいふ人々の立身に比すれば頗る後れて居る。戊辰の時には巳に一方の參謀をした桂侯が明治十年頃には單に少佐であつて、年齡に於ても軍功に於ても餘り懸隔のなき鳥尾子の如きは此時已に中將であつた。三浦子の如きは少將で旅團長であつた。其處で世の中では桂侯を評して僥倖とか何とかいうて居るが彼の位置は決してさう容易く得た位置ではなくして、只不撓不屈の精神で得たのである。彼の精神は全く不撓不屈の精神である、彼は曲る。よく曲る。けれども決して折れない。そしてやがて元の通りになる。彼の相手となつたものは勝つた積りで居るけれども長き時間の計算に於ては到底彼に負けねばならぬ。彼は或意味に於ては文明世界に通用せぬ程時間の觀念に乏しい。即ち乏しいのが最も多くある所以であるぞ。功を全局に收め、勝を終局に決するといふ事は彼が政治家としても又個人としても今日に至つたる主もなる原因である。

今日は桂侯の政治的總勘定の日でもなく、又は政治家としての總勘定の日でもない。併し島田君が桂侯を管仲に比して評論したのは、島田君の立場から見れば最も面白き評論である。桂侯は今日の時代を最もよく代表する一人である。從つて今日には無くてならぬ一人である。（完）



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我邦と緊密の關係ある清米露等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

各國工業比較の一端と所見

東京電氣株式會社技師長　新莊吉生

（新莊氏が我國電氣工業界のオーソリチーなるは世人の既に詳知する處、昨年七月再び外遊の途に上り、米獨英佛の諸工業の實況を親しく觀察したる上、同十二月を以て歸朝せられたるもの、此處に錄するものは氏が多端なる業務の寸暇を以て特に我社の請に應じて語られたるもの也）

亞米利加から獨逸、英吉利へも廻つて戻つたのですが、如何しても大陸に於ては、工業の盛なる事獨逸を超すものはない、英吉利なども、今では獨逸の後に瞠若たるものである、品物も無論精巧なものが出來るが、何をいふにも一番安直なものを作り出すことに於て他を淩いで居る、日本でも外國で作る程のものは兎に角作ることは出來る、が價をまで同じ樣に作るといふことは出來ない、私の會社に於ける只今の仕事は重に燈球を作るに在るのだが、此燈球の事で少し話して見やう、

千八百十一年頃エヂソンなる人によりて、始めて電燈は發明されたのであるが、その後廿五年間は何等の根本的進歩改善はない、漸く兩三年前から發明が始まつて今では斯業界に於ける一大革命を見る程になつて居る、といふのはその發光體、即ち線に最初はカーボンをのみ用ひて來たのであるが、最も高溫度を要する金屬程最も經濟的に強い光線を發するといふ物理上の法則から考究を始め、斯くてオズミアム燈、タルタラム燈、タングステン燈等の諸種のものが出來た、此最後のもの即ちタングステン燈が現在における最も進歩したものである、何故かといふと、此タングステン燈球の發光體は最も溶解點の高い金屬から出來て居るか

ら容易に揮發はせぬ、從つて耐久性に富んで居る、又高溫度を要して始めて白熱されるのだから光力が普通のものに比べると甚だ強い、即ちカーボン發光體に比べると約三倍も經濟である、それ故カーボン發光體と同程度の光を發せしめるには、それの三分の一の動力を以てすれば足りるといふ事になる、此事が斯業界に於ては、實に容易ならざる一大影響をなすのである、之を電燈會社に於ていふと、今迄は一萬燈を點けたとする、それだけの動力を備へたとする、すると此タングステン灯球を用いれば、同じ動力で三萬燈を點け得るといふ結果になる、幾燭光幾らといふ計算で點燈料を取るとすると即ち三倍の收入がある、メートルで使用した電力量を計算し點燈料を拂ふとすると、從來のものの三分の一の動力で電灯が點くことだから、その費用も三分の一で濟むことになる、綿密に言ふなら左程までにも行くまいが、十圓のものが四圓若くは四圓四五十錢位には必ずなる、斯くては電氣を使ふ人も次第に多くなろうし、瓦斯會社にも多大の影響が及ばう、安直で電燈が點くとすれば普通の家で用いることにもなろう、

タングステン燈球なるものは斯樣なものだから、獨逸、英吉利、亞米利加等では盛に用いられて居る、獨逸といつても田舍の方は知らぬが、伯林等で見受くる所では先づその全數の半ばは此灯球になつて居る、日本では如何程迄に行くであらうか、紐育、倫敦、伯林などとは家の大さから、從つて晝間の燈火用ゐ具合又、人民の夜間の働き具合から違ふ、從つてその發達の有樣も等しきを期し難くはあらう、値段も只今の處では高い、が普通のものの五六倍で買へる、即ち一圓五六十錢で買へる、高いにした所で之に要する電流の方で非常の得になるから宜い、獨佛英米等では既に當業者が注意し活動して居るから其發達は疑はないが、思ふに我國に於ても同樣で、迚も全體の半數とまでは行くまいけれど、先づ來年の初頃になつたら五分若くは一割位は此燈球になろうと思ふ、

此灯球の發明された順序を最少し詳に語ると、前にも言つた通り最高溫度を要する物體程最強度の光を發するといふ理屈からして、アウエル、フヲン、ウエッスルバッハなる人(大學教授)がオズミアム灯球を發明した、が此電灯は成功せなかつた、次に矢張り獨逸の科學者ネルストなる人が所謂ネルスト電灯なるものを發明した、即ち金屬の酸化物を合せて發光體を作つた

のである、之は一時頗る流行つたものである。此れの出來たのは千九百四年頃の事だが缺點あるので大流行と云ふとには遂にならなかつた、獨逸のシーメンス會社では學者を澤山雇ふて置くので、その頃それ等の學者に命じ、高溫度でなくては溶けぬ金屬で、而かも針金になし得るものはないかと取調べさせた、その結果出來たのは即ちタルタラム電灯なるものである、日本へ千九百六年の末頃に來たもので、之が出てから、更に又各國の諸學者の研究を重ねて、遂に生れ出たのが今迄談して來たところのタングステン電灯である、既に實用なつて居る製法には四つの方式がある、日本で專賣特許を採り居るものにも四通りある、日本で出來たのは一昨年の夏頃で、昨年の一月に我社で造つたのを電氣學會で點火して公衆に示したことがある、一時新聞では此電灯は私の會社で發明したなどゝ傳へたけれども、それは間違である、只模造し得たのである、而も至極幼稚なものであつた、

此金屬の材料はタングステンと言つて、重石の中にある、即ち約六割の割で含まれて居るものだ、我國では甲斐、周防、豐後、の諸州及び日光の先の西澤等で產するので、銀山銅山等で多く發見する、

一般に工業界に於て考へると、獨逸は勞力が安い、安いといつても我國の三倍だが、併し米國は我國の五倍であるから、それから、それと比較すると甚だ安いものだ、又工場の組織が宜い、彼地ではトラストが大に行はれて大資本を運用する、て十分に學者を雇ひ入れて專ら研究に身を委ねさせる、商賣人も此の如く偉いが更に又政府の保護が行屆いて居る、日本でも政府が注意して保護に勉めぬではないが、如何せん措置が一々要處に當るといふ譯にまだ行かぬ所がある、それに獨逸では又學者以外に小さい事の研究をする者が多くある、即ち品物は既に出來るとしても、現在十錢に作るものを更に八錢に作れはせぬかといふ樣な事を考へ之に費用をかけてドシ々々實行して行く、夫れに化學工業が非常に發達して居る、從つて諸種の材料品は非常に廉い、此等が今日の工業の隆盛を見る要素なのだろう。

英國の工場などは其組織なども我國々のと大同小異で、到底獨逸の敵ではない、獨逸の製作品は莫大の勢を以て、支那印度或は濠州と、殆んど東洋の大部分に流れ込んで、その市場より他を排斥しつゝある、亞米利加も工業は盛であるけれど、勞力が高かつたり、稅が、重かつたりするので、安價で外國に出す譯には行

かず、從つて獨逸と競爭する譯には行かぬ、
それ故我國では目下の處獨逸をだけ眼中に入れて置けば宜い、如何にして獨逸に勝つべきかといふ事が我々の將に勉むべき點で、其の努力で、此目的を果し得れば即ち大なる成効なのである、が我國に於ては只小國で國内の需用に知れたものであるのに、小工場が對立して居る、此灯球の種類のみでさへザッと一萬種もあるが、小工場では迚も十分の分業を許さぬ、一つ工場で此も作れば彼も作る、即ち幾度も手を換へなければならぬ、此樣な事では費用ばかり多くかゝつて廉價に品物が出來ぬ、それ故日本に於ける現下の急務は各工場の合同である、トラストである、そして各地の工場其れに適當した別種の品の製作をするといふ事である、亞米利加は大國であるから自國内の需用でも大なる工場を設け得るが、日本は事情が違う、獨逸では全世界を得意として居るから如何程大工場を設けても宜い、日本は其處迄は進んで居らぬ、然るに小資本が並在し、小工場が並存して居る樣では到底他國との頡頏は叶はぬ、私は西比利亞鐵道によつて歸國したが、途次露西亞の莫斯哥に於ても、既に獨逸製のタングステン電灯が全市を照して居つたのを見たのだ、浦鹽でも同樣で此の商賣は獨逸の獨專である、其の努力や恐るべきものである、我國官民の共に覺醒せんことを望む。

海外消息

近東問題――墺伊の關係――墺土の談判進行――土耳古議會の開會――米國大統領と下院の衝突――ベネズイラの革命騷ぎ

十二月二十八日　巴里より

無念庵

●謹啓　米國太西洋艦隊の出發に始まり、日米協約の成立に終りたる今一千九百〇七年の外交は、頗る多事多難に有之、其間幾度か戰雲動いて、今にも火花を散らさんずる情報到る毎に巴里の株式界を威嚇致され候も、遂に何等の變動もなく、反て事ある毎に歐洲平和の維持を確實にせられたる觀ありしは、誠に外交の大勢が那邊に向て進みつゝあるかを推知する事を得て喜ばしき事と存じ候。一月下旬墺のアーレンタル男が、ブルガリア公を招いて、二州併合の内意を洩したるをキッカケに、近東問題は加一倍の勢を以て再燃し來り、マセドニア事件波瀾的海問題、五小國の現狀維持等頻々として起り來り獨帝の野心勃勃として禁ずべからざるに至りしが、英佛の親

英露佛の三國同盟默約は平和の一大鐵槌となりて之を抑ゆるに千鈞の重きをなせしのみならず、一方に於ては英王南船北馬頻りに平和の福音を宣傳するにありて、全く惡辣なる獨帝をして其の策を弄するの餘地なからしめたる事實は、歷然として蔽ふべからず。ビスマーク以來の外交政策たる、即ち列國を孤立せしめ其間にパン、ゼンマンてふ大政策を遂行せんとする所謂ビスマーキカンレシスズムなる者は、遂に見ん事微塵に打成されて獨帝如何ともする能はざる有樣と相成、列國包圍攻擊の中にありて、只徒に墺伊と冷かなる握手をなし居たるは、誠に氣の毒と云はざるとなくに候、之を要するに、本年の外交界は、平和の好老爺たる英王エドワード陛下の大成功と時事毎に獨帝に非にして、屢々不謹愼なる言動を敢てするに至らしめ、其國人にすら愛憎を盡かされたる如き結果を來したるとは全く獨帝の大失敗を招かれたる以上の實事に歸すべく候。

▲殊に伊獨墺の三國同盟今や潰裂に瀕するものゝ如く、伊國の態度は昔日の如くならざる傾向あり。バルカン半島に關しても伊は墺と結ばずして露と手を握るが如き傾向あるを以て見るも之を推知するに難からず候

●墺伊の關係　バルカン半島の其後は、益々紛亂し來りて底止する處を知らざるに至り、關係列國の一たる伊太利も徒に袖手傍觀する事を得ざる場合に立至り、外相チットニ氏をして代議院に於て、塞爾比、モンテネグロ兩國の悲境に深く同情を表する事、墺國の二州合併は陋劣なりと思惟する事、及び伊墺獨三國同盟は領土割讓を協議したる事なかりし事等を宣言せしめ候。　初め墺國外相エーレンタル男がボスニヤ併合の內意を伊國外相に漏すや、外相は頗る之を簡單に見做し容易に同意すべき模樣なりしに、今公然議會に於て反對の意見を告白せしには、何等かの事情なかるべからずとの事に有之候が、巴里の某有力なる新聞紙は之を以て一は英國の態度に牽制せられたる結果なりとし、一は伊墺獨三國同盟の結合力が、近來頗る弱くなりたる結果なりと論ぜられ候。之に對する露都の輿論は、頗る伊太利に好く、伊太利は妄りに三國同盟を脫せんとする意志あるにあらざれども、少なくともバルカン問題に關しては、該同盟の抑制を受けざるべき意向なりと稱して、大に之を賞讚しつゝあるやに見受けられ候。

▲又之と同時に露國と伊太利との間に不文の默約、即ちバルカン問題に關する一切の利害問題に於て、双方共に相互の利益を保護すべく、聲援を與ふべしとの契約成りたりと噂せられ候。之れ固より未だ遽かに信ずべからざる者なりと雖も、墺伊の關係が大に冷却せる一證として見るを得べしと存ぜられ候。

●墺土の談判進行　バルカン半島問題は、墺土談判の捗取らざるが故に斯く長引くものの如くなるが、最近君府通信に依れば、獨逸はエーレンタル男に向け、何時危險なる發展を見るべきやも知れざれば、速に土耳古との談判を解決せられたしと申入れたる由にて、其結果にや、墺國政府は土耳古に於ける墺貨排斥運動を默過し、再び談判を繼續せん意

向を告げ、且つ相當の報償を課せん考なりと聲明するに至りたるが、十五日發のロイテル電報は下の如き二州合併報償案を墺國側より提出せりとて之を報じ來り、即ち「墺國はボスニヤ、ヘルテゴヰナ二州合併に對する報償として、墺國は土耳古が關税を一割五分に引上ぐるを承諾し、土耳古に於ける墺太利郵便局の廢止、アルバニア羅馬敎徒に對する墺國の保護權を撤去する事、ノヴイバサール領土保全に同意する事等を提議せりと。土耳古政府が果して造作なく之を容るゝや否やは頗る疑はしき事なりと雖も、玆に一說として掲げ置くべく候。

▲以上の如き有樣なるを以て、本問題が列國會議に上るまでには猶幾多の時日を要するべく、其間獨逸は墺國に聲援し、英國は飽までも土耳古を援けんとの意氣込なるを以て、何時如何なる大亂を惹起さずとも限らずと、巴里の某老政治家は語られ居り候。猶參考の爲め露國外相の眞意向なりと云ふを露都通信に依りて譯載せば、即ち、第一露國は直接間接共にボスニア、ヘルツエゴヰナ併合問題に關し、墺土の談判を奨勵せし事なし。第二露國は合併前後共に之に同意せし事なし。本問題は重大なる國際問題にして、伯林條約に調印せる、各國の同意を得ざれば如何とも爲し得べきにあらず。露國は從來此見解を持して變けらず、英伊佛又之に同じ。第三、若し列國會議にて合併承認と決せば、露國は其條件として關係あるバルカン半島の諸國に賠償を與ふべき事を主張すべし。第四、バルカン諸國の同盟には、露國は滿腹の同情を表す。此同盟はスラヴ人種の露國には勿論、土耳古にも必要なし。第五、墺國は未だ列國會議開催には同意せざれども　早晩同意すべきや疑を容れず。第六、セルビヤモンテネグロに對し　露國は矢張愼重の態度を取らんことを勸告す。露國は如何なる場合を問はず本問題に關して戰場に立つ事を好まず。又モンテネグロ及びセルビヤ兩國は、兵力に於て墺國に比敵する事を得べからざるが故に、極めて愼重の態度を以て事件の成行を俟つを得策とす云々」と。之れバルカン問題に對する露國政府の意向を摘要したるものに候。

▲獨逸は頻りに墺土談判の行惱むは土耳古に味方する英國が之を邪魔するに因ると公言しつゝあるが、議會に於ける宰相の演說に依りて、全く本問題に關しては獨逸は墺國と行動を異にする能はざる事を確實にせられ候。要するに本問題の如きも又一面英獨の暗闘に過ぎずといふも過言にあらざるべく候。

●土耳古議會の開會　豫てより噂せられ居たる土耳古議會は、十二月十七日を以て開かれ、皇帝親臨の上自ら勅語を朗讀して、立憲の美果漸く成らんとするを喜び、勃牙利の獨立及び墺太利匈牙利政府が、國際の信義に反して二州を合併したるを遺憾とし、土耳古の權利が是が爲に大に侵害せられし事を切言し、陸海軍の擴張に言及して、最後に以上の國際問題が、關係列國の公平なる盡力に依りて最も穩かに解决せらるべき事を期待すと仰せられ候しが、英國は最も熱誠なる祝電を贈りて之を賀し、墺國は勅語中墺國に關して不穩の言

語ありたりとて大に之を難じ、維也納市の一新聞は烈しく皇帝を罵倒せられ候。

●米國大統領と下院の衝突

米國の政界は、曩に大統領の撰擧に際し、遺憾なく其内部の腐敗を世界に暴露したるが、今又大統領の教書に依りて、其醜態を露出せしめらるゝに至り候。十二月九日を以て開かれたる米國下院は、大統領の教書中に、政府の秘密探偵費用の範圍を廣くし、國會議員の行動に就ても探偵を附して之を監視すべしとの希望を言明しあるを見、之れ實に下院議員の品性を疑ひ、之を侮辱したるものに外ならずとし、十一日委員を撰び大統領を譴責すべしとの決議をなし候。然るに大統領は之に對して毫も下らず、下院議員が秘密探偵を云々するは、必竟身に後暗き處あるが爲めなりと稱して、教書中より秘密探偵云々の字句を取消すべしとの忠告を拒絶致し候。

▲議員等は之を見て一層憤懣の念遣る方なく議員の或者は、若し大統領にして我等の非行を摘發するに於ては、我等も大統領の不正行爲を列擧すべしと叫び、巴奈馬運河工事費中二千萬弗の費途甚だ不明なる事實ある事を指摘せしが、該記事は始めて民主黨の一機關新聞に載せられ、次て紐育「オヮールド」之を轉載して、一層大統領攻撃の火の手を高めたり。茲に於て大統領は、一方に於ては之に關する詳細なる辨駁書を送り、一方に於ては紐育「オヮールド」を相手取りて大統領侮辱の訴訟を提起するに決せり。されど紐育「オヮールド」は、新聞紙は上下院議員の如く、容易に屈服せしめ得べからず。假令一二の社員が罪を被るとも、其れしきの事にて其主義主張を狂ぐると思はゞ誤りなりと、豪語して飽くまでも之と爭はん決心なる由に候。

▲されど一般新聞紙の論調は、概れ大統領に味方するものの如く、獨り反對黨たる民主黨側の新聞紙の之に反抗して、或は之を冷笑し、或は之を罵り、大統領は己れ一人有徳なる賢人なりと己惚れ居るなるべしと嘲る者すらあり。米國政界の腐敗は今更ながら呆れ申し候。

●ベネズイラの革命騷ぎ

現代の奈翁と稱せらるゝ、ベネズイラ大統領カストロ氏の内閣倒れて、同氏が巴里倫敦等に漂泊する間に、革命は最も穩かに副大統領の手に依りてなりたる小變動あり。和蘭の如き商業上の關係より、屢々海軍を遣して示威運動を試みるなど、一時はなかなかの騷動なりしが、本件の外交關係及び事件の眞相は次號に於て詳述致すべく候。

實生活と文藝

金子筑水

十九世紀前までは、すべて西歐文藝を模倣したスカンヂナビヤやロシアの文藝が最近に於ては、其位置を轉倒して、却つて西歐文藝を率ふるに至つたは、眞に驚くべき現象である。スカンヂナビヤの文藝は暫く措く、近代ロシアの文藝が英佛獨等の西歐文藝に與へた影響は、眞に深く且大なるものであつたらしい。目下の我が文壇も餘程深くロシア文學に支配されてはゐるが、西歐文壇に於けるロシア文學の勢力は、更に數段深刻で、殆ど吾人の豫想の外に出るらしい。英佛獨に於ける最近代の寫實的、自然主義的乃至現實的文藝の傾向が、深くロシアに負ふ所あるは、今日最早疑ひない。ツルゲネフ、ドストエフスキー、トルストイ等の文學が、初めて西歐文壇に新異彩を放つたころは、世間は愕然として、將來の新興文學の曙光は、正に北歐文學にあるべしと驚嘆した。就中獨逸文壇に於けるロシア文學の影響は、英佛兩國に於けるよりも更に著しく、文壇の全體のトーンは言ふも更なり、一班の劇壇乃至思想界までが、深く彼の暗憺として而も一種の新意義を宿したロシア文學の風潮に感染した。青年文藝家はドストエフスキーを新興文學の恩師と仰ぎ、トルストイの思想は深く一班思想界を震動し、ゴルキーの『木賃宿』はベルリンの小劇場のみで五百回も演ぜられたといはれる。獨逸文壇が一時北歐化したと言はれたも決して偶然ではない。

西歐の舊文藝に比較して、北歐の新文藝が、世界文藝に如何なる新意義を與へるかは、深く吾人の注意すべき事であるが、ロシア文學の將來如何といふ事もまた興味深い大問題である。獨逸のロシア文學史家ブリック

ナーの如きは、ロシア文學は、ツルゲネフ、ドストエスフキー、トルストイ等の全盛期に於て、既に其の絶項に達しおはつた、アンドレエフ、ゴルキー等の現在のロシア文壇は、もはや全盛期の絶項からの下り坂である、衰退期である、ロシア文學は既に其の爲すべきを爲しおはつたと評してゐる、果たしてどうであらうか。假令現在のロシア文學が、甚しく全盛期の文學に劣つてゐるにしても、最早之れに前途の見込がないといふ断案はどうであらうか。同じブリックナーの判斷によれば、獨逸文壇に於けるロシア文學の勢力は、今や次第に減少しつゝありといふが、そは兎も角もあれ、ロシア文學の將來如何は、吾人の瞎目して注意すべき現象であらう。

ロシア文學に精通せずしてロシア文學を語るは異な事であるが、自分は茲にロシア文學を論ずるのではない、單に之れに關する感想を談ずるに過ぎない。人も左樣であらうと思ふが、自分もロシア文學を談ぜられるごとに、必ず一種の感想に藉られる。而して此の感想は確にロシア文學の一特質に應じてゐるものと思ふ。夫れは別に珍らしい觀察でも何でもない、特別な意味に於て、又は嚴格な意味に於て、ロシアに於ては、文藝と實生活とが密着して、其の間に寸分の間隙も見出だされないといふ一事である。文藝が實生活に密接な關係が有ることは、元來文藝其のものゝ本質て、別に異とするには足りないが、ロシア文學に於ては、其の實生活との密接さが、如何にも著しく感ぜられる、他國の文藝よりは、其の密接さが、はなはだしく際だつて感ぜられる。兎角文藝といへば、多少實生活から離れて、其の間に多少の間隙の生ずるが普通であるに、ロシア文藝に接すれば、あらゆる方面から觀察して、文藝と實生活は一身同體水も漏さない密接な關係のやうに感ぜられる。ロシア文藝に接すると、我等はどうしても彼の藝術のための藝術といふやうな浮いた考が起こらない。眞地面だ、眞劍だ、必死だ、遊び事でない、仕事だ、一生懸命だといふやうな感想がひし〳〵と胸にこたへる。其の文藝は實生活から生ひ

ぬきの文藝である、實生活の地盤から必然的に發生し、發生せざるを得ずして巳むを得ず發生し、而もたゞ實生活のためにのみ巳むを得ずして發生したのであるといふやうな感じが起こる。ロシアの政治上經濟上道德上の特別な事情は、殆ど必至的に其の文藝に斯かる特色を與へたやうに見える。下級民と上級民との懸隔甚しく、貴族は專制、武力、壓制、腕力を楯として專橫放肆至らざるなく、下級民は無智頑瞑徒にたゞ塗炭に苦むといふ暗憺たる國情は、殆ど必至的にロシア獨特の生眞地目な必死的な文藝を産み出したものと見える。ロシアの名ある文藝家は、藝術を藝術として、遊び半分に小說や批評を書いてゐない、實生活と鬪ふため、眞面目に怒り泣き叫んで文藝に從事してゐるやうに見える。彼等は實生活のために奮鬪してゐるのだ。彼等のペンは言葉通りの劒であるのだ。名ある文藝家の多數が、最初の文藝事業を捨てゝ、直に社會改良の實行に急ぐもこれがためてはないか。極端にいへば、文藝は彼等に取つて、實生活のための手段である、如何なる意味に於てか、實生活の進歩を助け社會の改善を促す巳むを得ざる手段である。トルストイの藝術觀を極端だと評する人も有らうが、それがむしろロシア文學のエッセンシャル、パートではないか、さういふ見方がロシア文學に味はひの有る所ではないか。さればロシア文藝に書かれたものは、實生活其のものゝ僞りない煩悶である、慟哭である、訴へである、時代其のものゝ叫びである。眞實の意味に於て、文藝と道德とは離るべからざものに成つてゐる。同じ寫實的文藝でも、佛蘭西のは大分ロシア物とは趣を異にしてゐる。國民性の相違や國情の差にも因ることであらうが、佛蘭西の文藝は、どうしても其れと實生活との間に空隙が有るやうに感ぜられる、矢張文藝だ遊びだといふ風に感ぜられる。

斯くの如く嚴格な意味に於て、實生活と文藝との密接といふ事がロシア文學の一特色であるとすれば、吾人は之れより幾多の學ぶべき事が有ると思ふ。實生活と藝術の密接とばかりては、至つて簡單に聞こえるか

も知れぬが、一層深く其の意義を探れば、藝術の根本に關する深意が此の中に含まれてゐる。吾人は實生活と藝術の密接といふ事から、一種眞面目な藝術觀を建設することが出來ると思ふ、たゞし其等は茲に細論し得る限りでないから、單に此の事實から學び得られる二三重要な點を注意する事に留めやう。

（第一）眞面目な文藝は、どうしても實生活の地盤の深い底から必然的に現れたものでなければならない。時代精神の中心から必然的に現れたものでなければ眞の文藝ではない。活きた文藝は、要するに活きた時代精神の叫びでなければはならない。文藝は人生の無意味な装飾ではない。實生活が切實で嚴肅で汗や血を價ひする勞役であるならば、文藝其ものも切實な嚴肅な勞役でなければならない、たゞの遊びであつてはならない。此の點に於て、吾人はロシア文學に學ぶ所が多いと思ふ。現に目下の我が文壇は、大體に於て、此のロシア式傾向を取つてゐる。作家の個性の忠實な主張を尊ぶなどは、此の傾向の著しい點である。文藝は作家の人生に關する眞實な切實な主張であつてほしい、現實に實生活上で經驗した深刻な感想であつてほしい、作家の實經驗の已むを得ざる訴へであつてほしい。たゞの形式上の寫實は、必じも文藝の本義ではない。實人生の深い要求と訴へとを畫き出して、初めて其の文藝は活きてくる。實生活に無關係な文藝は、要するに死んだ文藝である。

（第二）斯くの如く活きた文藝は實生活其のものから必然的に産れてくるもの、當の時代精神其のものゝ切實な叫びであるとすれば、一時代の文藝は、其の時代に基いて産れ、又其の一時代のために存在するものであつて、必しも將來又は後世を目的とすべきものではない。從來普通には文藝は、或は普遍であるとか、或は萬世不朽であるとか、或は百年の將來を目的とすべきであるとか、或は個々の時代には無關係であるとか、其の普遍永久といふ事が樣々な意味に言ひ現はされてゐる。一切他のものは普遍永久性を缺いてゐる事が明であるに、文藝のみは何故獨り普遍永久性を備へてゐ

るてあらうか。一時代を母として產れ、一時代のために存在する文藝が、如何にして萬世不朽な理由が有らうか。在來の俗說に從へば、すべて永久的なるべき文藝は、萬世不易の根本的人情を畫いたものであるなど言へど、若し萬世不易なものが有るとすれば、其れはたゞ內容の無い空な形式に過ぎない、空な形式的人情を畫いて、其れが萬世不易の文藝であるなどは愚の至りではないか。事實、ホーマーやダンテの詩は、最早今日の吾人に取つての詩ではない。ミルトン、シエクスピアの詩とても最早二十世紀の文藝ではない。イプセン、ドストエフスキー、トルストイの文藝も遠い將來までの文藝とは言はれまい。要するに文藝を萬世不易と解釋するは、彼の哲學上の眞理を普遍永久と解釋する獨斷論と同じく、古來の絕對論又は唯理論的傾向の遺物に過ぎない。一時代の文藝は、痛切に言へば、當の一時代のためにのみ存在する。たゞし斯くいふは文藝は單に時の流行を追ふもの〻みといふ意でないことは無論である。

（第三）極言すれば、ロシア文藝は實生活のための手段である、如何なる意味に於てか、現代救濟のための必然な方法である。トルストイ一流の見解に從へば、何等の意味に於てか、現代救濟の任務に堪へない文藝は眞の文藝ではない、廣義に謂ふ精神敎化の目的を果たすことの出來ない文藝は眞實の文藝ではない。勿論直接の實利實益は文藝の本意ではないが、少なくとも何等の意味に於てか、現代を補益するものでなければ眞の文藝ではない。文藝の本意は、どうあつても、ただの娛樂ではない。文藝を政治問題や宗教問題のための直接の手段に墮落させることは考へものであるが、人生のために全然無關係な遊戲に化することも誤つてゐる。元來實生活を除き去つては、文藝は無意味である。文藝を實生活以上のもの、又は實生活に緣遠いもの〻如く思ふがそも〳〵の誤りである。實生活から離れて、果たして文藝に何等獨立の意味が有らうか。文藝は飽まで實生活のためにのみ存在する。斯くの如く確信して、初めて文藝の製作又は賞翫は、たゞの娛樂

てなくして、眞地目な嚴肅なアルバイトとなるのてある。人生に關する教訓の多い文藝は眞の文藝である。何等の教訓も與へない樣な文藝は劣等な文藝てある。實生活のために、如何なる意味に於ても補益を與へないやうな文藝は、遠慮なく社會の外に驅逐すべきだ。

（完）

背景改惡論

青柳有美

誰か今日の演劇を目して、向上進步の傾向ありといふものぞ。其舞臺衣裳の贅澤となり、背景道具立の頗る留意せらるゝに至りしは、決して演劇の向上に非ず、又進步にも非るなり。是れ實に演劇の墮落なり。今の芝居觀客には活人畵として演劇を觀照する趣味豐かなる者あるのみにして、演劇に眞正の興味を有する者に至りては、寥々として曉天の星の如し。是に於てか、役者の是非は多く其メン及所謂品位なるものゝみによりて定められ、却て眞實の伎倆に富める市川女寅の如きは、世間に閑却せられ、開幕となるや、まづ何物よりも背景の麗美にして完全なるに拍手喝采する如き馬鹿者を出だすまでに至れり。此る活人畵趣味の觀客劇場に充滿するに及んで、演劇は愈々外道に踏み入り、役者よりも重きを却て背景に置くに至り、加ふるに舞臺衣裳の贅澤を以てし、世界に冠たる我が日本劇の眞髓は、今や將に足の塵を拂つて此の邦土を去らんとす。嗚呼、將に去らんとす。嘆ぜざらんとするも、豈に得んや。近來著しく能樂の復興勃興を觀るに至れる如きも、是れ全く演劇が活人畵に墮落せんとする傾向あるより來れる反動なり焉。借問す、幻燈の動くものは是れ活動寫眞にして、活人畵の動けるものは是れ演劇なる乎と。日本演劇目下の急務は、背景の改善に非ずして、寧ろ之が改惡の法を講ずるにあり。然らずんば、日本演劇は遂に役者の演劇に非ずして、背景道具立衣裳の演劇たること、毫も歐米演劇と異るところ無きに至る

べし。

夫れ、演劇の主眼とするところは、言ふまでも無く人世にあり。自然は唯これを點飾せんとするものに過ぎず。人は演劇により、到底普通意識の力にて認識する能はざる人世の奥義と秘密とを認識するに至るべきものなるを以て、舞臺に於ても、素より役者を中心とし、之を主眼として活動せしめざるべからず。自然を基礎とする背景の如きは、たゞ役者の活動を引き立つる爲めの附屬物たるに過ぎざる也。然るに、今や主客は全く顚倒せり。背景は舞臺に於ける驚くべき勢力となれり。而して、役者は背景の爲に壓せらるゝに至れり。更に、背景に同化し、役者も遂に活人畫中の一點彩たるに至らずんば止まざらんとするものゝ如し。之を聞く、野兎は、夏期に於て、山野その褐色なる土色を曝露をする時に當りては、毛色自ら土と共に褐色を呈すれども、山野悉く雪に覆れて白皚々たるものあるに至れば、變じて白色の毛あるに至ると。是れ野兎の毛色が、その周圍に同化する爲めなり。今日の如く、背景の勢力、役者を壓すること盛なれば、役者も又背景に同化し、全く人間離れをするものとなりて、知らず識らずのうちに、貴き人の身を以て、死せる畫に化するに至るや必せり。諺に曰く、蛤變じて雀となると。然るに聖代の今日、役者と稱する人間の變じて畫となるを觀る。豈に咄々怪事に非ずや。此くの如き奇異なる現象より、目下の演劇を救ひ出ださんとせば、先づ暫く背景の改良を制止し、否な寧ろ、之を改悪して、專ら觀客の注意を役者に集注せしむるの法を講じ、死せる背景をして、生命ある役者に同化せしむるの道を發見せざるべからず。生命ある役者が死せる背景に同化せらるゝを意とせず、切りに背景の詮議に熱心する如きは、實に人類を侮辱するの甚しきものといふべきなり。

進化論者の唱道するところに據れば、生物體の一部が、著しき進化を爲せる時は、必ず之に伴ふに、他の一部の退化を以てするものなりと。歐米に於けるが如く、舞臺面の設備、背景以下餘りに完備せる地に於て、

名優の出てんとを望むは、或は却て不可能事に非る乎。今日、歐米の名優なるものが、多く活人書中の名優たるに過ぎざる如き觀あり、川上夫妻すら猶ほ彼の地にありては、盛なる賞讃を受けたるによりて之を徵するも、歐米の役者が其伎藝に於て、頗る幼稚のものあるや、知るべきのみ。これ、演劇に於て、背景の著しき進歩が、生物進化則の原理に依り、役者を退化せしめたるものに非ずして何ぞ。背景進歩すれば、役者は必ず退化すべし。

日本美術史を案ずるに、殿堂建築の著しく進歩せる時代は、是れ佛像彫刻の衰えたる時代にして、佛像彫刻の秀逸なる作物を出せしは、實に殿堂建築の進歩せざりし時代にあり。日本に於て、殿堂建築の發達を觀るに至れるは、全く桃山時代以後のことなり。而して桃山時代より今日に至るまで、別に觀るに足るべき佛像彫刻の傑出せるもの、一つだも之れ無きに非ずや。然れども、敢て絶後といふも不可なきまで傑出せる佛像彫刻が、續々として製作せられたる奈良朝の殿堂建築は如何。更に下りて平安朝は如何。奈良朝遺物の法華堂の如き、實に觀るに足らざるものに非ずや。嘖々として其の盛名海の内外に隱れ無き平安朝の宇治鳳凰堂の如きすら、今日よりして之を觀れば、宛然、明治初年に於けるペンキ塗洋風建築の亞類に外ならず。然りと雖ども、後代なほ到底其の匹儔を見出すべからざる如き佛像彫刻の傑作は、之を安置すべき殿堂の、此く粗末なりし時代に於て作られたり。請ふ奈良法華堂安置の不空羂索菩薩と其協師たる梵天帝釋とを見よ。而して殿堂の美々しく作り上げられたる時代は、之に安置すべき本尊たる佛像彫刻が、最も衰えたる時代なりしなり。演劇のこと又此くの如し。若し、之を取卷く背景道具立等餘りに進歩すれば、演劇の主眼たる役者は之に反比例し、却て退歩すべきを進化理法の當然とす。故に、若し眞に演劇の改良を希ひ、役者の向上進歩を念とする者あらば、須らく先づ背景の改良を思ひ止まりて、獨り役者をのみ鞭撻すべきなり。背景の改良を以て、今日の役者の足らざるところを補は

んとすといふが如きは、不親切の甚しきものにして、更に役者を藝術的墮落の溝壑に突き落さんとするものなり。今日の役者若し今日の背景を同化して、之に生命あるものたらしむるの伎倆無くんば、背景の改良は更に差控えざるべからざるに非ずや。故に以爲らく、役者の改良を促すは背景の改惡にありと。背景道具立の不完全は、役者の畫化に勝ること千萬無量なりとす。

兎角、人間は他力心願のものなり。役者も又人の子なれば、若し、背景が巧に我が足らざるところを補ひ、之によりて觀客を滿足せしめ得るものなるを知らば、必ずや、之に依賴するの念慮を昂め、其の伎藝の向上進歩に苦心工夫するを第二とし、まづ何よりも背景詮議を第一とし、爲に遂には全く背景にのみ依賴して圖々しくも芝居を打つに至る如き惡弊を生じ、初めより左までに優等ならざる役者の伎藝は、益々之によりて其練磨を等閑に附せられ、更に退歩し更に墮落するに至り、役者を奬勵奮起せしむるに足るべき刺戟は、全く其跡を絶つに至るべきや、素より言ふまでも無し。役者をして、此る恐るべき誘惑より脫せしめ、たゞ一に技藝の向上進歩をのみ念とし、背景に對する依賴心の增長を抑制して、役者を背景の幽囚より救ひ、技藝にのみ專心一意ならしむるの道、他無し。今の背景を改惡するにあり矣。般鑑遠からず、歐米の演劇にあり。是に至りて、此の文の筆者靑柳有美が歐米演劇の激烈なる不信仰者なるを明白に聲言し置くは、必ずしも、蛇足に非ざらんか。

凡そ、綺羅びやかにして、五官を刺戟すること多きもののみに感動するは、小兒に非ずんば痴者のことなり。然るに演劇に於ける背景の性質たるや主、として、觀客の感覺に訴えて、其の智覺に訴ふる能はざるものなり。小兒は、金色銀色燦爛たるモールの正服を見るや、忽ち先づ之に眩惑せられ、深く其の本來の意義を考察するに遑あらずして、軍將の崇拜家となるを常とす。今の芝居客は、即ち是れなり。宛然として金モールに狂喜する小兒の如し。徒に感覺を刺戟せらるゝのみにして、人生に關する何等の暗示をも與ふるあた

はざる背景に隨喜し、毫も其の智覺を活動せしめんとする心なく、隨て、役者の伎藝によりて示さるゝ教訓に思ひ臻らんとする心掛け無し。此くの如きは、實に芝居客の恥辱なりと言はざるべからず。嗚呼、實に一大恥辱なり。今の觀劇者よ、興行師と役者とにより、感覺のみありて智覺無き痴人小兒と同一視せられ、甚しき蔑視と小供取扱とを受け、金モール銀モールの如き背景と觀兵式の御大將の如き無能なる役者とを見せつけられ、而も之が爲に高き價をさへ拂はしめられ、猶ほ恬然として恥る色なく、得々として芝居客たるを自標するを得べき乎。川上演劇第二團の女優等は、實に現代演劇式の代表者なり。これによりて發せらるゝ侮辱の聲を聽かずや。耳ありて聽ゆる者は聽くべし。川上女優等の凱旋は、日本の演劇界に取り、日本が露西亞の戰に敗れたらんよりも、更に大なる恥辱なり焉。此くの如くにして、天下に充滿する下劣外道の芝居客を正路に導き、眞正なる興味を眞正の演劇に持たしむるに至るべき道、他無し。まづ差當り背景改良を差し控えて之が改惡を計り、劇場に於ける觀客の感興を、一に役者に集注せしむるにあり。是れ、觀劇教育法の第一着手ならずや。

早稻田大學以下の男女學生が、近來著しく觀劇に興味を有するに至れるは、誠に祝すべきことにして、かの稗史小說なるものが、明治年代に入り著しく向上發展し、全く其の昔のクサ草紙臭味より脫却し、所謂『小說』の體を成すに至れることの、全く男女學生の多數を其の讀者とするに至れるに因る如く、芝居客の大部分が、男女學生を以て占めらるゝに至れば、又演劇も稗史小說と等しく、自ら向上進步するものあるべしとは、此の文の筆者が多年の宿論なり。されば、追々男女學生の多數を觀客に有するに至れば、今日の演劇なるもの、又素より向上發展の域に進むべしと雖ども、目下の男女學生芝居客は、未だ其學校に於ける試演會に時々演ぜらるゝ活人畵に囚はれつゝあるものにして、全く其影響より脫出するに至らず、永く馴致せられたる活人畵趣味を以て、演劇を觀照す。是に於てか、最も

早く眼に附くものは、背景なり道具立なり又舞臺衣裳なり、役者のメンと所謂品位なるものとなり。稍々進める者と雖ども、その注意を専らにするところは、劇作者の名と劇作の取材と位に過ぎず。其の背景と道具立とに拍手し、舞臺衣裳に喝采する如き、實に止むを得ざるなり。然るに、是等幼稚なる男女學生の芝居客を歡ばしめんとして、慢りに背景の改良をのみ是れ事とするは、例へば、糖尿病患者に多量の糖劑を服せしむるが如し。大害ありて寸益無し。切に今の男女學生芝居客に勸む、速に其の試演會にて受けたる活人畫趣味より解脱し、眞正の演劇趣味を以て前の淺薄なる趣味に代らしめ、早く役者として眞正の伎藝に富める市川女寅の如きを賞讃するに至れよと。然り而して、男女學生芝居客をして、其囚れたる活人畫趣味より救脱せしむるの道や、一のみ。即ち目今の背景を改惡するにあり。

又、背景道具立等の改良進歩にのみ腐心するを以て能事とし、為に觀客が之にのみ注意して拍手喝采し、役者の伎藝を尊敬せざるに至れば、背景に依頼して我が短を補はんとする如き卑怯未練ならざる役者は、その獨り背景道具立のみの顧られて、我が伎藝の顧られざるに思ひ至り、必ずや、自暴自棄の念を起して、その伎藝を練磨せんとする如き向上心を絶ち、舞臺を打ッちやるに至るや必せり。されば、背景を改良して偏に時好の活人畫趣味に投ぜんとする如きは、力量ある役者をして自暴自棄に陷らしむるの道にして、不親切の最も甚しきものなり。故に、若し力量ある役者の手腕を充分に揮はしめんと希はば、背景の改良に非ずして其改惡は演劇界目下の最大急務なりといふも、敢て不可なからんか。

而して、此く背景を以て演劇の主眼となすに至れる如き今日の傾向を作り出したるものは、川上音次郎なり。古語に曰く、俑を造れる者は夫れ後なからんかと。川上音次郎果して後繼者を得べきや否や。

（了）

帝都の新聞經營者（二）

黒頭巾

其一

●日露戰爭の頃、大阪毎日の一記者、大阪朝日のメタルを、時計にぶら下げて編輯局に入る。

●彼の同僚、彼を揶揄して曰く、君は露西亞の勳章を佩用する者也と。

●此の如きは、一場の戯言に過ぎずと雖も、亦以て、朝日、毎日兩社の關係を表彰するに足らずんばあらず。

●此の二社は、此の如く、互に鎬を削りて相凌轢し、琢磨奮勵以て新聞業の發達を致せり。

●大阪には唯だ此の二大新聞あり。武田、上杉の川中島に對陣するが如く、淀川を挾んで旗鼓相當る。

●故に大阪に於ける新聞業は、極めて緊切にして激烈なる競爭に因りて、時々刻々、進歩しつゝあり。

●彼等の競爭者は互に唯一也。目標は頗る具體的也。敵は明かに對岸に立てり。

●東京の新聞界は全然事情を異にす。數多の新聞社ありて恰も群雄割據の形勢也。

●然れども、寧ろ之を暗闘也、混戰也といふの中れるやも知る可らず。

●大阪の二大新聞は、恰も實力の匹敵する漕手の二艇が長距離の競漕を試むるが如く、處々に設けられたる、決勝點に向つて、不斷に、ヘヴヰーを掛けつゝあり。

●東京に於ては、數多の射手が並立して、數多の標的を射るが如く、如何に矢繼ぎ早やに射立つるとも、標的のすべてを獨占するの期ある可らず。

●寧ろ東京に於ては、新聞經營者は、必ずしも限定されたる競爭者を有せず。

●一面に於ては、競爭者は頗る多數也と謂ふべし。然れども餘りに多數なるは、競爭者無きと一般なるを記せざる可らず。

●是の故に、大阪の新聞經營者は、決鬪的に競爭し、東京の新聞經營者は、展覽會的に其才幹を公衆の前に

陳列す。

●大阪の新聞經營者は、讀者に向つて嫁娶の競爭を爲すもの也。勝利者は對手の全部を占領す。

●東京の讀者は、新聞を研究するに勸工場に入て買物を爲すと同一の態度を執る。

●勸工場に素見客の多きと同じく、東京の數多の新聞に對しては必ずしも之を購讀せず、漫にミルクホール乃至停車場に於て、素見して以て評論を逞しくするの客至つて多數也。

●而して、各新聞、挑發的題目を案出して讀者を呼ぶは、賣店競て看板娘を置くにも似たり。

●客、則ち到處看板娘の多きに堪へず、左顧右盼、舊に依て懐を抑へて勸工場を出て去る。

●此の如くして出入の客は愈增加すべきも、顧客は則ち割合に增さざる可き也。

其二

●東京の新聞も、尙ほ其の毛色に隨つて、接近せる競爭者を有す。

●先年日比谷事件に因て、國民が人心を失ひたるとき、之に由りて尤も多く利益を得たるは東京日々也。

●此の二新聞は、官臭を帶ぶることに於て互に酷似す。

●國民の蘇峯は官吏としての閲歷、三月に過ぎず。而して日々は近年必ずしも御用紙に非ず。

●然れども、德富は官臭に趣味を有し、加藤は自ら吏人の態度あり。

●學生新聞としては、國民は讀賣に向つて挑戰し、次第に其壘に肉薄しつゝあり。

●一昨夏、高等學校入學試驗の成績、官報に發表さるゝや、讀賣は、爲に特に號外を發行す。

●同時に國民は廣告して曰く、該成績全部は吾新聞ひとり特に之を揭載すと。

●而して後者の動作の機敏なるが爲め、讀賣の號外は頗る其の光采を失ふ。

●文學の新聞として、近年、東京朝日は次第に其地盤を固めつゝあり。ひとり夏目漱石を厚聘したるのみに非る也。

●漱石は『猫』を以て賣出したる者也。然れども、朝日が之を買込みたるは、『馬骨を購ふ』の襟度に出るものならずんばあらず。

●「ホトヽギス」に見へたる漱石は、猫也。村山龍平の眼に映ずる漱石は恐らくは死馬ならん。

●此の如きは、吾輩の奇言に非ず。若し村山にして、漱石を以て千里の駿と信ずるならんには、彼の眼は光らざる也。

●吾輩は、新聞記者として漱石の優秀なる所以を見ず。然れども彼の學術文章、則ち朝日を飾るに餘ある也。

●文學新聞として、朝日、讀賣に向つてチヨツカイを出すものは國民也。

●國民の文學は、故田口卯吉の經濟雜誌の史壇に於けるが如く、蘇峰の一點張也。

●蘇峰は、愛山と朔川とを引いて幕賓とす。作家に變化無けれども、排列の賑々しきが爲に、紙面頗る人目を惹く。

●昔し紅葉山人の頃の讀賣は、文學者の登龍門なりき。

●文學新聞として、今の讀賣を見る者は、恐らくは故都を過ぐるの感無きを得ざるべし。

●讀賣に正宗白鳥あり。小説界の新流行兒也。

●然れども彼は讀賣に活動せず。彼が讀者を吸收するは、却つて他の文學雜誌に於てす。

●讀賣は依然として、青年作家の稽古場たるを失はずと雖も、暖簾は、昔しの如くに尊からず。

●昔しの讀賣は斯界の文樂座なりき。座主改まらず、座主の心則ち改まる。

●經營者にして漫に過去帳を繰返して樂むのみならんには、吾輩は恐る、文樂一變して播重とならんことを。

其三

●趣味を標榜するの新聞。特に著るしきものは萬朝。讀賣。國民の三を推すべし。

●而して此三新聞の趣味は、其經營者の三樣の面目を活現せしむ。

●此三者の中、恰も趣味の亡盤の如く、趣味を口にして、而して趣味の尤も狹きは讀賣なり。

◉多く趣味を語らずして、而して趣味の尤も饒きは萬朝也。

◉德富が古書を語り、骨董を語るは、大官人、隱居人と合ふ所以にして、如才無き彼は、玉突、能樂、狂句、小說批評に至るまで、紙面の多くを敢て割愛す。

◉彼の趣味は文字に偏重する如しと雖も、亦た趣味の人たるを失はず。

◉讀賣の足立北鷗は「趣味の人」を以て自ら許すの人たり。彼は「趣味」の趣味を解するの人也。

◉然れども彼や、酒を飮まず、煙草を吸はず、碁を圍まず、芝居を觀ず。運動を爲さず。古書を集めず。

◉彼は殆んどあらゆるゲームを知らず、寧ろ些の道樂無き人也。

◉能樂や玉突の記事の、讀賣紙上に振はざるも亦故無きにあらず。

◉吾儕は、北鷗の身自ら趣味を具せざるを惜まず。唯だ彼が政治趣味の缺乏せる一事を以て、涙香と蘇峯とに對壘する所以の一大弱點と爲さずんばあらず。

◉彼が竹越三叉を政治顧問とするの一事は、彼が政治趣味の頗る淺薄なることを暴露するものなり。

◉若しそれ黑岩涙香に至つては趣味の塊ともいふ可し。

◉彼は政治文章よりして、鬪碁、弄花、聯珠に至るまで皆之を能くす。

◉彼は麻布に住して、而して神田の淡路亭にもキューを備へ置くほどの好球家也。

◉玉突會に於ける彼の相場は百七十なりといへば、彼は球突に於ても田舍初段たるを失はず。

◉彼は寄せ球に一種の特徴を有し、一キュー容易に百を出す。

◉吾輩は未だ彼の人物を知らず、然れども彼が趣味の八面悉く精悍の致を帶ぶるを推賞せざる能はず。

◉吾儕を以て見れば、萬朝の第二面は則ち黑岩が趣味の發揮なり。

◉世人往々、萬朝の第三面のみを見て、而して第二面を閑却する者無きに非ず。是れ新聞眼無き者也。

●趣味の人としての黒岩の眞價は、寧ろ第二面に在り。而して萬朝が趣味の新聞たる所以も亦此に在り。

●萬朝の第二面は、其の第三面の如くに、探訪費を要せざるべし。然れども、これほど面白き第二面は、帝都の新聞中蓋し無二也。

●アッケラカンとして棒立するものは、人後に落ちざるを得ず。

●吾黨は報知を讀む毎に、其の營々として、油斷無く立廻るを多とせざる能はず。

●他の新聞に、チラと出たる面白き記事を、見逃さゞる者は報知也。

●彼は好き鳥の卵と見れば素早く拾ひ來て、之を孵化するを怠らざるものなり。

●報知に出る面白き記事の種子は、他の新聞に播かれたるものの過半也。

●通信種をば、尤も巧みに遣ひこなすものは萬朝なり。

●此點に於ては、時事は丸呑みなり。恐らくは消化不良也。

●而して新聞種を新聞より根能く拾ひ出すものは報知なり。

●報知と萬朝とは、地方に於て激烈に競爭を試むるをつねとす。

●東京に在ては、此の二新聞の競爭は、必ずしも目立たざるが如し。

●然れども一たび帝都を出れば、衆力士が梅、常陸の取組を環視するが如く、二新聞をして、傍若無人に競爭せしむ。

●報知が萬朝に對壘するの武器は、通俗と敏活とにあり。

●報知の經營者は三木善八也。彼は學問も文章も何も有せず。唯だ世情に通じ、財を有す。

●聞説、彼の新聞を作るは、中學二年生を標準とするに在りと。

●報知に載せたる、武門武士や日本史蹟や、學校教科書的は愚かの事。全然丸出しのものさへありて、かゝ

るものを新聞に載すとは、讀む他人さへ空址かしき心地す。

◉然れども報知の妙處は則ち此にあり。

◉或は曰く、武門武士や日本史蹟が地方人士を涵養するの効亦少きにあらずと。

◉八幡宮は八幡太郎を祭るの神社也と、說明する大政治家さへありと聞けば、此說、一理無きにあらず。

◉又聞く、三木は編輯長に、一個の金箱を委托し、つねに、其中に百金を充て、隨つて減ずれば隨つて補充し、緩急、用を爲さしむ。

◉彼の編輯局の活動するを得るは、此の如き組織あればなりと。

◉吾輩は、彼に就きて多くを知らずと雖も、此一事以て、其の萬事を推するに足らずんばあらず。

其五

◉著名の舊新聞にして、先づ白旗を戰場に掲げたるは、東京每日也。

◉東京每日は銀座の十字街頭に在り。大ならざれども、町の角に向つて設けられたる西洋風の玄關は、東西南北の電車客の目に熟せり。

◉其の三階は、所謂「文士俳優」の樂屋なりしと聞けど、興行當らずして、脂粉の氣、窓を漏るゝこと無かりし。

◉二階に、玄關の眞上に在る「東京每日」の看板が、月五拾圓の受負を以て、電燈廣告の舞臺となりしを聞きて、吾輩は竊かに、此の名新聞の末路を憐まずんばあらざりき。

◉今や、屋廡未だ朽ちず、社主すでに變更す。悲む可き哉。

◉先きに「日本」の社主を更迭するや、其の國粹を主張するの士、新社主に反抗し、別に「日本及び日本人」を發行して、以て悲壯慷慨の氣を遣る。

◉蓋し、國破れて宗廟猶ほ存し、忠義の士、別天地を占領して以て舊正朔を奉ずるの感あるものは、「日本及日本人」の一派也。

◉彼等は、宋末義士の慘憺たるには似ず、誌運次第に隆昌の勢あり。

●此の如くにして「日本」變更すと雖も、「日本」主義は歿落せず。

●吾輩は「東京毎日」の歿落に對し、島田三郎に多大の同情を表するを惜まず。

●加藤高明の如きは、新聞術を解せずして猶ほ新聞を維持するを得るは、一に黄金の力也。

●彼や既に駐英大使となり、意既に滿つるも猶ほ肩上の重荷に苦みつゝ。月々缺損する新聞を捨てず。

●島田は議員政事家也。新聞は彼に於ては一大武器たらずんばあらず。

●彼が苦みながらも、今日まで「毎日」を維持し來れるは是が爲のみ。

●島田が新聞を失ふは、盤其腕を失ふもの也。彼の痛恨察す可き也。

●神經過敏なる島田は、此の年頭年末必ずや夢寐かならざりし也。

●然れども、「東京毎日」の歿落するや、一人の忠義の士、悲壯高凉の調、以て、社運の最期を表白するものある無し。

●此の如きは、帝都の名新聞の末路として、經營者の不名譽にあらずとせんや。

●吾輩は思ふに、島田が社長としての福利は、債德に因て自ら集來すべし。不人情を敢てして以て社運の隆昌すべき所緣、斷じてあること無し。

●吾輩は、敢て敗軍の將を鞭つに非ず。聊か以て、覆轍の一例と爲すのみ。

●吾輩は、個人としての島田を認識す。然れども新聞經營者としては、失敗の素因あることを疑はず。遣り口は頗る感服す可からざるものあり。

●殊に、其の最後の態度の如きは、平生に不似合に悧巧なりし。

●彼は開城に先だつこと數十日、突然多數の記者を解放す。其の方法、不人情に類するもの無くんばあらず。

●月の初日、會計は、社員の自宅に親展書を送る。書中に曰く、『先月限りの御緣と御承知被下度』

●久津見蕨村、編輯の全權を委托され、欣然として、「毎日」編輯長の倚子に著く。未だ數旬ならず、社は賣渡さる。

●聞說、蕨村は人物論を好むの士也と。彼は島田の研究足らず、即ち此「喜劇」を演ず。猿も木より落つるものなり。

現代人物評論（十三）

正宗白鳥論

△白鳥君

德田秋聲

△白鳥君の作物の批評は世間の批評家が其々言つてゐる處で、輿論ももう殆ど一致してゐるから、僕等が多く言ふ必要はない。

△唯僕の感ずる處では、君はチエホフを能く咀嚼してゐる人であるらしい。他のものも、價値のあるものは大抵讀んでゐられるやうだが、殊にチエホフを能く咀嚼してゐる人らしい。

△談話をしてゐると、其作物に接すると同じく、實にキビ〳〵した人で、率直で、明白で、理解力が速く、觀察が鋭く、何事にも直ぐ判斷がつくと云つたやうな、心持の好い人である。或人は君を接近しがたい人だと言ふが、僕には然うは思へぬ。人に物を强ひぬところ、自分の我を押通さぬところ、交際してゐて決して感じの惡い人ぢやない。

△時とすると、途中などで逢ふと、非常に苦悶の目色をしてゐる事などを見受ける。

△君は又少ながらず江戸趣味を持つてゐる。淸元や富本を聽きに行く事も珍らしくない。僕は絕對に關東の音曲なるものが嫌ひなので、此點で能く話の合はぬ事がある。

△又、人に弱點を見せるなど〻云ふ事は、絕對に嫌ひらしいが、人が言ふほど强者だとは僕は信じない。世のなかには、弱者だとかデカダンだとか云ふ事を賣物にして、人の同情を買はうとする連中があるが、白鳥君は絕對に然云ふ事は嫌らしい。

△或人は又、白鳥君を非常に悧巧な人だと言ふが、悧巧には相違ない。おだてには乘らず、劣者の哀求の聲には耳を假さず、と云つたやうな處はある。しかし、悧巧でなければ、自分の生存を保つて行けない世の中である。白鳥君の悧巧は、唯自から守るだけの悧巧である。人を害し、人を傷けると云ふやうな處は少しもない。言はゞ純白な悧巧だ。白鳥君は、强者の前に屈しないと同時に、弱者に對しても、同情がましい事はしない。然し爲るだけの事は爲る。貧乏のひき倒しに陷る事を不安がつてゐるだけの事だ。

△酒を强ひると、肯て辭しもしない。美くもないが、飮めるだけはグイ〳〵飮んで、眞赤になつて、橫に倒れて、マシ〳〵人の顏を見てゐるのが癖だ。

△要するに至つて善良な人だ。

△正宗君について

小杉天外

○正宗君のエラクなつたのは小説家として頭腦の置き所がよかつたからだ。詰り自己發見をしたのだ。自己の思想、感情、若くは其經歷といふやうなものを深く考へ、深く味へて、其處に人の胸に應へるやうな材料を見出したのだ。僕等は所謂在來の專門小説家的に自家を通り越して材料を探して居つたのだ。僕等でも隨分激しく心臓を鼓動さしたいろ／＼の事件に遭遇して居る。然し其意味を考へたり味へたりすることは比較的閑却して、世間一通りの事から材料を見附けやうとして居た。それが動もすれば只外面的の描寫ばかりになつて了ふ弊害を伴うたのである。例へば青年時代に郷里に於て思うて居た女があるとする。幾年かの都會生活を續けたあとで郷里に歸つて見る。其女が他家に緣付いて子供を産んで、其子供を負うて歩いて居るのに逢ふ。女も自分が嘗て此人に思はれて居たといふ事を知つて居る。他人の目もあるから碌に話もせず、知て餘所の人と何か喋舌つて居るが、眼は一種の光を以て自分を見る。家に歸て靜かに其女の事や自分の身上などを考へて見る、といふやうな事。そういふ事は僕等には隨分あるが、僕等は一向にさういふ事に筆をつけなかつた。これは僕等も餘程考へなければならぬ事と思ふ。

○社會に勢力を得るといふ事はいゝ事でもあり、又望ましい事でもあらうが、自分は反動的の人にはなりたくないと思ふ。反動的の人になつて有名になる事はしたくないと思ふ。變つた事をいふので通す人にはなりたくないと思ふ。又作物でも「正宗のもの」と極められるのが厭やだと思ふ。

○正宗君などは世評には動かされまい。先輩の言にも動かされまい。然し別嬪が口では受つけないやうだことをいつて居ても、「貴女はほんとうに別嬪だね」といはれた時の心持はどんなだらうか。批評眼のある人などから正宗は天才だとか、正宗の作物が一番自然だとかいはれた時にあの利かずやの正宗君が如何に感ずるだらうか。一寸面白いと思ふ。

○正宗君は非常に鋭敏な感情を持て居る。そこは全く天才ともいへる。人の話を聞いて居ながら先きの先きまで分つて居る人である。だから自分の前で口を動かして居るものは正宗君には皆馬鹿に見えるだらうと思ふ。つまり頭腦の回轉が早いとでもいつてよからうか、先きの先き迄飛んで行く人である。

○正宗君の作物では「五月幟」「世間並」などが面白いと思つた。正宗君は藝術が嫌ひて、而かも藝術家になつて行く——否已に藝術家になつて居るのである。先づこんなお話で御免を蒙りたい。

△初めて正宗白鳥に會ふ

生方敏郎

其人の作物を愛讀すれば其作家の面貌に接し度いと云ふのは人情の自然である。好奇心もあらう崇拜の念も交つて居らうが兎に角會つて見たくなるのは僕ばかりではあるまい。近頃僕が會ひたがつてゐた作家が四人あつた。其中獨歩は此春まだ病氣の始まる前で恰度湯河原へ行つてる時或晩德田秋江氏の所へ遊びに行くと秋江氏が「どうだ君今獨歩が湯河原にゐるが後を追つて行かうぢやないか」と云ひ出した。此時は僕の他に畫家の正宗得三郎君も居た、そして其頃（今でもさうだが）僕も正宗君も共に浪人してゐたから、大に宜からうと早速約束が成立した。けれども三人が三人暇もあり金もあり身體の工合もいいとかう三拍子揃ふのは中々六ヶ敷もので其なりのびのびになり獨歩はぽつくら行つて終つたから遂に今生では會へずに終つた。次は二葉亭四迷で此人に會ふ爲めにはわざわざ幾枚も紹介狀を貰つて聢き乍らぐづぐづしてゐる中にロシアへ行かれて終つた。殘る二人は島崎藤村と正宗白鳥の二人だが島崎さんとは明治學院で同窓の關係もあるが之はまだ會つてみない。正宗白鳥の弟得三郎君とは最早七年から親密な交際を續けてゐるから氏に關する話は實際交際してゐる人よりも委しい事を知つてゐる。殊に僕が早稻田の高等豫科に在學中得三郎君と一所に借りてゐた同心町の寓居は先に白鳥氏と秋江氏とが共同で借りてゐた家だ。だから白鳥氏と僕は同じ疊の上に寢れ同じ壁に寄つて本を讀むだ縁故がある。其頃はまだ氏がお伽話や劇評を書いて居た頃で會つた事もない。僕等は氏が他日文學界の寵つ子になる事など全く思ひもよらなかつた。唯早稻田の先輩と云ふ廉で其居た跡を借りて這入つたのが何となく嬉しく會つてみたいと度々思つた。けれど弟の所へも滅多に來ず弟の得三郎君も滅多に行かず。兄の所なんて行つたつてつまらない位の事は聞いうなどと勸めもせず。又向ふから弟に會ひに來た事も二三度あつたさうだが恰度僕が居ない時と、居た時はうつかり知らぬ間に歸られた。僕から一番先樣訪問とやつてみやうと思ひ立つた事もあるが、あの人は頗る付きの變物だ誰であらうと氣が向かなければ返事もしない、よせよせと誰やら遮へつたものがある。而してそれなりけりに止めた。其から四年ばかり經つと此人が小說を作つて有名に成つた。僕は氏が有名になつてから氏の小說を作る事を知り其小說を見付け次第讀むだ。讀むと會つてみたいと云ふ昔の願を再燃させた。

明治四十一年の正月坪内博士の邸で早文出身の者の會があつた時顏を見た。顏はぢろぢろ見るのも質が惡いから遠く（僕は五度の近眼だが三年前にかつた八度の眼鏡を懸けてゐる）から見ただけで餘りよく見なかつたが弟の得三郎君に似た顏だ矢張何所へ出しても兄弟だなと思つた。そして其時丈の低い事を認めた。

此會のあつた三月程前から僕のお向ふへ得三郎君が越して來たので二

人は朝晩行來してゐる。小說の話から自然兄きの話も出る。そして變人には違ひないが人の云ふ程氣味の惡い人ではない。いつか會つてみるといい、と今度は得三郎君からすゝめて出た。ああそうしやうと云つてゐた、そして其時は是非近づいて見たいと云ふ念が熱して來た。併し僕は尻が重い臆劫がる質なのだと見へて、かくして七ヶ月餘を送つた。

七月の始め岡村野水君に會つて原稿を買つてくれと約束した。そして其翌々日「明け方」と云ふ小品をやつて日曜附錄にのせて貰つた。七月の末得三郎君が「君いつか兄貴(あにき)の所へ行つてみい、君の話をして置いたから」と言つて森川町の下宿を教へてくれた。四五日して千駄木の石井柏亭君に用事があつて行つた歸りに一寸寄つて見たら其の時は留守であつた。

八月九月は故鄕へ歸つて過ぎ十月北品川の御殿山に來てから其二十四日の午後雜司ヶ谷の秋田雨雀君の家で雜司ヶ谷親睦會があつた、得三郎君が幹事で相馬御風 德田秋江君など來り水野葉舟君も期せずして會した。中々錚んであつた。夜得三郎君の家に一泊した。

すると翌朝得三郎君が兄きは今度東片町に家をもつて之れ〳〵の所に居る來月からは働くと云つとつたから會ふなら今月の中がいい行つて見たまへと云つた。そこで行つたのだ。

天氣はよし菊の時節で本鄕は中々賑かであつた。始めて會つた人は向ふが話の聞き上手か又話し上手かでないとテレるものだ。だから是非始めて行く所は人に連れてつて貰ふのが一番いい。けれどいい年をして其騷ぎにも及ぶまい、話をハートツーハートにするには却て一人と一人の方がいい。そこで始め一人で向つたのだが家が知れない。聞き步くのも面倒だから知つてる岡村君に遊び旁た案內を賴む積りで西須賀町を訪れると留守。

そこで又引くり返して東片町へ來た。二度目には米屋と牛乳屋で聞いたので直き知れた。玄關の取次は無論婆やが出た。德田君が見つけてやつた婆やで噂さの上では之も旣にお近かづきなのだ。名刺を持つて這入つてかさこそ片づける音がして婆やは再び出てお上りなさいと云つた。

默つて一つ叩頭をして頭をあげて向ふを見ると氏は前に置いた布團を見乍ら「さお敷きなさい」と云つた。僕は例の癖で遠慮をするのではないが唯「はい」と云つて其儘にゐる皮肉に云へば之は僕の癖で何事も人に世話をかけなければ面白くないからだ。すると前のと押し續けて又「お敷なさい」と二つ斗り云つたから遠慮なく布團の上へ乘り迻つた。けれどいつものやうに安坐(あぐら)がかけなかつた。僕は大抵の所は洋服の日には安坐をかく。默つて御免蒙むるんだ。今日も坐らうと思ひはしなかつたが始めての所のせいかつい坐つてから、やあ〆つた。急に安坐にするのも妙だからもぢもぢした。對手の顏を見ると顏立は一寸眼鼻口元など弟の得さんそつくりだ。けれども色が黑い。色の黑いのは强情だと云ふ事を兼て石龍子に聞いた事がある。ははアあれを一だん强情にしたのだなと思つて尙ほ向ふを見ると氏は僕の膝の邊を見てゐたが、一寸顏をあげてまともに僕の眼を見た。心の中まで覗(のぞ)くやうに見た。僕も眼に力を入れ

て見つめた。どつちからも言葉は出ない。之を小山内式に記號で出すと

『…………………………………』

『……………』

『………………………………………………………………』

此位してから僕は前の火鉢を見て更に轉じて一かん張の机を見た。机の上には書きかけの原稿紙がのつてゐた。強い眼だなと思ひ返した。得三郎君も時々かう云ふ眼をする事があるが氣心を知り合つてるから何とも思はない。此眼にも大方毒は無からう。

まだ向ふでは默つてゐる。けれどもしらをきつて默つてゐるのでない事は樣子てわかる。其時の氏の手のやり場は今忘れたが兎に角イライラして何か話さうとして話しえずにゐたらしい。僕らの話の口を切つた。

『私の事（正宗と喉まで出たのを飲みこんで）得三郎君から何か話しがあつたでせう』

僕の口から猫家の正宗を得三郎君などとあらたまつて云つたのは開僻以來恐らく之が初手だ、若し正宗が僕の眞顏でこんなことを云ふのを聞いてゐたら何んなに笑ふだらうと心の中で思ひ乍ら向ふの言ふ言葉も聞いてゐる。

『近頃はちつとも來ませんが』之は始めて白鳥氏から出た言葉である。之は僕の「何とか話して置いてくれたらう」の意味の初對面の挨拶に對する文句で、つまり「ずつと以前に弟から君の話を伺ひました。併し」と之だけを胸の中で云つて終つて其殘りだけを發表したのであらう。

『は』と僕は受けた。

筆をとつては縱橫に長廣告を弄し得る文士の初對面に於ける口上は之れ丈けにすぎぬ。

之から又雙方沈默に返つた先程の記號を以てすれば凡そ紙の四五枚も費つた所で、氏は不圖思ひついて茶をすゝめた。

僕はどくりと一ト口のんだ。そして對手の顏を見ると當にかゝつてお面と竹刀を打ちおろすやうに例の切れ長の眼光を向けた。

どうしやう、矢張此分ではテレさうだと中々心配になつて來た時。

『君今何もしてゐないさうですね』と來た。

『ええ』

『では困るでせう、何かさがしてゐるんですか』ときく。

弟の正宗が僕の窮狀に同情して何か賴んでても置いたと見える。

『いいえ別にさかしません。絕望の安心を得たのですね。明日は明日の風が吹き來年は來年の風が吹くと思つてます。』と少しもぢもぢ云はうか云ふまいかと思つて『それに國のお袋が病氣で兄弟交る〳〵看病に行くやうな譯ですから落付いた仕事は出來ないですから』『さうですか』と云つたきりて又話はふつつりと切れた。

氣がついて見ると我乍ら變ちきりんな坐り方をしてゐる。それに體も前に丸くかがんでゐた、宛で猫のやうであつたらう。と思つて體を眞直

ぐにして足をキチンと坐つた。ヅボンの形がくづれては叶はぬが僅かの間だ辛棒しろとなる。

しばらく何も考へずに默つて見てゐた。そして茶を又一口すすつた。其時氏は刻み煙草(あやめ)を長管の雁首につめて、二三服ふかした。ああやつぱりテレ隠しだなと思つた。そして僕は煙草を止めたが、こんな時は大損だと後悔して羨みながら見てゐた。僕の心も知らん顔で烟はふわ〳〵悠然とあがつた。

『貴君の原稿が來てました。』

『ええ、つまらないもので』まだ駈け出し文士だから僕は非常に羞かしい。下を向いてヅボンの膝をなでた。

『今度のは長いものですね。長いとどうしても出すのが晩くなります。恰度組み合はされる時まで待たなけりやならないですから。どうしても論文の方を先へ出します、新聞の方ではつまらなくつても論文だと人の事を書いてあるからどうしても人が讀みますから。』

僕が『ええ』と答へると氏は更に『どうしても短かいものがいいでせう。五枚か四枚のものだと早くのせられます』

『ええ、今度からはそんなのにしませう』

かう云つてから論文がいいと云はれた事を考へなほして

『「春」みたいなものの批評は何うでせう』

『いいでせう。「春」ばかりでなく「生」でもまだしつかりした評が見えません　ら今やつたら面白いでせう。「春」は合評する譯に成つてゐますがな。まあそれを一つおやりなさい。水曜日が〆切ですから其迄に送れば間に合ひます。』

『本は出ましたね』

『ええ廣告までしてゐるんですから出たでせう秋田君の所になぞありませう』

『昨夜みんな集つたので僕も行きましたがまだださうです本屋にはありませう』

『ありませう』

僕は今五十錢たらずしかもつてゐないとても今日買つて行けないんだ。

『あなたの所にありますか』あつたら借りて行く積りだ。

『まだ持ちません。其所らの本屋に來てませうから買ふなり他所で借りるなりしたらいいでせう』

又しばらく談が切れて氏は烟草をつめつめ時々チョイチョイ僕を見る。突然其時「小野さん」の事を思ひ出した。僕もこんな風をしてゐる所は「小野さん」に見へはしまいか、をかしく尻こそばゆくなつて來た。併し」と自ら思ひ返した。僕だつて貧しんぼうの久さんや獨立心節儉家の何とか云つた人あんなものではないし、又氏の方でも無理にもさう見やうとしては居まい。正宗の兄だからまさかそんな惡意はあるまい。

けれどこんな風をしてイラ〳〵してテレてる所は僕も慥かに人物が少さい。之では矢張そんな類ひのものに見られるかもしれぬ。テレまい〳〵

テレては馬鹿馬鹿しい、落着けと自ら號令した。

氏は一服すつて火鉢の縁に雁首を叩きながら『いつかの綠雨研究は面白かつたですがあんなやうなものもいいです、今のものでなくても構ひません』。思がけぬ涌ての助け船だ、之に乘つて話をたぐつて行けばいいのに矢張又も面喰つて『さうですか』と我ながら簡單な挨拶をして終つた。

之て此日の會話は永久に終つたと云ひたい。氏は默つて煙草ばかり吸つてゐた。あの分で僕が長居をしたら邪になるだらうと思つた。そこで僕の方から色々話をもちかけた。今歸るのは折角品川から本郷くんだりまでやつて來て餘りつまらぬとも思つたし、遠くから來て餘り一寸て歸るのは先へあたゐやうにとられはすまいかと思つて去りあへなかつた。

机の上の原稿を見ながら『御忙しくはないんですか』と聞くと何とか答へたが餘り早く口よりは寧ろ首を前へ突き出した其身のこなしで答へたのでよく聞きとれなかつたが多分「いいえ」と答へたのであらう。併し書きかけの原稿があるのに忙しいのは知れきつてゐる。知つてゐて聞いてみたのだ。

『社は毎日御出かけですか』

『毎日でもありません』と至極かんたんなものだ。尤も之れ丈けしか答へやうもあるまい。僕は羨ましい身分に成つたものだと對手を羨み自らを顧みて耻ぢた、此話も之て切れた。僕はせう事なしに前に置かれた新聞を取りあげた。二六と國民今日に限つて見るやうな好文字が無い。讀賣は今朝床の中で見て來た。繰り返してみるにも及ぶまい。新聞を楯にとつてテレるのを防ぎやうもない。

『國民は近頃文學で賣り出さうとしてゐますね』と聞いた。氏は唯『えゝ、え』と云つた。國民が去年迄から文學で賣り込まうとしてゐた事や近頃又國民文學などを始めた事位ゐ素人も知つてる事だ。僕にせよ（僕は去年朝日に居た）先様にせよ百も承知の事だ。いや之と限らずテレ隱しに僕から云ふ事は一として百も承知の平凡の事しかない。實際の所僕は之れても發句家の積りだ。洒落や味な文句を並べる事ならさう人後には落ちない積りだ。けれど今の所洒落も警句も吐き出す機會が生れて來ないのだ。かうして又向ふから新らしい話題の出るのを待つが氏は煙草にも飽きて火箸でヤニをほぢり初めた。一寸矢張話に困つてゐるやうにも見えるが斯う云ふ餘分な遊び場（逃け場と云はふか）があるから力強いらしい、テレてるにしてからが大して騷がない。對手が平氣で居るだけ此方はなほぢれる。此儘沈默の爲めに命を刻まれて殺されさうだ。實に苦しい苦しいと云ふ心が顏へ出ては叶はぬ。ああ何だつてさつさと此刻話の切れ目に歸らなかつたらう。今となつては歸るにも歸れない。所謂跋が惡くつて。

「來年からは翻譯でもして氣樂に暮したいもんですが」と何氣なく獨り言のやうに云ひ出したが 其から 電の如き 連想に依つて刻下にかう思つた。先刻將來の身の振り方について聞かれた時あんな呑氣な事を云つたが、先様も「へい左様ですか」と斗り手を引かれれば其ぎりだ。此機に

乗じて何分よろしくと頼んで終へばよかつたものを。とかう後悔し乍ら『矢張何てすか、翻譯はロシヤものが一番てせうれ』と自分てきめて置て賛同を求めるやうな聞き方をした。

『ロシヤかフランスてせう』

『フランスの方がいいてせうか』ときいた時何とか答へられたか聞き損れて聞き返すと「そんな事より賣る口を探して掛る方が肝要だ」と云つた。此時不圖五月蠅奴と思はれはすまいかと思ふと氣が氣でなくなつた。扨て引切つて歸るのは益々拙い。大に困つてあたりをキヨロキヨロ見廻したが、之は又行儀を知らぬ者のする事と氣がついてやめた。

併し考へて見れば俺は此所まで人の御機嫌をとりに來はせぬ。否俺はお客さまだ先方から是非御機嫌をとられて見たいと思つた。何もさう迄そわそわする事はない。誰だつて忙しい時に邪魔者が來る事はある。今日は日曜日だ。尻を据えてやれ。

けれど又更に考へて見れば、氏は僕よりも我儘の點に於ては遙かに上手らしい。我まま競べをしてはとても勝てまい。などと思つて見ると又煙草をふかりふかり吹かして何を思つてるか其腹は解らないが落ついて鋭い眼をしてゐる。糞ッ人をこんなにぢらして濟ましたもんだと思ふと先が憎いよりは自分の弱さいくぢ無さが憎く口惜しく成る。大きい人間の前へ小さい人間が不用意に飛び出したから此苦痛を受けるのだらう。忌ましいが俺は踏み つけられて 動きがとれぬ形だと 自ら情けなくなつた。裏の方てガタヒシ騒がしい音が聞えたり小供の喚くのが聲えたりして來る。此所も靜かな所てはないと思ふ。頭が妙になつて來て又も何から話さうと考へ込む。同心町の家の事、早稻田の事友人等の事自分の事文學の事芝居の事色々が頭の中て往來して消し合つた。そして其結果「先刻岡村君の所へよりましたが留守でした」とか「展覽會の合評はなされるのですか」とか用もなければ與ものらず極まりの付かぬ話や問を幾つとなく提出したが氏は依然として平氣な顏て短かい返答を與へた。だんだん氣のない話を持ちかけ乍ら其の顏をつくづく見ると六年このかた實に兄弟同樣——否なある時は兄弟にも話せぬ事まで打明けて——口して來た得三郎君の俤がそつくりすうと浮んで來る。眉ても眼ても鼻ても頬ても實に自分の眼には見馴れた眉や眼や鼻だ。なつかしい顏なのだ。得三郎君と二人てゐる時も山雀みたいに喋舌りつづけてはいない。二人默つて江戸川の方を眺め入つてゐた時は幾度かある。しかも其時は暖かい友情が胸から胸へ流れてゐた。だから之も又默つてゐても懷かしい顏に違ひないのだ。けれどさう思ふ傍から非常な壓迫を感じ、窮屈て堪らなく成る。一つ口をきいては後悔し一つ身動きをしてはハッとする。何故だらう。何故でもない、此方は兄貴か叔父御の家へ來た心なのに肝心の兄貴は存外眞面目て莞爾ともせぬ。叔父御の方がはにかんてゐるのだ。若し向ふが打解けて笑つてさへ與れれば此窮屈は直ぐに脫れやう。併し初手から何人に向つても一見舊知巳の如くなれよと望むのは此方の無理だ。會ふ事が度重なれば談笑の中に胸襟を開くに至るてあらう。今の心痛は其顏に馴染んて居ながら其人と親しく成つて居ぬ矛盾から來るのだ。

……先方の默つてる間にかう合點が行つたから「では「春」の批評を書いてみませう」と以前の言を繰り返して暇乞の伏線に備へると「其れがいいでせう」と玄關へ送つて僕が編上げを穿く間も立つて見送つてゐた。

外へ出ると俄に世界が廣いやうに感じた。

（明治四十一年十一月二十五日即ち其當夜北品川御殿山の僑居に於て之を記す）

昨夜白鳥氏の弟得三郎君の家に一泊す。寢物語に「君の兄貴は人を睨め付けるなア」と云ふと君は答へて一昔からあんなきつい眼をよくしたものだ。喧嘩をすると人をヂツと睨むのが癖さ。僕は暴れん坊だつたからよく喧嘩して睨め返してやつた。（同月二十九日）

△人を愛せずして、人より愛せらるゝ人

島崎藤村

正宗君に就き、僕の所感を述ぶれば左の如くである。態度の人。判斷力に富める人。藝術家にして改革者の精神を兼ね具へたる人。人を愛せずして、人より愛せらるゝ人。

△正宗白鳥

白雲子

白鳥君の作を讀むで甚く感服したのは、『紅塵』のうちに收められて居る『塵埃』、あれが始めて雜誌に出たときであつた。其の頃自分はまだ雜司ケ谷の奥に引込むで居て、性來の讀書嫌ひが如何云ふものか英譯の露西亞ものに讀耽つて一人で興がつて居た。其時の自分の感じは今でもよく覺えて居る。北向の寒い部屋で行火を抱いて友人の送つて呉た雜誌を讀むで居ると、不圖白鳥君の『塵埃』と云ふのが眼についた。初めのうちは讀むともなしに讀むで居たが、二三頁讀むうちに全然氣に入つて、一度讀んで了つてから最一度讀み返した。

今でこそ『塵埃』のやうな作に對しても餘り珍らしがりもしなければ驚きもしないやうになつたが、其頃にあつては實際其の着想と云ひ描寫と云ひ、猶一歩進めて云へば、作者の人生に對する觀み方は、少くとも他に其類例を認めることの出來ないものであつた。兎に角自分は初めのうちは只何と云ふことはなしに『塵埃』を面白く感じたので、從來の日本の作家には類の無い型の作家だと思つた。其の頃自分の好きであつた獨歩と秋聲、其の二人の作とはまた一種趣の異つた味のある作をする人だと思つた。そして其の作の持つて居る一種の鋭どさは、到底此等の二家を以つてしても及び難いところであると思つた。自分は全く此の鋭どさ

にチャームせられて了つた。

只單に銳どいと云ふだけならば、隨分此までの作家にも其の例は少くなかつた。皮肉と云つても矢張同じことである。併し白鳥君の作には、單なる皮肉乃至は單なる銳どさ以上の或物かある。これは獨り『塵埃』のみてはない。其の後に出た多くの作、最近の諸作を通じて悉く然りと云ふことが出來る。白鳥君の作の特色を擧げて、其の皮肉な點乃至は其の銳利な點を云ふのは可なりてある。が、單に其れだけでは氏の作の根本的の特色は盡されては居ない。云はゞ其は只に表面の色どりたるに過ない。氏の作を讀む程のものには何人にも直ぐにそれと感じらるゝ特色である。單なる皮肉や銳利は正太夫や天外の初期の作にも隨分認めることが出來る。別に珍とするにも當らない。

然らば其の根本に蟠づて居る或ものとは何であらう。直ちに其根本に訴へて、抽象的の言葉を以つて之を顯はさすことは頗る六ケ敷いことである。試みに之を從來の皮肉乃至は銳利なる作物と比較して見やう、先づ第一に氣の着くところは、同じく皮肉同じく銳利にした處て、氏の作には一種の深さがある。此の一種の深さは獨とり氏のみの作に止まらず、自然派の勃興とともに競ひ起つた多くの作家の特色であるが、此の深いと云ふことは、人生の奧底まで觸れて居ること、生活の眞の相をあるが儘に暴露して居ること、作者の空想乃至は主觀によつて捺えられたものてないことてある。從つて他の半面より見れば、單に作中に寫し出されたる局部的の事象のみならず、其以上全體の人生生活などをバックとして、讀者に其を思ひ浮ばしむると云ふ點も生じて來る。つまり氏の皮肉と銳利とは、此の深さと結び着いて、人生生活の深奧に徹し、骨髓を剔る底のものとなつて來る。此は從來の作家に見られないところであるが、併し氏の特色は單にこれのみては盡されて居ない。まだ此以上の或ものがある。

氏の作の根底に横はつて居るものは、氏自身の性格である。氏の作は其の觀察と云ひ描寫と云ひ、氏自身の性格のさながらの發露と云つても可いやうに思へる。少くとも氏の作には個性の匂ひが如何にもさはやかに深く顯はれて居る。何人と雖ども模倣し追隨するを得ない一種獨得の或ものは、此を氏自身の個性の發露と云ふより外に、適當の言葉はないやうてある。氏が果して如何なる性格を持つて居られるかは不幸にして自分は親しく氏に接したことがないから充分に知ることは出來ないが、併し氏の作を通觀した處て、殆んど何れの作にも、相通じたる一種の特色を備へて居る點から見て、其特色を氏の性格の發露に歸するのは決して見當違の見解では無いと思ふ。――無論如何なる作家の作も多少なりと作家自身の性格の顯れないものはあるまいが、氏のは特に其が吾々に目立つて感じられる。――

氏は曾つて氏の初めての短篇集『塵埃』の序中に次のやうに書いて居られる。

予は幼時祖母から岡山騷動の面白い物語を聽き、又八犬傳を拾ひ讀した頃、行々は自分も小說を書いて見たいと思ひ、小學校卒業當時の

作文課題にも、幼稚な馬琴論を書いた程であつた。その後耶蘇教を信仰することになり、全く小說を棄てゝ、宗教書類に月を注ぎ、將來傳導師にでもならうかと思つた。しかし何時の間にか宗教心も消滅し、世の中の事は何もつまらなくなつて了つたが、兎に角生存はしたい、生存するには何か仕事をしなくてはならぬ。その爲に早稻田卒業後六年間いろんなことを書いて來た。茲に集めた短篇小說は、その詮方なく書いたものゝ一部である。巧拙は別として、予自身にはこれを集むるに當つて多少の感慨の湧くを覺える。予は最早八犬傳心醉時代のやうに世の中が五色の綵で色取られて居るとは思はない。宗教信仰時代のやうに、世の中に最善の神意が行はれて居るとも思へない。青春盡きんとするの今、過去を顧みれば、よくもかゝる夢を見て滿足して居たかと思はれる。しかし數年の後更に今日の我れを嘲ける時があるかも知れぬ。

成程皮肉な筆致も見える、一種投やつて了つたやうな調子もある。しかも其うちに何處か一種惻々として人の肺腑に迫るやうな眞摯の氣が全體の上に漲つて居る。氏は自ら云ふ如く、一度耶蘇教を信じて後之を捨て去つた人である。しかし自分は氏が耶蘇教を捨て去つた動機は、世間の改宗若くは還俗者のそれとは大に趣を異にして居るのではあるまいかと思ふ。恐らく氏は之を信じた時の眞面目さと同樣の眞面目さを以つて之を捨て去つたに相違ない。何等かの矛盾衝突に苦しんだ眞摯熱烈なる奮闘の結果であつたに相違ない。兎に角自分は氏は極めて眞面目な而して極めて正直な性格の人であると思ふ。

以従つて氏の作には皮肉もある、捨棄的な色どりも帶びて居る、投やり氣味な捨鉢の調子も見える、而も其の奥のものを貫いて一筋の眞摯の氣が脈打つて居る。一點の衒氣もなければ扮飾も無い。拵えもしなければ巧みも力めない。氏の觀、氏の感じた人生生活乃至は人物が、さながらに顯れて居る。此の故に氏の特色は更に一層の強さと深さとを以つて讀者の胸奥に刻み込まれる。

併　此以上にまだ氏の特色はある。氏は如何なる風に人生を觀、生活を觀て居るだらう。吾等は進んで此點から氏を研究して見なければならん。之を作の上に顯はれた處から見ると、　氏の見たる人生何如にも興味の無い人生である、氏の所謂兎に角生きて丈けは居たい、生きて居るには働かればならんから働くと云つた風の人生乃至生活である。明るい華やかな半面ではなくて、むしろ暗く寂しい半面である。と云つて必ずしも悲觀してめそ〳〵泣き出すのでは無い、無論また人生を咀つたり反抗したりする側でもない、眞面目に悲觀し呪咀し反抗する程の興味を持ち得ない、一切の刺戟に對して興味を感ずることの出來ない生活である。多少の反抗乃至呪咀を心に抱くとも、自ら進んでそれを主張し實行しやうと云ふ程には裟婆つ氣の無い、謂はゞすれて悟つた人生と云つた風のものである。氏の作を讀んで見ると、其の人物若しくは其人物の觀たる人生觀に、多少なりとも如上の意味の顯はれて居ないものは殆んど無いと云つても可い位である。自分は不幸にして此の傾向を簡單明瞭に顯すべ

言葉を知らないのを遺憾とする。

如上の傾向は徳田秋聲君のそれと稍相似た點が無いでもないが、併し兩者の間には、其の文體の相違の如く、根本の觀方に於いて截然として超ゆ可らざる相違がある。秋聲君のには生活の興味が白鳥君の程消滅(アンニユレート)せられて居ない。充分娑婆つ氣がある。只其の描かれたる人物が陰氣な消極的の傾向を持つて居ると云ふ大體の傾向の上に於いて、相似て居る丈けである。秋聲君の描く人物は屢煩悶するのに反して白鳥君のそれはよくすねる。

白鳥君の文體、これ將た氏獨特のものである。故獨歩君、若しくば秋聲君の如き多少の類似を認めることが出來ないでもないが、而しそれも類似と云へば云へる位のもので、むしろ獨特と云つた方が當つて居る。素朴な眞摯な直截な時とすると峻辣な文體は、氏の思想を遣る上に、此の上も無き適當なもので、思想感情の上の氏の特色は此の文體の上の特色に助けられて、更に一層明瞭となり深刻となつて居る。一點脂粉の氣を交へざる粗朴な直截な筆致。――最近に至つて稍其の描寫筆致の上に圓味ゆとりとも云ふべきものを多少生じて來たのは事實であるが、其は作する上の熟練から生じたことで、根本に至つては依然として動かない。氏の文章を讀むと所謂名文とか能文とか云はれて居る文章に對する考へが根本から破壞せられて來る。所謂名文能文に人を動かす文章は殆んど全く無いことが分つて來る。

昨年から今年にかけて殆んど文壇は氏の獨擅場の觀があつた。自分は並に前途に大活動大發展のあらんことを祈つて筆を擱く。

△白鳥君

醒雪

白鳥君の作物にも讀まないものも多いから、或は見當違ひの評かも知れぬが、とにかく自然主義とか稱せられる、陰氣な弱々しい意志の薄弱な人物が多く出て來て、讀み了ると、何だか、人間といふものは、かくも果敢なく弱く意氣地のないものであるかの如く感ぜしめるといふ傾向のあるのには、僕はどうしても不滿足だ。古い頭かは知らぬが、かのタウデンの樣にフトンの樣に、何でも文學は人間の最高の思想でなくてはならぬ、豐榮昇る朝日影の樣な希望に滿ちたものでなくてはならぬと今もなほ信じてゐる。よしやそこに描かれた人物は、生活に疲れ果てた殘骸であらうとも、猫の如く犬の如き肉慾の醜塊であらうとも、讀み終つた人類は、未讀の時よりも更に力のある、更に氣力あるものとならねばならぬといふ考は、今もなほ僕の信仰である。文學が唯美といふ點から、或は慰といふ點からのみ說かれてゐた時代が去つて、眞面目な人生の反省であつて、人間の思想のあらゆるものを對照とすべしと說かるゝに至つたのは、確に現代の進歩である、但しその反省の結果が只悲觀である、絕望であるといふならば、それはまだ反省の足りないのであらう。深き

旦害の果としては必ず一大戯畫がなくてはならぬ、そのエキザルテツトな調子が全面に行き渡つて、こゝに文學は人間の向上に資すべきではあるまいか。思はず話が岐路のみに入つたが、かの無解決とか、近代的懸疑とかいふことのみ唱導してゐる人々には、未だ今一度打破すべき或る物が殘つてゐるのではあるまいかと思ふ。

僕の見た白鳥君は極めて眞面目な態度である、現在の自己の眼に影じた儘を最も忠實に描いて、技巧或は小細工を弄して所謂る興味を添へようといふ誘惑からはなるべく遠からうとしてゐると見える。これは極めて尊敬すべき態度で、そこに一點の批難もないが、唯白鳥君の眼に映じた影が、果して實相であるかどうか。人間は今少し立派な、今少し意味のあるものであるのではなからうか。それが僕の唯一の疑である。

△正宗白鳥氏

田山花袋

△何にも話す事がないなア。「文章世界」にも一寸書いたが、正宗君がこれから、從來好んで書いたやうな一種の人物――正宗式ともいふべき人物を材料にして行くか、「明日」「新藥師寺」「閑日月」等にあらはれた自然主義の本流に入つて行くかは注意すべきことであるが、而し自分は後者の方に入つて行くより外、道はないだらうと思ふ。尤も一種の人物を書くといつても其の人物の見方なり、書き方なりが、段々進歩して、書く觀、深く觀、又巧みに描くといふ事になれば、それも亦よからうと思ふ。例へば新年のものでも「未見の人」「誕」などは在來のものと餘り變らぬが「地獄」などはずつと巧みになつて實によい。恰でチエホフだ。何となく怖くなつて讀み畢れば、(藝術上の批評ではないが)「乞ふ自愛せよ」と正宗君にいはざるべからざるやうに感ぜしめる。

然し自分は矢張り後者の方、即ち自然主義の本流の方に入つた方がよさゝうに思ふ。正宗君の作物では「明日」と今度の「地獄」などが最もよいと思ふ。

△正宗白鳥論

御風生

○白鳥氏の作を讀んで見ても、又白鳥氏その人に接して見ても、僕には白鳥氏と云ふ人は頭(ヘッド)の人だと云ふ判斷が一番有力に思れる。白鳥氏を弱いセンチメンタルな境涯を經て自覺して彼樣(あゝ)なつたのだと云ふ人もあるし、或は眞面目な「生一本な、思ひ上つてる青年の人が、感情が非常に高く鋭くなつて、此の世の中に向つても見たが、世の中の人は存外くだらなく、物が分らない。そして曖昧で、濁つて、如何も斯うも動かす事さへ出來やしない。その樣々な不快極る有樣に觸れてそのつきつめた心

持が、それでしまつた人」だと云ふ人もあるが、僕には矢張り頭の人と云ふ印象がどうしても第一に來る。白鳥氏はハートよりも頭の力の勝つた人である。これが僕の白鳥氏を觀る根本になつて居る。

○白鳥氏を變人だと云ひ、變り者だと云ふ人があるが、併しその變人だ變り者だと云ふ意味が何を標準に云ふのか、標準次第で變り者とも物の分つた人とも云へるので、僕は白鳥氏を變り者だと云ふのには一概に贊成はし兼ねて居る。寧ろ僕から見れば、氏は非常に物の分つた人である。分り過ぎた人であると思ふ。

○が、此の「分り過ぎた人」と云ふ言葉は、普通世間で使ふのとは意味が少し違ふ。世間で「物の分つた人」と云ふ時は、多く自分に都合の好い人の事を云ふ意味が含んで居る。僕の此處に「物の分つた人」と云ふのは、サテラリーに云ふのである。

○成程世間で云ふやうに白鳥氏の半面には弱者たる所があつたらう。さまざまの壓迫も感じたであらう。又思ひつめた事もあらう。が、若し白鳥氏にして情(ハート)の人であつたとしたら、決して今日の如き平靜無事な人とは爲れはしなかつたらうと思ふ。白鳥氏は弱者である。壓迫にも苦しんだ。又思ひつめた事もある。それは假に事實としても、氏は根底が頭(ヘッド)の人であればこそ、今日のやうな特色を發揮するに至つたのだ。

○白鳥氏はヘッドの人である。隨てその過去の經驗も、多くヘッドで觸れた經驗であつたらうと思ふ。ハートで接した經驗でなくて、ヘッドで接した經驗が多かつたらうと思ふ。熱した事があつても、ヘッドで熱した場合がより多かつたらうと思ふ。

○氏を物の分つた人と云ふ僕の意は、ヘッドの經驗の甚だ多かつた人、そして世の中に對しても、自分に對しても、よく分つた人と云ふのである。氏は世も我も分つて、分り過ぎた人である。氏は「冷(さ)めた人」でなくて「覺(さ)めた人」である。

○白鳥氏は頭の人である。が同時に我の強い人で、小供の頃からさぞ强情な人だつたらうと思ふ。又一時はヘッドで非常に熱した事もあらうと思ふ。即ち熱烈な思想を振りまいて我を張つた事もあらうと思ふ。

○僕はツルゲネフの書いたルーヂンとバザロフとを一線上に並べて見て、何處かに白鳥氏らしい處があるやうに思ふ。

○ルーヂンのあのヘッドの熱した態度は、一度は白鳥氏にもあつたらうと思ふし、又バザロフの親父がバザロフの事を人に話す處に子供の頃から眞面目な、親などにあまり心配をかけない勉强家であつたと云ふ事があるが、白鳥氏の以前は眞面目な純潔な勉強家だつたらうと思ふ。

○いろいろな事を想像した揚句、僕は白鳥氏をば、情で熱して世の中と戰つて、敗れて、さうして覺めて、皮肉を云つてる人だなどゝは、どうしても思へない。僕は矢張り白鳥氏を頭(ヘッド)で世と接し、頭で覺めた人と思つて居る。

○思はずも、飛んだ人物評をやつてしまつた。が、これを云はなければ、僕が白鳥氏の作を讀んで感じて居る事が、云ひ表せぬので、白鳥氏に對しては甚だ禮を失した譯だが、つい云つてしまつた。

○そこで、僕は白鳥氏の作の特長を何處に一番多く認るかと言ふに、矢張氏の思想が大膽に出て居ると云ふ點にある。氏の進んだ頭に映じた人生が大膽に出て居る點にある。無論その技巧の方面に、敬服すべき點は非常にあるが、最も氏の作が僕を引きつける點は、氏の進歩した思想にある。氏の人生觀にある。氏の作から、氏を想像して冷やかな皮肉屋であり冷め切つた人であり何等の望もない人であると云ふやうな事を云ふのは、矢張り氏の思想を氏全體と見て居るからだと思ふ。氏には作に出るやうな外に、氏の性格の半面があるのだと思ふ。即ち氏の作には白鳥氏その人が出て居るのではなくて、白鳥氏の思想なり人生觀なりが出て居るのだ。人生觀とその人の生活とは全然一致して居るものではない。全然その人の生活が意識に上るものではない。此點に白鳥氏の作と白鳥氏との比較の誤謬が少なからぬのだと思ふ。

○白鳥氏の作の尊い所は、結局白鳥氏の進歩したるヘッドより觀た人生にあるのではなからうか。白鳥氏の作の人生は、客觀さながらの人生と云ふのではなくて、白鳥氏の頭に映じに人生である。それが大膽に描かれて居る。そこに僕は白鳥氏の作の好い所を認める。白鳥氏の作に、コンモンな世間並な生活が描かれて居ないで、或一種の意味を持つた人生が、クッキリと出て居るのは、それが爲めであらう。氏の描寫は平面描寫でなくて立體描寫である。そこに僕は氏の長所を認める。

○個人としての氏全體と、作の上に出る氏とを同一視するのは、僕にはどうしても出來ない。だから、僕は氏の作を讀んでも、あゝ云ふ人生、と云ふよりもあゝ云ふ人生の觀方と云ふ點に感服する。

○氏自身は强者か弱者かは別として、少なくとも思想上に於て、氏は現代最も進んだ人生の革命者——强い男ましい革命者の一人であると思ふ。此の意味で僕は常に氏を尊敬して居る。

○白鳥氏は思想上の强者である。

△正宗君について

徳田秋江

毎度御足勞失敬々々、正宗君のことに就いては先日も某處に於て面會いたしたる折、共に座にありたる某氏、正宗君に向ひ、此度の「中央公論」には君の論をしたといへるを、小生傍にありて耳にし、正宗君に向ひ、小生は、僕も頼まれたが、書かなかつたと申せしに、ウム君は餘り僕の事を書き過ぎっから、もう書かぬが好いと答へ、小生も、此の頃君の事を書き過ぎると自分で氣が着いたから、これからは餘り言はぬと申せしほどの次第にて、御覽なされしか否かは知られども、一月廿四日の讀賣新聞日曜附錄に認めたる、同君に對する所感の一片にも申せし通り、小生は同君に於て思想の特異なる點を最も高價に購ひ可申候。之れに反して同氏の文節詞藻に對しては尙ほいまだ鑑賞に價すべきものを發見せず候。人或は氏の文に型なきを嬉ぶものあれども、乍併正宗君の場合に

於ては、之れを例へば故の國木田獨歩君などの場合に比べて極めて消極的の意味にしか受取れず候。若し正宗君の文字と詞藻とを積極的に稱ふとせば、そは畢竟氏に侫するに落ち可申と存じ候。

尊兄にも屡々語り申し候ひし如く、小生は現時最も普通の散文に優れたるものなきを殘念がり居り候。優れたるといふことは、決して詞華をのみ指すには候はず、矢張り思想を指し申し候。此の理由によりて、正宗君の文字が、若し藝術品として見たる上に、遺憾の點ありとも、敢て多く憂えず候。

尚ほ一言申置きたきは、氏は自から予は自己をモデルとせずと語れども、一面に於て己れの空想と主觀とを基礎として創作すと言ふ以上は、既に業に自個をモデルとせるものなりとも言ひ得べきかと存じ候。何となれば、此の場合、假しそれが、田山花袋氏の「蒲團」小栗風葉氏の「耽溺」などゝ同じ意味のモデルたらずとも、矢張り自己の精神を鑄型として鑄たるものには相違なかるべく、之れを氏の作物に就いて見るも明白に候。蓋し氏の如きは、觀察と實驗とを材料として創作する部類の作家にあらずして、何れかといへば、氏自から語れる如く、全く空想と主觀とを材料として創作する作家に屬し申し候。さればこそ觀察と實驗とを主として用ゆるものに比べて其の作に一層多く自己を露はす便宜を有し可申候。是れやがてその作物に依つて作者の思想を窺ひ易き所以かと被存候。

之れを要するに、小生は今日に於て餘り過度に氏を賞せざるべく候。豈に氏一人にのみ限らんや、何人に對しても可然候ゝ何となれば、今日に於て賞讃の安賣りをいたす時は、更に來るべき、一層大なる賞讃を要すべき日に於て、如何なる方法に依りて讃辭を呈すべきかに迷はざるを得ず候。あまり賞讃するは其の人を見くびるものに御座候。もう語らぬと言つて置きながら、生來のおしやべり、つい〳〵また語り過ぎ申し候。それと氣付きて急ぎ筆を止め申候草々。



新政黨組織に對する世評

白雨生

大同、戊申兩俱樂部。進步黨内の改革派及び又新會等を打て一丸となし、政友會に對抗すべき一大新政黨を組織せんと計畫する者ありとの風評は、問題なき近來の政界に於ける稍注目すべき問題の一なりといふべし。今之に對する世評を瞥見するに、「國民」は新政黨樹立の要不要は一に繫りて政友會の今後に於ける行動の如何にありとなし、次の如く論じたり。

何が爲の新政黨組織ぞ。揣摩して曰く、一方に過半數黨たる政友會あり。小黨分裂すれば皆無たり。故に合して、或物たらしめむが爲也と。臆測して曰く、桂内閣は、政友會の反噬を懼れ、内々手を廻して、新政黨を組織せしめ、以て自己の後勁たらしめむが爲めなりと。而して、政客多數の想像は、後説と一致するが如し。是れ非なり、極めて非なり。其の非なるは、事實を曲げ、且つ政府の意嚮の在る所を誤解すればなり。

桂内閣の政綱の一は、總ての政黨、政派及び團體に對して、一視同仁なるにあり。別語を以ていへば、不偏不黨にあり。其の不偏不黨、一視同仁なるは、政黨者流が解釋し、且つ揚言する如く、政黨を無視するが爲に然るに非ず。蓋し、桂内閣の期する所は、善政にあり。目的とする所は國利民福にあり。志望とする所は、善政を以て、全國民に對するにあり。夫れ既に局部的に非ずして、總體的なり。茲に於てか、偏する能はず、又黨する能はず。其の眼中、國民利福の外、何物も無し。茲に於てか、國民より出でたる政黨を無視す可き謂れなし。

若し政府にして、一黨に偏して、一派を疎し、一方を味方とし、他方を敵視せむか。是れ一の勢力を擧て、他の勢力を抑へ。國民一部の利益の爲に、他の部分の利益を犧牲とするとなる。是れ政府の志望に反し、目的に悖る。政府は、全國民の爲めに、善政を行はむとす。何の理由ありてか、一黨を重しとして、他黨を輕ろんじ。一派を庇護して、他派を排斥せむや。若し、桂内閣にして、自己の擁護の爲に、新政黨を組織するが如きとあらば。そは、桂内閣が、其の志望を棄て、其の主義方針を擲ち、其の政綱を蹂躙したる後ならざる可らず。且つ一黨派を其の後勁とするは、全國民を、其の味方とするの安全なるに孰れぞ。桂内閣が、新政黨を組織し、若くは、組織せしめむとしつゝありといふは誣妄也。

若し、新政黨樹立の必要ありとせば、其の必要は、政府に存せずして、寧ろ黨政側に在り。而して、其の必要は、今日に非らずして、萬

一の場合にあり。萬一の場合とは、過半數黨が、其の勢力を、濫用し。他の黨派を無視して。多數壓制を行はむとする時を謂ふ。故に、吾人は言ふ可し。今日に於て、新政黨組織の計畫はあり。然も、之を今日に於て實現せむとするは、單に理由無きのみか、必要なく。又何等の意味も無しと。

試に思へ、新政黨樹立の目的と、必要と意味とは。過半數黨にして、多數壓制を行はむとする時に方りて、初めて生じ來る、是れ、小數黨に取りては、自衞の爲なり。多數黨に對しては其暴を擅にせしめざらむ爲なり。然りと雖も、彼等が依て以て、對抗せむとする政友會の態度は、尠くとも、目下の所、全く分明ならざるに非ずや。若し、政友會にして、其の勢力を正用し、善用せば、少數黨は何が故に、特に此に對抗するの必要かあらむ。政友會の態度、未だ明ならざるに、早くも、此に對抗せむが爲に、新政黨を樹立せむとするが如きは。何等の用事も無く、往先きを知らずして走るが如し。是れ、無用の爲に、無意義の行動を爲すに均し。此を無意味の盲動といふ。

吾人は、過半數黨たる、政友會が、其勢力を適當に使用して。新政黨組織の計畫を無意味、且不必要たらしめむことを望み。今日に於て、斯る計畫を爲す者が、永く克く、其の必要を感ずると無きに至らむことを欲す。要之、新政黨の組織せらるゝと否とは、一に繋りて、政友會が今後に於ける行動の如何にあり。

又「時事」は之に對する三疑問ありとし、

立憲政治を實施する以上、有力なる二大政黨が議會を兩分して互に政權を授受する英國流の政治を行ふこそ當然なるは爭ふ可からざるの定論なれば我國に於ても憲政完成の方法として二大政黨の對立を實現せしむるの必要あるを勿論と云はざる可からず此點より見れば政友會を除くの外、衆議院の各派悉く皆僅々數十名の小數に止まる今日、同會に對立す可き多人數の大政黨を組織するの計畫起りたるは喜ぶ可き現象なるに似たりと雖も我輩は其計畫に賛成を表するに先ちて豫め發起者の人々に質さんとする若干の疑問を有するものなり抑々二大政黨の對立は立憲政治に必要のことながら其政黨を形成する人々が眞實憲政の本義を解し純然たる政黨内閣を組織し從來の政弊を一掃せんとするの目的を以て事を始めたるものならんには誠に結構のことにして更に申分なしと雖も若しも其邊の意味合、漠然として明瞭ならず唯現在の政界に勢力ある一種の人々を頼りて兎も角も政友會に對抗し得るだけの人數を取纏めんとするに止るものとせば其れは所謂存在の爲めの存在を爲すものにして何の意味もなく目的もなき烏合の衆と云はざる可らず今度の新政黨發起者たるものは果して斯る批評を避け得るの覺悟ありや是れ我輩が第一の質問とする所なり或は發起者の意向が眞面目に政黨内閣の組織を目的とするに在らんか其仰て棟梁と爲さんとする桂侯等の一派が從來の政見を全く一變したるの事實を認めたる上のことなる可しと雖も我輩の見る所を以てすれば此際桂侯等の政見に斯くの如き激變を來したりとは思はれず彼の類に一視同仁を云々し一切の政黨に對し千客萬來を希望するの態度に出てんとするは隱れもなき事實にして即ち侯等の意向は依然として藩閥政治家の舊套を脫せず今後とても矢張り獨逸流の政黨操縱を能事と爲すものたるは殆ど疑を容れざるが如し知らず之に關する我輩の觀察果して誤れるや否や新政黨發起者に對し第二に質問せんとする所は此一點に外ならず或は又實際桂侯に自家專屬の一政黨を作るの意向ありとするも其意向を實行するには議會に絶對的多數を占むるの成算立ちたる場合に限ることならん今度の新政黨の如き三派を合して僅に百名を越ゆるに過ぎざるものを作りた

りとも政府黨として何程の働きをも爲し得ざるは知れ切つたる事柄のみならず其結果、一視同仁に由りて懐柔せんとする政友會を激發して其反抗を促がし對議會策に一方ならざる困難を來す可し聰明なる桂侯にして斯くも見え透きたる道理を心得ざる筈なしとすれば少なくとも近き將來に於ては左樣の思立に及ぶことなかる可し況や現に絶對的多數を占むる政友會は桂侯が一視同仁を標榜する中にも別けて其操縱に心を用ひつゝある政黨にして行く／＼は同會を全然自家藥籠中のものたらしめんとするの深謀遠慮ありとの説も行はるゝに於てをや現當局者の實情斯くの如しとすれば新政黨發起者は其邊に就き如何なる考を以て其計畫に熱中しつゝありや敢て第三の質問と爲す所なり之を要するに新政黨組織の計畫には我黨の腑に落ちざる廉少なからず眞面目に受取り兼ぬる事柄なれども假に發起者の意向は右の如き質問を起すまでもなく始めより政黨内閣など四角張りたる目的を有せず又桂侯等一派の政見如何をも究むることなく唯是等有力なる政治家の麾下に馳せ集まりて一も二もなく其號令を奉じ一廉の忠勤を抽んずる其恩賞として何がしかの利益に有付き好き機會もあらば一二名なりとも大臣次官に採用し貰はんとする如き淺墓なる目論見に過ぎずして此目論見を成る可く有效ならしむる爲め三派に跨る大風呂敷を擴げて黨員の糾合に勉むるものとせんには最早や何事も論評するを要せず之を一笑に付し去るの外なしと雖も兎も角も民間政治家の翹楚として多年來朝野の間に聲名を馳せたる人々までも其仲間に立雜り一朝の心得違に其晩節を傷くるの一事に至りては我國政治界の爲めに深く嘆惜す可き次第にして呉々も其反省を求めざるを得ざるなり

といひ、「東京朝日」は「新政黨は四活の道」と題して、

新政黨といふと雖も、吾人を以て之を見れば、舊政黨なり、否、舊政黨とは言ふ可らざらんも、少くも既に久しき以前より見る可き形體を具備し居たる一大政黨なり。何となれば則ち謂はゆる新政黨は吾人が年來指稱して桂黨といへりしものに外なる可らざればなり。豈古からずとせんや。初めは山縣黨たり、中比聊か兒玉黨たらんとしたる事もあり、而して一昨年來漸く桂黨となれるものなり。而して曾ては伊藤黨に暗に對峙せんとしたる事あり、今は明かに西園寺黨即ち政友會に對峙す、之を新政黨と銘打たざるも對峙す。銘打ちてはます／＼對峙す可し、但し其の頭首として頼まるゝ桂卿其の人が、未だ銘打ちてます／＼西園寺黨と對峙することを欲せざるに由りて、今見る所の如き狀態の中に在るのみ、即ち聊か頓挫の狀態の中に在るのみ。而も其の成立の内議は進行の歩を停めずといふ。こは桂卿其の人の都合如何に拘らず、其の人を頼んて甘じて執鞭せんと欲する立法府の諸團體仲間か議員仲間が、あせりにあせりつゝ有るに由りて此の如くなるを致せるなる可し。斯て其の頭首を餘儀なくせんとする處、又其の頭首が遂に餘儀なくされずんば已まざらんとする境界に好んて立んとしつゝある處、いよ／＼此の一大團の政黨の必ず政黨たるべき所以の性質を現すとも謂ふを得べし。彼の相互の粘着力を見ずや、執着力を見ずや。此れだけの粘着執着の力あれば、手足は遂ひに頭首を餘儀なくすることゝもなる可く、又頭首も其の政治生涯を不時に終了することを期せざる以上、必ず自己の身邊に集まれる人望を塵芥視して捨て去ることを敢てせざるにも至る可きなり。頭首だけ如何に熱心にても其の手足が之に從はざれば纒まらざると共に、其の手足が又如何に熱心にても其の頭首が之に餘儀なくされずんば成らず。然るに今や其の双方の共に頗る熱心にして、而して粘着執着の力を現し居るが妙なりと、之れを妙として、吾人は桂黨がいよ／＼政黨と銘打つて西園寺黨に對峙す

るに至らんことを願ふ。いかに政黨に弊害あるにもせよ、有る政黨を無くす可らず、現るゝ政黨を隱す可らず。內閣が政黨の上に超然たるも、又一視同仁的なるも、つまりは一時的假相なり。帝國議會の立法事業が多數に由りて行はるゝ以上、而して又內閣の行政事務が閣員の一致團結に因りて最も見く擧げらるゝ事實ある以上、之を得るがための目的に由りますく政黨を改良して、ますく之を利導するが、憲政事相の眞を得て、而して典例の宜しきを成すものとせざるを得じ。最も政黨を弊害視して且之を無視せんと試みるとを厭せざりし山縣卿の內閣員が、一人として卿の辭職後に踏止まらざりしは、いかなる口實に由るに論なく、事實は全く彼等が山縣黨たりし事を表白し、又同時に山縣卿が自家の黨派以外より其內閣員を取居らざりし事を發現す。既に內閣員が一致の一黨たるを便とする以上、いかて議院の多數が過半數が一致の一黨たるを便とせざるを得べき。理論は別なり、別として可なるが、一黨の一內閣が既に陛下の內閣たるに害あらるざ以上、一致したる一黨の過半數を基礎として立てる一黨一致の一內閣が獨り陛下の內閣たるに害ある可き道理は則ち之なし。此に於て吾人は桂卿に望む所あり。宜しく斷じて其人望に餘儀なくされて、其新政黨を樹立すべきなり。何の斟酌をか要すべき。今日直に公けに樹立して可也。斯くするは、目下一時の事情に於て、聊か一時的に不便とする所も有らん。而も西園寺黨を突き崩して其幾分を新政黨に奪ふ事に由り、多少の反對激動を起す位は、さしたる不便ともなる可らず。たとひ突き崩さずとするも、多少の激動は今度の議會にも必ず之ある可ければ也。西園寺黨は桂黨にあらざれば也。其對峙的政黨たれば也。對峙の勢ひは既に久しく成り居るにあらずや。然り而して一方が他の過半數占有に聊忌を懷しつゝあるが如く、他の一方は又少數黨が內閣に立てるに對して必ずや不平を呑み居らざる可らざること明白にあらずや。

然り而して吾人が斯く勸告するに就ては勿論相應の理由を有する積りなり。今日の有樣、議院の力の薄弱なるを憂ふると共に、又政府の基礎の薄弱、外觀掩ふ可らざるもの有るを以てなり。政權に脈絡貫通を有せざる議院の力の薄弱なるが如くに、議院の多數に因緣を有せざる政府の信用も亦內外に厚きこと能はず。從來の政府皆然りしが如く、前度の桂內閣亦然りき。日露戰爭前に於て常に然りき。戰爭後に於て亦然りき。獨り然らざりしは戰爭中に擧國一致の協贊を得たる時なりしが、今後に於ては戰爭の望みなきが如く亦擧國一致の協贊を得る見込とても之なし。政黨に依りて自ら強くするの外ある可らず。政黨活きて議院活き、政府活きて國亦活く。四活の道なり。

と論じて最も新政黨の樹立を歡迎したり。吾人は我社說に論じたる如く進步黨の全部及び政友會以外の各派が合同して二大政黨の對立を希望するもの也と雖も、暫らく論議の筆を差扣へて以て事實の成行如何を視んと欲す。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新着案內

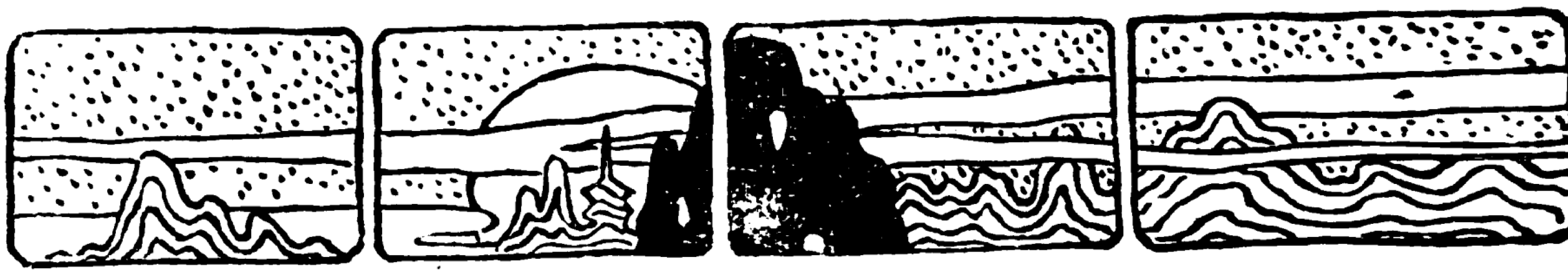
Böhme, M.—Dida Ibsens Geschichte 2.00
—— —— Apostel Dodenscheit 1.50
Megede, M.—Frauengedanken über Menschenerziehung 1.50
Wolzogen, E.—Erst komme ich; 3.25
Rösener, K.—Moderne Propheten 1.50
Fischer, R.—Erziehung und Naturgefühl .... .75
Haeckel, E.—Freie Wissenschaft und freie Lehre 1.00
Volkelt, J.—Zwischen Dichtung und Philosophie 4.00
Müller, I.—Jean Paul und Michael Sailer als Erzieher der deutschen Nation. 1.00
Voigt, G.—Die Bedeutung der Herbartischen Pädagogik .... .90
Koppelmann, Wilh.—Die Ethik Kants. Entwurf zu einem Neubau 1.40
Oishausen, J.—Geschwindigkeiten in der organischen und anorganischen Welt 2.50
Plange, Th.—Christus ein Inder? 3.00
Boehmer, Dr. J.—Der Hebräer und Judasbrief 1.50
Mayer, Dr. G.—Die Thessalonicherbriefe 1.80
—— —— Der Römerbrief 1.30
Aye, H.—Die Apostelgeschichte 2.30
Oppenheimer, F.—Der Staat 1.50
Gerlach, H.—Das Parlament .... .75
Hardy, Prof. Dr. E.—Budda .... .40
Diez, Prof. Dr. M.—Allgemeine Aesthetik .... .40
Fried, A. H.—Die moderne Friedensbewegung .... .63
Tews, J.—Moderne Erziehung in Haus und Schule .... .63
Hensel, P.—Rousseau .... .63

京都支店 郵便貯金口座大阪一七三番

東京・大阪・京都
丸善株式會社
東京本社 貯金口座東京五番

大阪支店 郵便貯金口座大阪七四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



リボン

徳田秋聲

細君のお芳が、奥の四疊半で末の子に添乳をしながら、うと〳〵してゐる間、宮井は茫然火鉢に凭れて、綺麗な初春の雜誌を見てゐた。

火鉢の側には、遠方から後れ馳に屆いた年始の葉書が、三四枚散らかつてゐる。時計の懸つた同じ柱に、新しい日暦が、4と出てゐる。其上に、小さい輪飾が飾られて、臺所際の神棚にも火が點されてゐた。家は森として、油を吸あげるランプの音が、耳の穴へ揉込むやうに聞えた。

近所はもう寢た處もあるらしい、ガタリと云ふ音もしない。折々、濕つた道を通つて行く跫音が、靜かに聞えるばかりてある。何處も彼處も闃寂とした正月四日の晩も、漸く更けて來た。

其の靜さに襲はれたやうに、宮井はふと雜誌から目を離した。而して部屋を見廻した。玄關寄の方に、女中が干揚つた襁褓を目の前に山ほど積んで、其うち二三枚を丸い膝のうへて疊みかけたまゝ、コクリ〳〵と居睡をやつてゐる。暮の二十八九日頃から、過度に働きづめなので、身節がへト〳〵に爲つてゐるのであらう。此の女には春も來ないのである。女中の少し上手の方に、婦人雜誌を開いて、俯伏になつてゐるのは、靜枝と云ふ細君の遠緣の娘である。リボンだけは、水色の好いのを著けて、體に手織かと思ふ太織の黃縞の晴着に、銘仙の絣の羽織を着てゐる。骨の纖細い、血色の優れない女である。明けて二十二になつたのであるが、誰の目にも十八九としか見えない。

細君の從弟の嫁にと云つて、去年の秋頃、從弟の父親が、田舍から連れて來たのだが、母親と氣風が合はず、從弟とも氣心が合はぬと云ふので、先づ田舍へ歸すとにして、暮に父親が宮井の宅に預けて行つたのである。

宮井には、まだ此の女の心持が能く呑込めなかつた。初めて東京へ出た時は、無口な柔順しい女とばかり思つたが、從弟の宅で二三ヶ月揉まれてから、多少其の氣質が角を見せて來た。從弟の母親の詞では、梃杆でも動かぬ剛情ものだと云ふのである。それて、細君の從弟は唯プリ〳〵怒つてゐる。此の女が嫌かと云ふと、爾でもない。喧嘩して女が宮井の宅へ逃げて來ると、眞蒼になつて、後を追かけて來るやうなとも度々であつた。而して、女の顏を見ると、「莫迦！ 此奴の莫迦にも呆れた」と罵る。從弟は銀行て二十圓ばかり貰つてゐた。罵られると、女は厭な顏をして、隅の方へ行つて了ふ。それ

かと謂つて、「あの宅は厭ですから……。」と進んで、自分から暇を貰ふやうな氣振も見えなかつた。
「春にでもなつたら、田舍へ手紙をやつて、引取に寄越さすとにしやう。」
從弟の宅の老人は、爾う言つてゐたが、本人は田舍へ歸されるのを、針の山へでも逐遣られるやうに厭がつた。
「靜枝さんは、少しばかり東京を見たので、あんな從弟の宅などは、厭になつて了つたんでせう。お喜代(女中の名)と外へ出ると、隨分妙なとを言ふさうですよ。東京には好い男が澤山ゐるの、角帽が一番所好だの何のつて……男嫌かと思つたら、何してなか〳〵豪いとを言ひますと……緣日なぞて、好い男でも見ると、一町でも二町でも、尾いて行くつて云ひますよ。…其てなか〳〵目が高い處へついてゐるんですと。」
宮井はお芳から、愷云ふ噂を聞いたとすらあつた。
それでも、暮の二十六日に、從弟に散々打れて、其揚句暇を出されて、荷物と一緒に、老人に連れられて、宮井の宅へ來た時には、目を泣脹らして、面目ないのか、それとも可惜かつたのか、左に右涙聲て、
「御心配かけて、濟みません。」とお芳の前に突伏した。髮も亂れ、顏色も眞蒼で、哀れなさまであつた。
春になつても、まだ田舍から何の沙汰もない。老人も、自分の一了簡で、貰つて來たので、オイソレと言つて、離緣沙汰の手紙も出しかねてゐるのであらう。宮井夫婦も、急いで歸して了ふ氣もなかつた。

三ヶ日は、白粉も塗つて、外で羽子など突いてゐた。繪葉書を、町から買つて來て、田舍の母や兄や、友達のところへ、何事もなささうな年始狀を書いて送りなどしたのも見受けた。

宮井は、茛を喫しながら、靜枝の樣子を見るともなし見てゐた。髮に油をつけて、丸髷にでも結つたらば……と從弟の母親が言つてみても、如何しても肯かなかつたと云ふ話を想出した。成程パサ〳〵した髮である。其の光澤のない黑い髮を、大きな束髮に結つて、瑠璃色のリボンを直りと插してゐる。一生此で通すと主張つて、リボンの色すら變へるのを嫌ふのであつた。如何云ふ譯でか、水色は高尙な色だと、獨で然う決めてゐた。

「此の女の獨身主義と、些と似通つてゐる！」と宮井は思つた。

「靜枝さんは、相變らず獨身主義かね。」

宮井は輕く、揶揄ふやうな口を利いた。

靜枝は、「え。」と云つて、私と赤い顏を擡げた。

「それで、田舍から、まだ何とも言つて來ないのかね。」

「え、まだ……。」と靜枝は、目眩さうな目容をした。

「來ない方が好いんです。私如何しても、田舍へ歸るのは厭でございます。どんな事をしても、此方で暮したいと思ひますの。」

此まで始終局外に傍觀してゐた宮井も、多少此の女の田舍の事情を知つてゐた。田舍へ歸りにくいと云ふ樣子は、略察せられた。郡書記をしてゐる兄が、非常に嚴格だと云ふ評判も耳にしてゐる。加之、手藝の器用な女で、裁縫、編物、造花なぞに、秀でた手を持つてゐる。讀書も一ト通りは心得てゐる。東京で暮させてやれるものなら、暮させてやらうと云ふ考もあつた。

「私、着物や何か着たうございませんから、如何にかして、獨て東京で暮したいと思ひます。晝は何處かへ勤めて、夜は人の仕事でも爲て　。」女の顏には熱心の色が現はれた。伏せてゐる目のうちに、涙が浮んでゐるかとも思はれた。

「然うさね。」

「何處ぞ、爾云ふところはございませんでせうか。」

「しかし、なか〳〵骨だぜ。」

「でも墮落さへしなければ可いんでございますからね‥‥。」と女はオド〳〵したやうな目を擧げた。

宮井は、濃い煙を噴出しながら、「考へておかう。」と優しく頷いた。

少時すると、お芳が子供を寢かしつけて、奥から出て來た。寢汚く假寢をしてゐたと見えて、髮の紊毛が直り頰に喰着き、頰は紅くなつて、襟や、裾なぞもキチンとして居ない。睡さうな目にも張がなかつた。

お芳は、「ア、滿らない！」と云ふやうな顏をして、欠を生噛にしながら、氣懈さうに火鉢の前へ來て

坐つた。
温茶を湯呑に汲んで、三口ばかり飲むと、少し耳を引立てるやうにして、何處とはなし目を見据えた。
「何て世間が靜かなんてせう。家ばかり閒寂してるのかと思つたら、何處でも然なんてすか知ら。」
誰も返辭をする者がなかつた。
「ア、今日はもう四日ですね。私、春になつてから、まだ表の土を蹈んて見ませんよ。」と呟くやうに言つた。
來る春も來る春も、何の面白いともなくて、もう二十八に爲つた。着物一つ着飾つた覺もなくて、女の盛ももう過ぎて了ふのか、と云ふやうな遣瀨ない思が、顏色に現はれてゐた。
「眞實でございますね。」と靜枝が淋しい笑方をして、
「お正月なんて、滿らないもんでございますね。」と附加へた。
お芳は默つてゐた。
「でも東京はまだ好うございますよ。田舍と來たら、雪ばかり降つて、それこそ眞實に爲樣がございませんよ。」
寢るには未だ早いし、カルタでも取らうかと云ふ發議が、宮井の口から出たが、人數が少くて興味が薄からうと云ふので、幾年ぶりかで花を引かうと云ふとになつた。
お芳は、押入の奧の我樂倶多のなかゝら、黴の生へた花札を引張出して來た。まだ上の子供が產れぬ

時分、お芳が今の靜枝の年頃のをりに時々遊んだとのある札である。
お芳は血の氣の薄いやうな手で、札を蒲團の上へ打まけた。中には折目の入つたのもある。泥の出てゐるのも二三枚見えた。
「新さんも入らつしやいな。」とお芳は札調べをしながら、玄關の次の三疊にゐる、宮井の甥に聲をかけた。
「慿云ふ事もして、女の機嫌は取つておくものだ。」と云ふやうな顏をして、宮井も興のない花札を拾ひあつめ、二つに纒めて切りなどした。
甥は宮井の向に胡坐をくんて、これも半分は迷惑さうに、石の分配を初めた。
「靜枝さんもお行んなさいな。」お芳は勸めた。
「私、然云ふとは一向解りません。」と靜枝は、片陰へ寄つて、讀さしの雜誌を見はじめた。
花は初まつたが、札をうつ音は冴えなかつた。六ヶ月目の時、宮井は札を一順見ると、前へ投出して下りて了つた。而して、女中に酒を持つて來さして、自分で燗をしながら、チビ〳〵飲はじめた。
二年目には、少し脂が乘りかゝつて來た。色々な意がけないヤクなぞが出來て、賑やかな笑聲が起つた。お芳の頰には血の氣がさして、手の働も敏活になつて來た。甥は出綴て、始終ニヤ〳〵しながら、落着いた引方をしてゐた。而して叔父の無成算な遣口を、クス〳〵笑つてゐた。
「この人はからッ下手ですよ。」とお芳の調子が浮々して來た。

「かう云ふ人に、出て來ちや邪魔をされるんで、私ア少しも引けない。自分の勝手ばかりしてゐるんですもの。」

宮井の前には、もう三つも交換が入つてゐた。

誰やら水口の方の木戸口で、呼んでゐる聲がする。

「オイ〳〵、靜のとこへ電報だ。」

皆が聲を潛めた時、外の聲は恁いつて呼んだ。一同は目を見合した。

靜枝は起つて出て戸を開けると、叔父は水洟をすゝりながら上つて來た。而して古びた外套を脫いで、毛絲の衿捲を脫すと、手炙の前に座を占めて、袂から二通の電報を取出して靜枝に手渡した。

靜枝は顫へる手頭に電報を繰擴げて讀んだ。人々の目は、悉く其額に集まる。お芳は、「叔父さんといへば、眞實に勝手な人だ。田舍から自分が連れて來ておいて、此の物入の多いのに、家へ打つけておくなんぞは……」と云ふ心持て、澄してゐた。

叔父は、眞鍮の煙管を持つた手で、赤い鼻頭を擦りあげながら、

「一つは大病、一つは危篤――明朝一番でかへれと云ふんだからな、噓でもあるまい。可いわ、マア心配せんでも……まだ其程の事でもないから、持直さんにも限らん。――能く働く人だつたがな。」

「幾歳かね。」宮井が覺束なげに喙を容れた。

「さよさ。」と叔父は首を傾げて、「私より二つも下か……。」

靜枝はホロ／＼涙を零した。而して何時までも電報を瞶めてゐた。
「靜さん、そんなに心配するとないわ。一日かゝれァ行ける處なんですもの。」お芳は力をつけた。
「然さ。明朝一番で立てば、晩くも四時……」と叔父は、もう是て先づ靜枝の件も片着くと云ふ心持で、
「今から荷や何か、支度をしておいて、明朝五時に起きれば可い。一人の阿母さんだての、歸らん譯にも行かん。」と火箸で煙管の脂をほじくつて居た。
靜枝は涙聲で、「いゝえ。其はどうせ斯様な電報が來る位ですから、もう死んでるかも知れません……私會ひたくもございませんけれど……會つたつて爲様がないんですから……」と歸るのが、如何にも切なさゝうに見えた。母親の死目よりか、自分の體が如何なるか、それが不安でならなかつた。
叔父は、今夜は宅へ歸つて、明朝暗いうちに迎に來て、それからステーションへ送るから、と云ふので、旅費の相談などして、其まゝ暇を告げた。
「それぢや明朝は、私が思ひいれ早く起きませう。」と女中が言出した。
「ア、然うお爲。靜さんも一緒に起きて、御飯だけでも温かいのを食べてね。」
靜枝は手炙に俛いた限、默つてゐた。荷作をする氣振も見えなかつた。甥は花札を函に收つて、自分の部屋へ引込んだ。宮井もグツ／＼に寝所へ潜込んだ。
昨朝の未明に、お芳が目を覺した時は、もう叔父と靜枝との低い話聲か、茶の間から聞えた。

起きて出て見ると、二人は今飯を濟した處である。ランプの火影も、薄暗くなつてゐた。時計を見ると、まだ三十分も間がある。靜枝は何時の間にか、奇麗に髮を取あげて、白粉までつけてゐた。晦日の晩に、兼康から買つて來た、水色の新しいリボンも挿して居た。

叔父は煙管を筒に收めながら、「それぢや、私は其處いらで、兎も角俥を傭つて來るとしやう。荷物を玄關へ出しておくが可い。後で送ると云つても邪魔だから、忘れ物のないやうにな。」と云つて、起ちかけた。

「私俥は入りません。荷物も持たずに行かうと思ひます。」

叔父はお芳と顏を見合した。

「如何してな。」

「如何してつてこともございませんけれど、田舍へは、まだ小父さんとこを出て、此方で御厄介になつてることを言つてやりませんから……今度出て來まして、私の體が決りましてから、小父さんの方からも、お手紙を出して戴きます。」と靜枝は頑張つた。

二人は默つて了つた。叔父は昨夜電報が來たとき、悴か、「いゝ氣味だ。あんな剛情張の生意氣な奴は、早く逐返して下さい。」と言つたことを想出して、當惑さうな顏を顰めた。

「それぢや、マア、田舍にゐることになつたら、送ると云ふことにして、着換だけは風呂敷にても包んで……」

「いゝえ、何にも持たないで參ります。」

叔父は默つて了つた。

お芳は棚から、歳暮に到來した、菓子箱を一つ見舞として、靜枝にくれた。靜枝は、化粧品など入れた田舍風の信玄袋に、傘と、其だけ提げて出た。叔父は風呂敷に包んだ菓子箱を持つて、一緒に出た。

出かけに靜枝は、宮井の寢間の閾際まで行つて、「色々御厄介さまでした。又出て來ますをりには、何分よろしく……。」と其だけを、低聲ながら熱心に言つて、暇を告げた。如何しても引返して來る意でゐる。

「然う言つても、些と出ては來られまい。」と宮井は然う思ひながら、起直つて、挨拶だけ爲て、蒲團を引被いて了つた。

靜枝は厭々さうに、門を出て行つた。

外はまだ幽暗かつた、東の方が眞珠色に白んだばかりで、灰色雲が、一面に空を封じてゐた。それでも木の影などは、くつきりして見える。夜明方の空氣の底寒いので、靜枝はガチ〳〵顫へながら歩いてゐた。

壹岐殿坂を降りて、砲兵工廠の横手まで來ると、空はもう餘程明るくなつた。ちらほら人の影も見えて、電車ももう濠端を動いてゐた。

「獨で田舍へ歸るといふものは、何だか、心細いもんですね。」靜枝は低聲で言つた。

「でも譯はない。乘つてしまへば、自然に行つてしまふで……。」と老人は洟を啜りながら言つた。

「あとで電報を打つておくから、然したら、向で誰ぞ迎ひに來てくれるだらう。」

ステーションには、もう大分人が集ふてゐた。諏訪の氷滑にでも出かけさうな、派手な洋服に鳥打を冠つた、輕裝の若い紳士連も見受けた。寒い廣い構内に、咳の聲ばかり反響して、コツ〳〵と土間を歩く靴の音がをり〳〵聞えた。

靜枝は隅の方の腰掛に腰を卸したまゝ、默つて俛いてゐた。胸には樣々の思が連に動搖してゐた。老人が側に腰かけて、煙草を喫しはじめた時、靜枝は低聲で、自分が不緣になつたとは、田舍の方へは、當分秘密にしておいてくれと云ふ事を、口數少なに、切に賴んだ。

切符が間もなく賣出されると、人衆は其方此方から集つて來る。靜枝も起かけやうとして、襟を掻合し、頭へ手を上げると、「オヤ、私……。」と慌忙しく腰かけてゐた後先を見廻した。

「如何した。」老人は煙草入を腰に差しながら。

「私、リボンを落しました。」靜枝はまた身の周を捜してゐる。

「リボンを……其奴ア不可いことと爲たな。」と老人も包を退けて腰掛の上下を捜した。

「なけアマア好いや。」と老人は言つたが、靜枝は金の指環でも亡くしたやうに、悲しがつた。幾度も〳〵、頭へ手をやつたり、袂の底を捜したりしてゐる。

終に居場所を離れて、外まで出かけて、涙含んだやうな目を、ステーション前の廣場へ配つた。而し

て、ツワ〳〵と五六間捜しあるいた。

老人も、何だか急に氣になつて來た。

「それぢや、私が其處いらまで行つて見て來るとしやう。」と言つてノツ〳〵出かけた。

元來た道を、老人は三四町も捜して行いたが、何處にも見えなかつた。

「何處にも見えんやうだ。もう誰か拾つて行つたらう。何しろ時間がないで……。」

「さう！」と靜枝はまだ思斷れぬやうな返辭をして俛いた。

構内には、もう人の影も疎になつてゐる。紙の片や、莨の吸殼が其處此處に散ばつて、四下は俄に寂しくなつた。外では太い汽笛が鳴つた。靜枝の胸はワク〳〵と一層波立つて來た。如何やら、もう東京へ來る縁がないやうな氣もした。

石段を上る時、先が眞暗のやうに見えた。

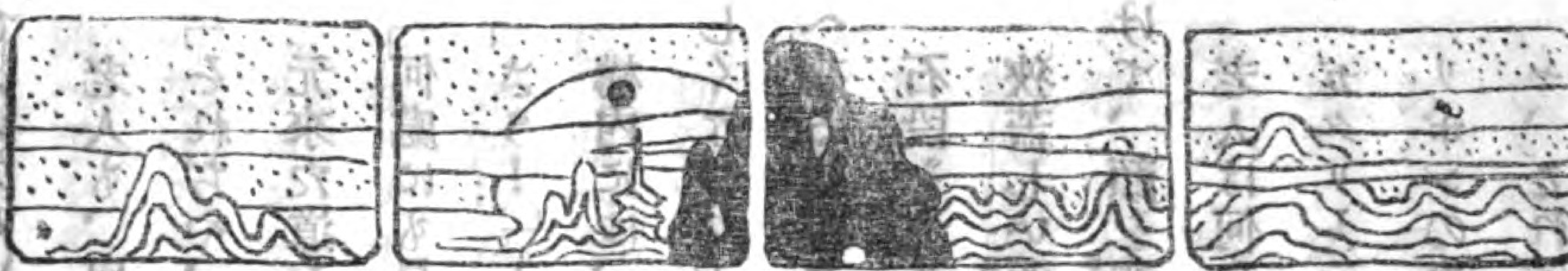
狹苦しい函のなかへ入ると、體が連にガチ〳〵と戰へて、目に一杯の涙が湧いた。其まゝ窓に肱をかけて、顏を背向けてゐた。

老人は何やら連と、田舍へ言傳をしてゐるやうてあつたが、それも耳へは入らなかつた。

ガタリと云ふ音が、腹の底まで響いたと思ふと、汽車はスル〳〵動き出した。

リボンのない寂しい頭が、何時までも窓から見えた。

「ヤ、これて先づ荷が降りた！。」と云ふやうに、老人は、急に輕い歩調で、石段を降りて行つた。（完）



留守居

小栗籌子

（一）

那美子は此頃少し苛々してゐる。

「奥様。」と尻下りに呼ぶ婢の聲が、何時に無く腹立たしかつた。

「何？　用が有るなら此處へ來てお言ひ。」といきなり叱り付けた。不斷は餘り小言も言はぬ那美子の口から、不意に此不機嫌な聲を聞いて、婢は些と面喰つた。而してオズ〳〵仕切りの襖を開けた。

「あの、酒屋さんが參りました。」と對手の目色を伺ふやうにして取次ぐ。那美子は又か！と思つた。腹の中では忌々しかつたが、

「然う。」とばかり落着き拂つて、

「今行くから、少し待たせてお置き。」大儀に斯う言つて婢を立たせた。臺所へ出ると、待ち構へてゐた酒屋の亭主は、那美子の顔を見るなり、

「あ、何うも遲なはりましてお氣の毒樣。最う二三日待つて下さい。まだあの旦那が歸りませんから‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥。」

「えゝ、御都合は如何樣て‥‥‥‥‥？」

「へゝ、又二三日ですか。」と酒屋は冷笑つて、福助と渾名せらるゝ其大きな頭を眞赤に筋張らせた。

「奥樣、二三日〳〵も可い加減に最う聞き飽きましたよ。其ぢや餘まり貴方の方が御勝手過ぎるといふ者です。」と聲を顫はせる。

「御尤もです。色々貴方の方も御都合のお有りなさる事はお察しゝてゐるのですけれど、何を言ふにも主人は御承知の通り、最う一週間近くも宅には居ないんですから‥‥。」

「旦那のお留守は分かつてます。そりや誰だつて錢を使つて飲み歩くのは惡かありませんからね。それに又美い女もなか〳〵外にや有りますからね、旦那が腰を拔かすのも御無理ぢやありませんや。と言つて、何うも御尤も〳〵てお歸りを待つて居た日にや際限が有りませんからね。何うでせう奥樣、貴方のお手元て少しても何とかなりませんてすか。」

那美子は此言ひ草がグッと癪にさはつて、思はず顔が眞赤になつた。

「出來ないと言へば出來ないぢや有りませんか、何と仰有つても私は女の事ですからね。」

顫へるほどの口惜しさに、那美子は突慳貪に斯う言つてのけた。すると、酒屋も負けては居ない。

「出來ないてすと？　出來ないて濟まして居られちや困るぢやありませんか。酒屋だつて商人の端くれてすからね、然う〳〵お客樣の言ひなりにして居ちや立行きませんや。」と聲を暴らげる。

「分つて居ますよ。それても、旦那が歸りさへすれば何とか爲るのですから、其まで待つて下さい。私だつてこんな苦しい言譯なんぞ些つともしたくは無いのですけれど、無い袖は振れないのですから……ね。」と那美子も氣を變へて碎けて出た。酒屋は默つてゐる。

「打明けたお話しが、宅ては今お小使ひにも不自由してゐる位なのですもの。旦那もあまり仲氣過ぎますわね。」と那美子はツイ口を辷らして、愚痴らしく言つたが、こんな出入商人を捉まへてと氣が付くと、自分ながらもはした無く思つた。

「ぢやお氣の毒ても歸るまで待つて下さい。尤も餘り遲いやうなら、私の手元て何うにか又考へますから。」と當ても無い事を言い捨てゝ、好い加減に引込まうとする。と、丁度書生が呼びに來た。那美子は其を好い機會に引返へすと、酒屋もブツ〳〵言ひながら歸つて行つた。

「家主が玄關の方に來とるです。」と書生は言つた。

「然うてすか。ほゝゝ前後に敵ぢやかなひませんわ。」と笑ひながらも、心の中ては、何といふ情無い事だらうと、無責任な夫の爲方がツク〳〵腹立たしい。

家主も好い顏を爲やう筈は無い。何しろ三月分も滯つて居るんだから、今日は何うしても全部入れて

貰はねばならぬ。其れが出來なきや一月分でも受取つて歸ると手强い事を言つて、何時も〳〵空戻りの愚痴をもぐど〳〵と並べた。那美子は誰にても主人が居ないからの一點張り。お氣の毒です、御尤もですと言ふより外の言葉は無かつた。家主もトウ〳〵根負けをして、留守宅では始まらぬと觀念したと見えて、

「何うも御主人にも困つたのもですなあ。」と惡まれ口を聞いて、お歸り次第端書を一本よこしてくれと言ひ置いて歸つた。

「奥樣。」と又婢は尻上りに呼んで、煮物のお砂糖が無いからお錢をと言つて來た。那美子は肚胸を突いたが、そんな氣色を見せずに、

「お待ち、今遣るから。」と直ぐ答へた。が、全くの處、此二三日十錢の貯へも無いのである。すると又今度は夏雄といふ今年五つになる男の子が、

「母さんお錢頂戴よ。僕もお竹と一緒に行つて風船を買ふんだ。」とせがんだ。那美子は「あゝ上げますとも。」と口丈で答へて、ソッと手招きをすると、男の子は嬉しさうにニコ〳〵して飛んで來た。

「お錢頂戴。」といきなり差出す小い可愛い手を、那美子は默つて握つて傍へ引寄せながら、

「あのね、母さんはお錢は些とも持つて無いんだからね、そんな事を言つて困らせちや嫌ですよ。此頃始終然う言つてるぢやありませんか。」と小聲でたしなめると、男の子も小聲になつて、

「だつて、今遣るつて言つたもの。」

「僞ですよ。母さんは本當にお錢無いの。」

「お父さんが使つて了ふから!」思ひ掛けない一言に那美子は愕然として、

「まあ此兒は!」と些と肩の處を打つ眞似をしたが、目の中は何時か濕んだ。

「子供がそんな事を言ふものぢや有りませんよ。」と怖い顔をして見せると、男の子は其顔をツク／＼見て、

「母さん何泣いたの? 僕は最う風船なんか買はないよ、ね、母さん」と慰め顔に言つた。那美子は堪らなくなつて顔を背けた。

それからお砂糖を買ひに參りませうと言つて又婢が來たが、那美子は

「煩さいね。まあ何うでも可いから、今日は無しで濟てお置きな。」と向ふを向いた儘で言つた。婢は呀怪さうに引退つて行く。

「夏ちやん。」と那美子は改めて呼び掛けて、今から好い處へ連れて行かうと言ひ出した。夏雄は自體外出好きである。上野へ行かうとか日比谷へ行かうとか始終言ひ暮してゐる。それでも滅多に何處へも出してやつた事は無い。那美子はふと〇〇女學校の運動會を思ひ出したのであつた。さる人から接待狀が來てゐる。

「好い處つて何處?」夏雄は聞く。

「好い處はね、お金貰つて其から○○學校の運動會にまはつて見るのよ。」

夏雄は躍り上つて喜んだ。そして着物を着かへさせて呉れと言つて、自分の洋服をズル〳〵引ずりながら持ち出して來た。

(二)

那美子が子供を連れて家を出掛けたのは、最う午前も十一時過ぎてあつた。運動會は夏雄を喜ばせる爲めの附けたりて、實は○○社といふ夫の關係してゐる雜誌社へ金の融通を頼む積りてあつた。一つには、家にばかり居て氣を腐らして居るよりも、外へても出て見たらといふ考もあつた。

○○社ては那美子の家庭の樣子も略知つてゐる。斯ういふ場合には每も那美子に同情して、度々無理な頼みも聞いてくれるのてある。

那美子は今日も其積りて出掛けた。途中八百虎といふ出入の八百屋て、林檎を一籠土產に買つて、無論何とかなる事と思へば、心も此頃に無くいそ〳〵として、馳る車ももどかしい。○○社へ着くと一時を打つた。

玄關て例の通り案内を乞ふと、每もの愛相の好い小僧がニコ〳〵しながら出て來た。

「あの、須藤さんはお在宅てせうか？」

須藤といふのは○○社の主人てある。

「へえ、中尾さんの方はお居宅てございますが……」

須藤さんは留守と聞いて、那美子は何となく不安を感じたが、中尾さんのと言ふのは支配人であるから、其方でも可いから一寸お目に掛りたいと言はせた。小僧が奥へ入ると引違ひに出て來たのは中尾さんであつた。毎も通りなら、まあお上りなさいと言つて先きに立つて案内してくれる筈なのに、今日は何と無く様子が違ふ。御用なら此處で聞きませうと言つた風に、上れとも何とも言つてくれぬのである。那美子も上れと言はぬものを上がる譯には行かず、と言つて玄關先きで立話しも出來ぬ。所在無さに土産物を出してお子供衆にと言つたが、中尾さんは迷惑さうな顔をして、困りますなあ／＼と何度もくり返して頭を掻いた。それには構はず那美子は

「一寸お目に掛つてお願ひしたい事がございますが……」と言ふと中尾さんも、流名通さぬ譯には行かない。それでは此方へと言つて、例の須藤さんの書齋へ通し、それでも丁寧に坐蒲團丈は勸めてくれた。

「御用は？」と聞かれて、那美子は今更らしく瞠つた。が、氣を取直して、

「毎もの事で誠に何ですが、又あの主人が留守になりまして……」とまで切り出したが、後は言はずとも推量されてゐると思ふと、なほと言ひ悪い。那美子は女學講義錄か何かの自分の原稿を出して、稿料が貰ひたいと言つた。中尾さん「は。」と言つた限り何か言ひ悪さうにして、暫らくしてから、

「其は今まで通りなら、御内情もお察し爲て居るんですから、少々位の事なら須藤が留守でも何うともして差上げるのですが……」

と、聞くと、那美子はガッカリして了つた。

「何を言ふにも此節は……御承知でもありませうが、お宅の御主人が餘り此方を踏付けになさるものですから、須藤も非常に立腹しまして、然ういふ方を相手にしてゐては到底商買は出來ないから、お氣の毒でも是からは一切お取引き願はないと言つてるんですからね、貴方には誠にお氣の毒ですけれど……と言つて、何うも私の一存では、何うして差上げる事も出來かねますので」

「は。」と言つて、那美子は二の句が續けない。○○社對夫の問題は那美子も薄々知つては居た。それても此程の事とは夢にも思はなかつた。

「お言葉でございますけれど、私は全く其程の事とは存じませんでしたものですから……それでは何でございますか、主人は何にも、あの此方様へは御相談無しに」

「然うです、何にもお話しは無かつたのです。兎も角も此方とお約定の出來てるものを、何んな事情がお有りなすつたにしろ、默つて勝手になさるのは隨分非道い爲方ですものな。」

「然うでございますとも。然ういふ事と存じたら、私もこんな事を申して上るんぢやございませんでしたに……」と言つて、那美子は伏目になつたが、目には涙が一杯溜つてゐた。あゝ恥かしい、極りが惡い、こんな事を言つて來て！　と思ふと、家族も家庭も打捨てゝ、處定めず遊び歩く夫の心がツクヅク怨めしい。口惜しさ情無さが一つになつて込上げて來るのを、那美子はジッと堪へて、

「然ういふ何でございますなら、押してお願ひする譯にも參りませんから、私はこれで失禮いたします。

何うぞ悪しからず……全く私はそれほどの何とは知らなかつたものですから……」と那美子は斷りを言ひながら諦めよく歸仕度をする。

「いや何うも貴方にはお氣の毒です。」と中尾さんも衷心から氣の毒さうに言つた。

玄關へ來ると、先刻出した菓物籠は處も變へず其儘投り出してある。其を見ると、那美子は「持つて來た物さへ納めて貰へないか！」と、又新らしい別の悲しさを感じた。那美子を送出して來た中尾さんは、これは戴いた體で何うか持ち歸つてくれと言つて、何うしても受取つてくれぬ。幾度も幾度も押問答の上、漸と置いて貰ふことにして、那美子は力無い體を車に載せたが、子供は罪の無いものである。夏雄は小躍りをして、

「さあ運動會へ行くんだ。」

（三）

外はドンヨリと曇つた薄ら寒い秋の日である。那美子は此の曇つた空が何と無く自分の心の影でゞもあるやうに思はれた。車の上の冷たい迎ひ風は、涙に滲んだ那美子の目に氷るやうに泌みた。

那美子は來る時とは打つて變つて、何とも言ひやうのない嫌な思ひに胸を締められながら、それでも道は○○女學校の方へと急がせた。

那美子は此日のやうな恥かしな思ひをしたのは生れて初めてゞあると思つた。「スゴ／＼歸る」といふことをよく人が云ふ。自分も今日は其スゴ／＼歸つたのである。スゴ／＼歸る！　あゝ可厭な言葉だ。

この位恥かしい不見識なことは又とあるまい。自分も態度悄々歸る其後つき——便無さゝうな寂しさうな其見すぼらしげな後つきを憐まれたに違ひ無い。恥かしい！ 淺ましい！ これも皆夫が不眞面目なからである！ と考へると、利かぬ氣の那美子は體が顫へるほど口惜しいのである。

車は何時か〇〇女學校近く來た。來賓の歸りかと思はれる幾臺の馬車や人力車にも摩れ違ふし、海老茶や紫の袴の若い女學生にも會つて、其處等は何と無く賑かである。

女學生は皆お揃ひのズックの運動靴。何れもまだ親がゝりの苦勞の無さゝうな顏をして、今日の運動會を然も嬉しさうに、其より外には何も思ふことの無さゝうのが、那美子は如何にも羨ましかつた。最一度あんな境遇になつて見たい！ とシミ〲思つた。

學校の正門には大きなアーチが出來て、地に曳くばかりの大國旗が交叉せてある。長い鼠土塀に沿つて、供待の馬車だの人力車だのがヅラリと並んだ。門を入ると、廣い運動場は彼方此方人の波をうつて縮緬重ねの令孃や、洋裝美々しい貴婦人や、目を奪はれるものばかり。所々の植込みの紅葉も今が眞盛りで、若い女の濃い淡い思ひ〲の着附けの色と映り合つて繪のやうに美しい。那美子は暫く何事も忘れて了つた。が、フと氣がつくと、糸織に紋羽二重の自分の身裝が妙に見窄らしく思はれて、一々人の盛裝が目につき出した。けれども、其を迎へて見たり振返つて見たりすることは那美子には出來ぬ、たゞチラリ〲と目につくのだ。

賑やかなピアノの音が突然起つた。すると、

「午後の部が始まりますよ。」と誰やらが言つた。彼方に三人此方に五人と立話し爲たりブラ〳〵歩いたりしてゐた人達は、生徒も來賓も皆其方へゾロ〳〵と行く。那美子も群衆の中に交つた。

運動の午後の順序書の第一は瑞典式とかいふ極新式のもので、百人許の女生徒が一齊にそれをやる。ほんの手を擧げたり足を曲げたりする丈の事ではあるが、從來の體操とはスツカリ趣きが變つてゐる。那美子も物希らしく思つて見た。ことに、袴や着物の色の配合が如何にも奇麗である。來賓席には、洋服の紳士、丸髷の夫人、行燈袴の女學生を始め、色々な階級、樣々な風俗の人がヒシ〳〵と詰めかけてゐたが、「奇麗だ。」「よく揃ふ。」「好いわねえ。」「此學校のは別だわ。」などといふ呼きが其から其へと傳はつた。夏雄は嬉しさうな顏をして瞬きもせず見てゐる。那美子の特に注意を引いたのは、運動其物よりも黄色い聲を振絞つて號令掛けてゐる女教師であつた。年は二十四五にもなるらしい、色の白い、脊のスラリとした女である。

「私もいつそ女教師にでも……」と那美子は心に呟いた――彼女は又しても家庭のことを思ひ出してゐたのである。

（四）

折角勇氣を奮ひ起して出掛けて見た〇〇社の事もスツカリ當が外れて、心の張も一度に弛んだ。那美子は着物も着變へずペツタリ机の前に座ると、最う起ち上がる元氣も無い。此上は何うでも夫の歸りを待つより外は無いのである。其にしても、夫は何んな顏をして歸るか知ら？　情無い人だ、無責任な人

だと思ひ詰めると、私は一體何を樂みに斯んな處に斯うして居るのだらう?! といふやうな氣がフラ〳〵とする。

「實家には多少の富も有るし、獨立の資格も何うやら身に付いてゐるんだもの! 何を苦んで……」

と冷やかな目をして天井を見据ゑたが、深い吐息と一緒に其頸はグタリと垂れた。

「運命だ! 私にだつて夏雄にだつて夫は決して冷酷ではない。不健全なのだ。何よりも夏雄には一人限りの父親だ。」と思ひ返す。「可し! 今夜にも夫が歸つたら、多くは言ふまい、たゞ一言、ほんの一言、肺腑を抉ぐるやうな辛毒な皮肉を言つて、心から羞ぢ、悔恨させずには置かぬ!」と胸を定めて、何と言つてやらうと其樣事を考へながら那美子は宵から床に入つた。ウト〳〵として目を覺ますと、誰かゞ玄關で話してゐる。聞きつけた聲だと思つて耳を濟ます。と、何が可笑しいかドット大笑ひをする中に、一人際立つて特色のある笑聲が聞えた。那美子は、「遠賀さんだ〳〵」と頷きながら、何か勢を得たやうにつと起きた。これは「若しや夫の消息を齎らして來たのでは有るまいか。」と思つたからである。寐衣の上に帶を締め、羽織を引掛て玄關へ出た。

「遠賀さん、入らつしやいまし。」

遠賀は以前那美子の家の玄關に居た男である。今では近くに家を持つて、御飯炊きの婆さんと二人暮してゐる。遠賀は抱へてゐた膝を慌て丶疊につけて、

「や、何うもお寐みのお邪魔を致しまして。」

と慇懃に先づ斷りを言つて、先生はと聞く。まだ先達の儘歸らないと答へると、

「然うですか。二三日前の晩私も御一緒に伺しましたが、其時のお話ぢや、今夜は何うしても歸ると仰有つてゞしたから、疾うに最うお歸りになつてると思ひましたが……先生も能くお飽きにならんです な。」遠賀も少し呆れたといふ風である。那美子は客間の方へ遠賀を通して、茶などを進めながら、其と無く夫の事を尋ねると、其晩は何處其處の何といふ家だつたと有樣に言つて、

「先生も何うも歸るのが餘ほどお辛いやうでした。」

「然うでせうとも、何しろ貴方、家も家族も打捨らかしなんですからね。私は何事し向きの方さへチヤンとして置いて下さりや、外に何にも文句はありませんけれど……何うも此頃のやうでは、旦那は家庭に飽きたのぢや無いかと思ひますの。其なら其やうに又方針の取り方も幾らも有るんですから……」

と言ふのを、遠賀は遮つて、

「豈か！　そんな馬鹿な事があるもんですか。然うぢや無いんですけれど、先生も家にお在でになれば、然う申しちや失禮ですけれど、何家にも然う〳〵好話ばかり無いもんですから、ツイお出になる。お出になれば家へ歸り惡いといふ順になるのでさ。」と事も無げに斯う言つたが、其時の那美子には何か夫の辨解しらしく聞えた。

「あの晩は何です……河田さんも白川さんも御一緒でして、いろ〳〵面白い話を伺つたです。」

河田も白川も那美子の夫の友人で、二人とも妻子も家庭もある人だ。人間の心は妙なものである、自

分が何んな辛い境遇に居ても、外にも自分と同じやうな人があれば、それが幾分の慰めにも心行かしにもなる。家を忘れて遊ぶのが自分の夫ばかりで無く、又自分のやうな思ひをする妻も自分ばかりでは無いと思ふと、同じ苦痛も幾らか忍びよい。

「まあ然うですか。あの方達も……？　それて、面白いお話つて何んなお話しが有りましたの？」

「面白いといふも變ですが、つまり夫の道樂といふ事に就いて、方々の奥樣達のお話が出たんです。河田さんのなんか、なかく〵の嫉妬家ださうですね。」遠賀は煙草を取出して吸はうとしたが、何故か止めた。

「河田さんも餘程持て餘してお在てのやうです。白川さんの處のは又、何にも言はない代り幾日もく〵ふてゝるんださうですな。河田さんの仰有るには、吾々の所のやうても困るが、先生の處のやうに全發冷淡なのも困る……」

那美子はこの言葉が何といふ事無しに面正しかつた。

「ほゝゝゝ、何と思つたつて始まりませんものね。」

「はゝゝゝ、然うしたら先生が、僕の處のは實際それには冷淡て始末が好いよ。何しろ僕の此放縱を默つて容れてるんだから……然かし斯ういふ奴の方が危險だね。僕の處のなんか、イザとなりや最後の決心を爲やがるだらうと思ふ……」

此處まで聞くと、那美子は誠に胸の透くやうな自尊心の滿足を感じた。あの放縱不羈な夫に、兎に角

其丈の不安と疑懼とを與へてゐるかと思ふと、如何にも勝利を得たやうな氣がした。

それから二三日經つて夫は漸と歸つた。那美子の顏を見るとノッケに、

「何うも相濟みません。」と笑談めかして言つたが、那美子は其れを夫の心から出た言葉と聞いた。

「何う致しまして。」と那美子は笑つて答へた。そして取つときの文句も何も言はずに了つた。（完）



十數頁

眞山青果

日記の中から主人に關する記事だけを抄錄する。

十月二十五日

下女は寺町まで犬の頸輪を買ひに行つて居ない。髮を刈らうと思つて、主人に聞きに行くと、主人は閾を起えて射込む秋日に背筋を暖めながら、二枚の座蒲團に腹這つて切りと聖書を讀んで居た。先刻からヒッソリして居たのも仕事では無かつた。

暖かい午後である。諏訪の宮森は近々と黑ずんで、小兒どもに椎の實を拾はせて居る若い女の白い前掛が光つて見えた。その笑聲や話聲が、時々隅つと飛んでもない近さに聞える事もある。畠々の唐辛子は明るい秋日にカッキリと燃え立つた。

歸つて見ても未だ讀んで居る。聲に調子を付けて高々と讀んで居た。何時も二頁と落付いて讀書が出來ぬと云ふ氣忙しい人にも似合はず、今日は彼是最う二時間の上にもなる。一昨日の夜、晩く、急に騷ぎ立して柳行李の底を那地此地引繰返して、黴の生えた紙の濕つた舊

い手擦れしたモロッコ表皮の新約全書を見付け出した。本の扉にはこの本を送つた宣教師の名をカルチス先生よりと不器用な角々した日本文字で書いてある。主人はこの人の學校に十六まで通つたのだ。で、その晩は枕許のランプの外に西洋蠟燭まで點けて、殆んど夜明頃まで寢床の中に讀んで居た。カルテスは加奈太の人、老僕源さんを相手に、その淸淨なる獨身生涯を井野田の谿谷に終つた。自分の經營する學校へ一週二度の說教に出る限り、外の用事では一度も山を下つた事がないと云はれて居た。骨組の逞ましい、髮も髯も眞白に剛く筋張つた顏の老人で、職員にも滅多に口を利かなかつた。凝つとその大きな目で見詰められると、誰でも自然とその頭が下つたと云ふ。

主人はそのカルテスの話が出る度に。「僕は物心が付いて此方叱られて眞に畏いと思つたのはこの人ぐらゐのものだ。言葉で叱る人ぢや無い。人格そのものゝ權威に壓せらるゝのだ。近頃は最う誰を見ても畏くはなくなつた。畏くない代りにや如何に賞められても嬉しくも無い。自分の感情が荒んだゞけぢやあるまい。」と、何時も然う云つて居た。書齋にトルストイの肖像を掛けて置くのも、この人の前に立たば或は目が竦むかと思はれるからだと云つた。

僕が鋏を借りに入つて行くと、主人は茶が欲しいと云ふ。そして、「まア話し給へ。」と自分も日向に起上つた。

「大變な御勉强ですな。」と云ふと、主人は生溫い出流れの番茶を飽き切つた喉頭へ旨さうに二三杯も貪り飲ながら、自分の見たる基督観と云ふのを親切に說いて聞かせた。詰り基督はその謂ふが如く、地

に平和を齎らさんが爲めに來たのではない。渠の偉大なるはその福音よりも、寧ろ戰士として立派なる態度にあると云ふのだ。

「山上の大訓にある、Whoever shall smite thee on thy right cheek, turn to him the other also, は忍辱の教訓ぢやない。敵を恥ぢよ、敵を擇んで戰ふべきを說いたのだ。戰つて負ける恥は、賤しき敵と鬪ふ恥に勝る事を說いたのだ。渠は極端まで恥を惜んだ偉人である。」とも云つた。

「先生は洗禮を受けた人なんですか。」と僕は聞いた。

「洗禮は受けない。十六七の時から聖書はまア愛讀して居る方だが、何う云ふものか教會へ出たり、信者振つたりするのが厭だつた。他に勸められたり何かすると、尙ほいやになるんだ。カルテスも僕だけは打遣つて置いたッけ。詰り殼が堅かつたんだらうよ。」と笑つて居る。

「然うでせう、でなきア先生のやうな自由な生活は出來ませんからね。」

僕は何氣なく冗談に云つたのだ。でも先生はグッと來た樣子で、何か言出さうとしたが、ヂロッと僕を目隅から見て止めて了つた。主人は又た讀出した。座敷が暗らくなると下女に下駄を廻させて庭へ出た。目に滲むやうな辛味のホンノリ搖ふ夕暮をブラ〳〵歩きながら聖書に讀耽つて居た。そして、時々立停つては何か考へて居るやうだ。

十月二十六日

この日も聖書を傍から離さない。新らしく原稿紙を机に伸べて、何か一二枚書出しても見たが、直ぐ飽きて止して了つた。そして又耽讀するのだ。聖書には縱横の注意線が引張られた。

夕方、車夫が牛込の或る料理屋からとて立川さんの手紙を持つて來た。主人は何うしやうか迷つて居た樣子だつたが、着物を着換えて出て行つた。何うせ遲いに決つて居る。事によると歸らないかも知れぬと、僕等は早寢の用意してゐる十時頃。主人は眞蒼な顔して歸つて來た。何か面白くない事があると見えて、ブン／＼憤りながら消炭を起させて又酒を初めた。歸りを待たないのが不都合だと僕等まで大叱責を頂戴した。

そして十二時頃。「面白くない、又飲んで來やう。」と新に俥を備はせて出て行つた。

「二三日神妙にしてると思つたら、お荒神樣が荒び出した。」と下女はゲタ／＼笑つて居た。

十月二十七日

朝早く、雨戸を開けて居る所へ、主人は寒い／＼と叫びながら歸つて來た。そして朝飯も喰べず、床を敷くのも待兼ねて打仆れるやうに寢た。車屋は赤坂見付からの賃錢を貰つて歸つた。

起きて、湯へ行つて、髯を剃つて主人の歸つて來た頃は最う薄暗かつた。そこへ立川さんが見えたのて、遲くまで酒。客は外に今一人飯田といふ書生である。これは立川さんを慕つて九州から出て來たのだと云ふ。黑く堅々と瘦せて背の高い男だ。調子に乗つて笑出すと、その聲が驢馬の嘶くのにソツクリ

だ。驢馬君。立川さんの酒は馴れつこになつて驚かないが、この驢馬君も隨分飲ける。幾ら注いでやつてもグイ／＼と一口だ。飲みたいと思つた事はないが、飲めば幾らでも飲めますと云つた。

話は昨夜の事らしく、「然し君のやうにあゝ責めちや駄目さ。先方だつてツイ反抗して見たくなるぢやないか。」と立川さんは主人を慰めて居るのだ。

「反抗して見るが好うがさ。僕は那麼奴ア許して置けない。實に卑劣極る。」

「そりや向ふの卑劣も不都合も誰だッて分つて居るんだが、君のやうにあゝ追究して了つちや身も蓋もないよ。第一傍の同情も失ふよ。幾ら僕が止めても嵩に掛つて君が威張るので、知つて居る僕までツイ君が面憎くなつた。一退一歩の工夫はあすこだね。君にどんな理屈があつたにしろ、昨夜は慥かに負けだよ。」

「僕は貴方のやうに、何方就かずに瞞かす事は出來ません。」

「瞞かすんぢやないが、世間は然う君のやうに潔癖ばかりでも渡れるもんぢやないよ。敵を作つて第一損だもの。」

「損と得とは僕の勝手ぢやありませんか。」と聲が次第に激して來る。

「最う止さう。終にや僕にまで喰つて掛るんだ。君は全體自分の聲に醉ふんだね。一度強い事を云つたら最後、後から／＼倍掛けた無法を言出さなきや氣が濟まないやうだ。」と巧に言葉を外して、「あの酒と、あの爭氣さへ無ければ、實に好い男なんだがな。」とカラ／＼と笑つた。

主人は然し未だ腹が療えぬと見えて、繰返し〳〵昨夜の相手を罵つて居た。そして、自分にも氣が付いたと見えて、「まア何うでも好いんだ。」と盃でグイ〳〵呷り初めた。肴は燒唐辛子ばかりやたらに手を付ける。主人は近頃唐辛子とか胡椒とか云ふ刺戟性のものでなければ喜ばなくなつた。

飯田君は苦しさうに醉つて了つて、家の主人を捉えて、「僕は貴方が憎くつて耐らない。あの力ある文章を讀むと、僕は屹度その晩興奮して寢られないんだ。」と吃り口調に力を籠めて何度も〳〵も繰返すそして遠慮も無く他の作家を片端から罵倒し初めた。

「君アそれを誰に聞かせるんだ。嬉しがらせなら最少し上手に云ふのさ。」と主人は片腹痛さうに素ッ氣なく云放つ。

「僕アそんなのぢやありません。實際僕は愛讀して居ます。」

「然うぢや無いよ。飯田君は全く君の崇拜家なんだ。」立川さんも傍から言葉を添えた。

「有難い味方です。有難いさ。」と鼻の先にフヽンと笑つた。

飯田君は默つて了つた。主人は飲めば飲む程眼が冴えて蒼くなつた。

「文壇の話なんか止さう。それよか僕の米山甚句を聞かせやう。」と立川さんは食卓に肘を突いて、例の如く節にもならないやつを大聲に唄出した。濁い血色の好い顏が酒に光つた。

主人も終には一所になつて醉つて了つた。館坂が出る、浪花節が出る。その書生は五島の獵歌とか云ふのを、胡坐の膝を搖り〳〵天井を睨んで唄つた。

十一時過ぎ、小雨のビショ〳〵降る中かゝり路を、僕は早稻田まで蟹の鑵詰を探しにやられた。何處にも無い。上總屋が寢て起きないので、蕎麥屋の神さんに賴んで鑵詰の正宗を讓して貰つた。

後片付けが午前の二時。下女は穢れものを臺處へ押付けながらブックサ云つて居た。

十月二十八日

重く瞼を寢膨らして主人の起きたのは午後一時頃。朝に九枚の新聞をユックリ讀終つて、そして又一寢入りしたのだ。午後の日射のカッと眩しい書齋の机に坐つて、古雜誌の雜錄など拾讀しながら、烙じた番茶をガブ〳〵飮みながら、片手は始終右の上瞼の骨を探んで居た。二三日この方限局性にそこが痺れると云ふ。三叉神經痛と自分で決めて居る。三四日前に靑木堂から買つた埃及煙草の一箱を、最うスッカリ平げたと見えて、近處の煙草屋からオリエントを買はせられた。昨夜の火鉢を掃除しても、半分も吸はぬ金口がザット十能へ一杯あつた。勿體ないと下女が新聞紙へ包んで置いた。

夕方、僕が庭を掃除して居ると、先生は懷手のまゝボンヤリ椽側に立つて來て、「君、當月の財政はどのくらゐあればまア間に合ふね。」と聞く。成程今日は二十八日である。大きなところでこれ〳〵ですと云ふと、「ぢや好い、今晚と明日で屹度書きますよ。」

「酒屋の上總屋が一番煩さい奴なんでしてねえ。」

「大丈夫です。今晚は屹度仕事する。」と暫くの間椽側をノシ〳〵歩るいて居たが、立停つて、「君も辛

らいだらうね、僕も貧乏には飽きて了つた。」と笑ひながら僕の顏を見てゐる。
「貧乏と云つても先生などは、働きさへすれば幾らでも金になるんですからね。」
「所がねえ、僕だつて然う働けるものぢやないからね。」と諏訪の森を越して向ふに通る國境の連山を遙かに見て居る。足袋を穿かぬ足が冷たさうであつた。

晩飯には急に思付いた先生の好みで納豆汁が出來た。今日はフライ種の車海老もあり、到來ものゝ鶫も燒いたのであるが、是非と云ふので兩方を拵えた。國風にするとて、先生は自身臺處へ出掛けて芹を刻んだり、豆腐を叩いたりし、暮方の臺處を混雜させた。そして喰べて見て、「何うも思つたほど旨くないな。國に居る頃は雪の日などこれが何よりも御馳走てね。鍋の底を伸上つて覗きながら五六椀も食べて、よく母に叱られたものだ。近頃は最う何も旨いものが無くなつた。」と二椀の汁を少し殘した。

飯後暫く音は無かつたが、やがて、「あゝ。」と筆を抛つ音が聞えた。そして、下女がやつと後仕舞の手を火鉢に乾かして居る茶の間へ、ウッソリとした顏付して出て來た。「何うだ、面白い事はないか。」と突立つて居る。
「仕事は最う御濟みてすか。」と僕が聞くと、「むゝ。」と氣の無い返事して、「君、薪屋や何かの細々した拂は二日ぐらゐまで延ばせるだらうね。」と僕に聞く。
「何うにかなるてせう。」
「ぢや君、一本、一本て好い。」と指を一本目前に打振つた。

下女が今仕舞つた膳を火鉢の横に据えると、主人は相恰を頽して、「あッ、酒だ、酒だッ。」と小兒の喜ぶやうな眞似をして、故とらしく急に調子付いた。僕の讀んで居る本を引繰返したり、膝をガタ〳〵させたりして、皆を笑はせるのだ。

十一月二十九日

流石に今朝は早かつた。朝飯を喰べて居る時、臺所を明けて上總屋の亭主が書出を持つて來た。十八圓幾らとあつた。明後日あたり來て見ろと云つたら、又間違はれては困るから確りしたところを先生に聞いてくれとグズ〳〵動かない。

主人は箸を持つたまゝ臺所口へ飛出して來た。「今日は何日だと思ふ。晦日前に催促に來る奴があるか。」と鋭く叱り付ける。

「へえ、ぢや何うか明後日はお間違御在ませんやうに、何分手前も新規商人なものですから、へえ。」と背の低い頭の無態に大きな酒屋はピョコ〳〵腰をかゞめた。

「煩さいな貴樣は。」と睨み付けて居る。酒屋は又念を押して歸つて行つた。

「失敬な奴だ。來月からは最う取るまい。」と主人はブッ〳〵憤つて書齋へ引込んだ。飯を半分で止したのだ。

夕方までに僕が淨書した小說は略十五六枚もあつたらう。題は『碑文』。晝飯にも主人は急しい立膝し

て茶漬を二三杯搔込んだゞけ、我々とは口も利かずに切りと勉強して居た。

夜も仕事。

十月三十日

無事、仕事。

仕事する日は機嫌惡るい。臺所が穢いの、玄關の炭俵を片付けないで置くのと、僕は二度も三度も呼付られて叱られた。特に今日は枕脇の書棚を掃除せぬとて、目玉の飛出るほど叱付けられた。

十月三十一日

兎に角××の仕事は出來上つたが、昨夜の多忙と云つたらない。主人がノートに書く傍から一枚〳〵宛ペンナイフで切つて渡される。それを僕が筆耕して行くのだ。書きも書いた、昨夜の六時頃から、今朝の三時頃までに四十幾枚あつた。僕が一枚筆耕する間に主人（マスター）は二枚か二枚半の平均に書いた。僕だけは到頭徹夜。全部で六十七枚。

一寢入りして起きると、主人（マスター）は全部に傍訓（ふりがな）をして了つてある。

門がガラ〳〵と明いて、玄關口に酒屋の聲が聞える。先生が金を受取に行つたから晩方か明日にしろと居留守を使ふと、酒屋の奴またブツクサ云つて動かない。僕は關はず自分は引込んで了つた。

「おや書生さん、明日は大丈夫でせうね、だから私は此頃先生へ念を押して置いたんだ。困つて了ふな。」と大きな聲て云つて居る。

先生は茶の間の火鉢に肩を窄めて、小さく聞いて居たが、怺え切れなくなつて自分玄關へ乘出した。

「居ないと云つたなア居留守だ。然し金はないよ。金が無けりや何うするんだ。」と云ふ言分である。

酒屋はその劍幕に驚かされて、散々失言を詫びた上に、なるべく早く都合して頂きたいと下から出て謝まるのであつた。然し主人は明日も無い、明後日も無い、無い〳〵の言通して、到頭五日過ぎにでもなつたら貰はうと云張つた。酒屋も泣寢入りに歸つて行つた。

午後俥を飛ばして××社に稿料を受取りに行く。電車で好いと云ふのを、君も草臥れて居るだらうからと、無理に俥にした。歸り路の買物、獅子印ウヰスキイ、チイス、鮎の澁うるか、乾海鼠、その他種々あつた。紙に書付けて貰つた。

歸つて來て見ると、驢馬君の飲田が來て飲んで居る。麹町の下宿を出て、立川さんの所に引越して來たのだと云つた。

「あゝ御馳走が來た、旨く飲まう。」と主人は急に景氣付いて、買整へて來た品々を罐詰は壜のまゝ、壺は壺のまゝ食卓の上に並べて喜んで居る。

僕にも來て飲めと切りにすゝめるから、一所に坐つて酌をして居た。主人は相變らず氣が大きくなつて止めても〳〵西洋料理を取るやら、鰻を燒かせるやら、自分は一箸も付けぬ癖に、色々のものの注文

して限が無い。

「あゝ、立川が居ると面白いんだがな。呼びにやらうかしら。」と切りに寂しがつて居たが、終に飯田君を送つて行つて來ると、十時過ぎに蹣きながら家を出た。

立がけに僕を襖の陰に呼んで、「君、幾らある金が、明日返すから貸してくれたまへ。」と云ふ。

「買物したゞけて、後の五十幾圓は玆に持つて居ますけれど、方々へ拂はないと行けない金ですから。」

「大丈夫、貰ひはせんよ、唯要心に持つて居るのだ。その中二十圓、二十圓だけ。」と手を懐から出すのだ。

二十圓渡して了つた。

て出掛けに此方から開きもしないのに、「直ぐ歸つて來るよ、十一時半までには屹度歸つて來るから火を起して置いてくれ。」と固く云付けて出て行つた。

十一月一日

無論歸つて來ない。殘金を分配して細い所だけ幾分づゝ支拂つた。米屋、酒屋の纏つたものより、蕎麥屋、鰻屋、烟草屋の當座借りが却つて大きい。車屋などは十五日以後の分で十圓以上ある。下女は二月分の給料を貰つたら瓦斯糸の袷地を買ふと樂にして居たのだが、金を渡さぬので一日機嫌が好くない。僕にばかり當り散らして居る。

十一月二日

今日も歸らず、大阪新聞より原稿催促の電報二通。外に下谷に居る弟さんから、豫ての縁談の返事を迫つて來た。僕等は返事して最う大概決つた事とのみ思つて居た。

この縁談も初めて話のあつた當座は、主人(マスター)大の氣乘りて今日にも直ぐにも決めたいやうに弟さんを責めて居ながら、さア見合と云ふ段になつて尻込(しりごみ)を初めた。この次の日曜の、天長節のと何時も約束の日を伸して居るのだ。尤もそれまでには洋服の一着ぐらゐ作らねばならぬとは云つて居た。

先は淺草の或る女學校の教師、今年二十二だ。

この他、僕が來てから後ばかりでも、縁談は四五度もあつたが、今一足と云ふ間際になつて何時も先生から遁を打つのだ。その癖、縁談の初めてある時は先生大の得意て、來る人〳〵に吹聽して居る。「また××君の縁談か。」と評判ものになつて了つた。

十一月三日

夜晩く先生はグチに醉拂つて歸つて來た。出迎えた僕に、「さア一丁來い。」とトンビを着たまゝ組付く。二疊の狹い玄關で二度ほど投げられた。

酒だ、酒だ、と切りに叫ぶから、酒の用意はしたが、盃を二三杯乾したばかり、水ばかり無上に飲んで居る。醉覺の顔は蒼く、唇ばかり眞赤に冴えて居る。

下女と僕とを座らせて置いて、先生は終にこんな事を言出した。

「君等は僕を何う見る。嘸無法な男と思ふだらうね。」と云ふ聲は、何う聞いても眞面目である。下女は火鉢に兩手を翳して默つて見て居るのだ。

「何うッて別に私どもに…………。」

「遠慮なく云つて見給へな。僕も少し自分ながら考へて居る事があるんだから。云つて見給へ、遠慮は無いよ。然し、一體に見て、惡るい男ぢやあるまい。」

「無論惡るい方とは思ひませんね。」

「賤しい男でも無い積りだ。」

「然うでせうね、私も然うは思ひません。」

「ぢや何うだね。不道徳な奴と思ふか。」

「然うぢや無いんですが、些と世間を憚らな過ぎると思ひますね。先生にや先生の考があつてなさるのでせうけれど、世間の者共にや分りませんからな。」

「世間なんか何うでも關はんさ。俺は俺だ。なア幸(下女の名)、貴樣は何う思ふ、困つた人と思ふだらうな。」

「私どもには判ンねえけれど、酒飲むだら家で飲めば好いと思ふんだね。茶屋小屋歩るきなぞすると風體が惡るくなるでね。」と相變らずゲタ〱して居る。

主人(マスター)は獨りて自分を貶(けな)して、自分はやくざ者だの、嘘吐きだの、道樂者、三日坊主と散々に扱下(こきおろ)して居たが、「兎に角、俺も何うかせんきァ不可(いか)んよ。世間の評判が惡るいからなァ。」と切りと悄(しよ)げて居た。

そして明日からは屹度眞面目に働いて、お前達にまで迷惑は掛けぬ。今度こそ學校へもやる、酒も分量を決めて愼しむ事にするなぞ、如何にも素懐(すなつか)しい事ばかり云つて居た。また、僕に惡るい事があつたらドシ／＼遠慮なく云つてくれなぞとも云つた。

「さァ明日から勉强だぞ。」と叫んで寢床に入つた。

十一月四日

朝から仕事して、夕方までに短編十三枚のものが出來た。主人(マスター)は自身それを××雜誌社へ持つて行つたが、直ぐ金を持つて歸つて來た。

十一月五日

仕事。トルストイの『吾懺悔』『吾宗教』を購來る。夜は晩くまで讀む。

十一月六日

仕事。讀書。

下谷の弟さんへ當分縁談は見合はすべき旨を言送る。

十一月七日

仕事。立川さん來る。主人（マスター）を呼んで酒を出しますかと聞いたら、それには及ばぬと云ふ事であつた。二時間ばかりて歸る。

十一月八日

讀書、仕事。

髯が餘り伸びたと注意しても先生は湯にも出掛けない。

下女は、「急にあんなに隠和（おとな）しくなつて、蟲でも起さなければ好いが。」と笑つて居る。

この頃は話すより考へて居る時が多いらしい。書齋へ行つて見ても、大概は凝つと一所を見詰めて何か考込んで居る。此方（こちら）から話掛けてもロクに返事もしない。

瞼（まぶた）の上の痺れは益激しくなるやうだと、自分でエピチヨウルなど貼つて見たが、何んの効（きゝめ）も無い。夜も多くは眠らず、この頃は下女まで毎朝起される。

十一月九日

立川さんが午後から飯田君を連れて遊びに來た。「何うした、顏色が惡るいぜ、氣を付けなくちや不可ないよ。」と親切に心配してくれる。

「僕は些と考へて居る事がありましてね。」と主人は氣重さうな口振りである。

「止せよ、くだらない。それよか髭でも刈つて湯にでも入るさ。又考が變つて來るものだ。」丸々と肉付いた、血色の好い顏で笑つて居る。

「僕は最う身上も疊んで、本も着物もスツカリ賣拂つて、田舍へでも引込んで、新しく生活して見やうかとも思つて居ます。」

「馬鹿も好い加減にし給へ。些い〳〵思付きで人を驚かす事は止せよ。惡るい癖だぜ。」と相手にもならない。

兎に角、そんな時は氣を變へる方が好い、何所かへ行つて旨い晩飯でも喰べて、久振りに大に話さうと切りに勸める。「君と一週間會はないと、大變久しい氣がするぜ。」

「僕は酒は飮みませんよ。」

「飮まなくとも好いから出掛けやう。」と出掛けた。今日は僕も連れられた。

何所へ行つて何を喰はうと云ふのが、家を出る時からの問題であつた。初めは早稻田の支那料理と云ふ話であつたが、それも珍らしくはなしとあつて、ブラ〳〵神樂坂の方へ出た。

川鐵へ行つて鳥だとか、何所の鯉汁、彼所の鰻と色々談合にはなつたが、何かまだ旨いものがあるだ

らう、有るだらうて、神樂坂をブラ〳〵歩いた。中華まで行けば鷄の椀盛が喰べられるが、これは晩く遠いからとて止して了つた。

僕と飯田は迷惑だ。空腹を抱いてブラ〳〵その後を喰付いて歩るかせられる。特に僕は晝飯抜きの午後四時である。何所でも好いから、早く飛込んでこの激しい食欲を充たしたいと思つて居た。先生二人は相變らず氣の無い顔で、場所を相談しながらブラ〳〵歩いて居るのだ。

寺町の交番前へ來た時、主人は横に見える小さな一品料理屋を指して「小日向に居る頃は、本を賣つたり何かして、辛つと一圓か一圓五十錢の金で岡田と二人でこゝへ飛込んだものだ。こゝのフライと云つたら、そりや實に大皿にコテとあるんでね。何を喰べてもあの頃は旨かつた。」と舊い三年前の書生暮しを懐しむ口振りであつた。

「ぢや、何うだ、その頃の心持になつて入つて見やう。何時まで歩いても限はない。」と白金布の薄汚れた簾を潜つて中へ入つた。そして、汚點だらけの低い小さな食卓に四人グルリと陣取つた。

主人は未だハキ〳〵しない。出る皿も出る皿も前に並べたゞけて、肉叉も付けなかつた。僕は主人の分まで二人前づゝ喰べた。

「成程このフライの油臭いは驚く。まるで魚燈油で揚げたやうだ。」と立川さんは笑ひながらビールを幾杯も〳〵飲んだ。

「さア、何うだ一杯やれよ。君が興まないと寂しくて不可ない。」と煩さく勸めてコップを持たせたが

主人は氣の無さゝうに飲んで居る。

「馬鹿だな、何うするんだ。女でも見せやうか。」と立川さんは切りに主人に興を付けて居る。

少しは醉つたやうだ。

「ぢや僕はウオッカにしやう。麥酒は生温くて不可ん。」

「然う云ふ男だもの。日本酒の熱いのは何うだな。」

「おい、ウオッカとハムサラダ。」と主人は急に奮立つやうに自分で注文した。

四人とも可也醉つてそこを出た。

十一月十日

この日から、主人は煙草を大和に定め、喰物も朝は味噌汁、晝は煮染、夜は何か膽泊なものに決める。その代り月に二度とか三度とか日を決めて大に御馳走を喰べやうと云ふのだ。無論禁酒。

仕事、讀書。

十月十一日

主人は下町へ出掛けて、孵卵器と養鷄の書籍とを買つて來た。卵が孵るまでには庭の隅に鳥屋を作るんだと、日當りの工合、風の方向、卵の種類など色々調べて居た。

立川さんはその話を聞いて、「難有い雛兒のフライが喰べられる。馬鹿に旨いとよ。」など笑つて居た。

主人は飽迄眞面目である。

（をはり）



狂人の音樂

北原白秋

空氣は甘し……また赤し……黄に……はた青く…

晩夏の午後五時半の日光は暑を見せて、
蒸し暑く噴水に濡れて照りかへす。
瘋癲院の陰欝に硝子は光り、
草場には青き飛沫の茴香酒冷えたちわたる。

いま狂人の一群は空うち仰ぎ、
饗宴の樂器とりどりかき抱き、自棄にしみらに、
傷ける獸の如き雲の面
ひたに怖れて色盲の幻覺を見る……

空氣は甘し……また赤し……黄に……はた綠……

* * * *

オボイ鳴る……またトロムボオン……
狂ほしきヸオラの唸……

一人の酸ゆき音は飛びて羚羊となり、
ひとつは赤き顔ゑがき笑ひわななく
音の恐怖……はた仄しろき髑髏舞……

彈け彈け……鳴らせ……また躍れ……

セロの喇叭の蛇の香よ、
はた狂ひ泣くヸオロンの空には赤子飛び亂れ、
妄想狂のめぐりにはハッソの盲目
小さなる骸色の呪して逃れふためく。

彈け彈け……鳴らせ……また躍れ……

クラリネットの槍尖よ、
曲節のひらめき緩く、また、急く、
アルト歌者のなげかひを眩暈しながら、
一列血潮したたる神經の
壁の煉瓦のもとをゆく……

彈け彈け……鳴らせ……また躍れ……

かなしみの蛇、綠の眼、
槍に貫かれてまた歎く……

彈け彈け……鳴らせ……また躍れ……

はた、吹笛の香のしぶき、
花どくだみの鋭さに、
濁りて光る山椒魚、沼の調に音は澌む。

彈け彈け……鳴らせ……また躍れ……

傷きめぐる觀覽車、
はたや太鼓の悶絶に列り走る槍尖よ、
窗の硝子に火は叫び、
月琴の雨ふりそそぐ……

彈け彈け……鳴らせ……また躍れ……

赤き神經……盲ひし血……
聾せる腦の鑢の音……

彈け彈け……鳴らせ……はた躍れ……

* * * * *

空氣は酸ゆし……灰靑し……黄に……なほ赤く……
はやも見よ、日の入りがたの雲の色

狂氣の樂の音につれて波だちわたり、
惡獸の蹠のごと血を滴す。

そがもとに噴水のむせび
濡れ濡れて薄闇に入る。...

空氣は苦し....なほ赤し....黃に....また綠....

何時しかに蒸汽の鈍き船腹の
如くに光りかぎろひし瘋癲院も暮れゆけば、
ただ冷えしぶく茴香酒、鋭き玻璃のすゝりなき。

草場の赤き一群よ、眼を戰かし、
躍り泣き彈きただらかす歡樂の
はてしもあらぬ色盲の幻覺のゆめ....
午後の七時の印象はかくて夜に入る。

空氣は重し....はや靑し....黃に....はた暗く...

小曲七篇

吉井勇

解脫の船

灰色の靄うすらぎて、
やうやく動く船のかげ。

灰色の靄うすらぎて、
やうやく見ゆる人の群。

大黑金のともづなを
人は數百の斧に斷つ。

淨罪

淨罪界の山のうへ、
精舍のなかを橫に引く
蝮いろの朝の靄。

百の香爐のけぶりにも
噎ばず、堂に百人の
僧の眼ぞ窪みたる。

頸と髮

いにしへはダビデの戍樓、
一千の楯を懸けぬる。
いまはただましろき頸。

いにしへはギレアデ山の
山羊のむれ、草に臥しき。
いまはただながき黑髮。

惡僧

鐵鉢にどびろく汲めど、
その口はいまだ歪まず。
錫杖に少女おどせど
その腕いまだ曲らず。

惡僧は高く笑ひて、
いたずらに今日も唱へぬ。
『歸命頂禮。』

蛇の言葉

さな聽きそ、蛇の言葉を。
云ひけらく『情無かれ、荊棘の如くに。
冷かれ、石の如くに。』
さな聽きそ、蛇の言葉を。

また云ひぬ『されどなほかすかに送れ、
いとさむき肉の香を。』

われら

和泥も、麺麭焼も、織工も、煉瓦つくりも、
撓髪のうたびとも、顧みてかくは思ひぬ。
『生れぬ。驚きぬ。戀ひぬ。歌ひぬ。』

門のそと

悲しくも我ひとり。
黒金の扉をば、叩けども、叩けども、
夜もすがら叩けども、
答ふもの更になく門いまだ開かれず。
門のなか幽かにも、いと幽かにも、
白檀の落葉踏みさまよへる
君の跫音聽ゆれど。
悲しくも我ひとり。

和歌　紫舟選

○　大友月人

歸るべき家もなき子の今日も來てかなしき唄をまたうたふかな

戯れにわれはそむきぬへだてなき君が怨言のきかまほしさに

思へども思出のみなかなしきに明日と云ふ日の恐ろしきかな

安らかに住ふ家なき運命もつ身のかなしさに涙ながるる

爐をかこみとある夕のしなさだめさまざまなるにつゝましき君

闇にまた人もやありてなげくごとあゝ我聲の近くきこゆる

消殘る灯を我は守り灯は我をてらして淋し木枯のよひ

日一夜待てど來まさぬ人の名をあまたしるしぬ徒らごとに

なかずして待ちぬと迎ふをさな子にかわゆきことをきく夜頃かな（姉のもとにて）

かじけたる手足そのまゝよこたえて淋しき冬の夜をひとりぬる

何と云ふ弱き力を得てけると身をのみ責むる日の多くして

○　　　　闕本梁村

君は今すこし笑みつゝ笑みつゝもわがかなしさをうなだれて聞く

かなしさをもてあそびつゝ喜びをもてあそびつゝわが若さゆく（戯に龍子の姉に）

涙もつ眼にもうれしくなつかしく燭の火を見るストーブの前

青澄める空にもちさきさびしさをおぼえぬかくて秋はゆくらし

わかれては悲しきこともうきこともなつかしとしてまた君を見る

野を歩み山にのぼりてつく／＼と空の青さをしづやかに見る

かなしさに寢ねぬあしたの君が眼に似たりとおもふ朝明けの星

夕ぐれの鈍き光の丘に立ちわが方を見る艶なる君よ

かゝる時自らさへも僞れる性とし思ひ君にむかひぬ

病みぬればおとろへぬれば何事もたゞ何事もうたがひて聞く

○　　　　太田生麥

少女だに道知るごとく穩かに日に對ひゆくわれ弱きかな

忽ちに辛き路見ゆ雲とけてつよき日のさす市のちまたに

果ての日は只何となう思ふこと集め得られてゆくわれならむ

來ぬ人を待つが如くにわれありぬ里遠き野の湖虹のもと

ふとおもふ冷たき石にくづれ臥し泣かば涙もかれはせずやと

聲ひそめわが耳の邊に君はいふ「老いたる人に若さ誇らむ」

こは殊に淋しき地なりわれ来り君が名よべど反響だになし

歌すべく君はみめよし心よしそのいつはらぬ性をあらはせ　（友の某氏に）

けふのみは若き日に似しもの狂ひ人の命の末しらぬかな　（元日に）

○　佐野翠坡

車の灯赤くつらなり夕靄にうかびて長き橋の上ゆく

白きかげ木間にひらめく蝶かとぶいなく／＼君のリボンひらめく

うす霞む野中に青うまろき丘三四ならびて春のかぜふく

夕靄や港にかゝる船の灯は黄にくれなゐにむらさきに浮く

一陣の白がねの風さとなびくあらず君いま玉の琴弾く

寸ばかり土を出たる春の草ながめてあれば思ふ事あり

夜の霧森の祠のかげに焚くかたひらの火に薄く黄ばみぬ

白き蝶二つあとよりわが肩に来ると見れば君み手を置く

○　松本白衣

空の青に吸はれも入るか白き風また吹きてゆく白き風また

酔ひあたはぬさむき嘆きかはた醒めし悔のうめきかああ海の聲

ふと君の寝顔をおもひさまざまにえがけど更に似ぬがさびしき

鳥はなく疲れし羽をひらげては遠くとび来し海をみかへり

闇に目覚めふともおもひぬこの地下の西半球の晝のどよめき

少女なりし日をゆかしむや笑める娘よはた妻となる日をうれしむや

おもひ出のものみな黒き影となりあひかさなりて冬の日暮るる

海よ海よ捨て放たれしわが魂を奪りに来ずやと夜の磯に立つ

○　山村龍子

草若き廣野にあまた少女子のあそべりと見る春

の夜の星

たそがれの町に西見つ東見つわれ立ちてあり思ふことなく

里まつり歩めば鈴のなる下駄に五つの吾子は一里歩みぬ

○ 大石天裳

あさましき心の亂れちさかりし日のありとしも思ほえぬほど

一時は一時ほどにものゝ影心亂して安き日もなき

北の氷みんなみの火にいま融けて春は通ひぬ士に豚して

たそがれの森の下路黒き旗たてゝはすゝむ怪しき車

幼な日のきり下げ髪をなでらるゝ心地に月を浴びて立つかな

戀ひし日も醒めはてし日も天地に日月はただおほらかにゐぬ

抱かれて胡蝶は花の夢に入るとばかり春の夜をば二人は

縄のごとくちなはあまた木に垂れて動がてありぬ熱ある夕

朝の家日の第一の戰を宣する聲と桔槔鳴る

十たび吾れ問ふたび毎に十たび君眼にて答ふる日の若さかな

心何にかくはおびえて明日といふ日を恐れては今日を歩むや

蛇の殼布けるが如く冷かに白き街見ゆ月澄める中

○ 日下天

さまざまの人さまざまにむれてゆく都大路をわれもあゆみぬ

君が瞳の奥にひそめる或る者をうかゞふさまに見入りてありぬ

えも知らぬ顏あまた來てよなよなのわが夢に入る心さびしき

わがむねは千々に亂れてひた統ぶる王なき闇の國とはなりぬ

その昔ふみしわが道かへり見て何とはなしに涙落しぬ

落葉ふむわが跫音にふりかへり疑ふてゆくわれのかなしさ

愁てよ世をはゞからず笑むわれにゆふべの雨と歎おほく來よ

人等みな左といへば右にゆき世にへだゝりて苦しみに居ぬ

朝は日をゆふべは月を碧瑠璃の空は產むなりわれなにを產む

降る雨にしと〲落つるわくらばのしづくの中にけふもすむかな

われ死なむわくらば落つるひゞきにもいたくおそるゝ病を得たり

○　　芝野花

木枯の松にふく夜は山國の民となりにし幸思ふかな

明日といひ又明日といひわが魂の蘇るべき日はふりにけり

文讀みつふと又思ふかくてわれ何を欲りして文を學ぶや

君とわれ千萬人のその中の二人とまでに許されしかど

○　　大津照水

胸の海うれしき人の面影の蜃氣樓てそつと浮びぬる

夜の街軒端軒端に魔のひそみありとをのゝきひた走り行く

軒の籠のひさごの家に山雀はこもりて冬は夕となりぬ

○　　井淵みたま

破れたる心ぬふべき針もたぬ妻をおもへば悲しさぞます

色にぶき夢のなかより人もとめ夢の如くに過ぐす幾日ぞ

○　　下村えつを

古郷は櫨の落葉の紅なるに白き霜おく夕べとなりぬ

われ驕兒赤毛布まき息荒き酒徒にまじりて洛陽をねる

○　　土岐越水

かりがねやとんねる脫けて水に好き滋賀の大津の夜のあけがたを

○　　鎌田雅美

日の下になべてのものは春來てふ歡樂にゐぬわれは寂しゅ

○　岡田幽溪

君去りぬ愛の城中色めきて憎惡の軍のひた攻め寄する

○　村田愛美

いつはりの型に囚はれわが心みにくゝ老いぬせむすべもがな

戀こそはをかしかりけれ君住めば蝸から町もなつかしむ日よ

若人は神とあゆむに肉もだえ獸と居るに心足らはず

足る足らぬいふにすべなき悲しみに居てこそ偲べそのかみの人

二月野のこのうらゝかさ若草の青める上に白き雲浮く

冬の月くもれる下にしろ〲と雪にならびぬ北國の街

○　原迫村

からからとからびたるまま木の葉らは夕空をさし暫しかたらふ

永久のなげき　梶原重雄

――かなしかる師の君に――

き日の光りは永久のなげきもつみ瞳に泌み涙うむらし

天地もうせ給ひつる母君も四大の外にあらねばかなし

月のかげ日のかげ君をうつすらし失せける人にいさゝかは肖せ

ふけぬれば母が世界の近づける想ひ夜毎を寢でさめまさむ

月と日のかゞやかぬ國暗らき國そをあこがるゝ人になかるゝ

應募和歌は小石川區原町百卅三尾上柴舟宛の事



出代

出代や船で歸れば二日旅　へき
鼬鳴く寺を淋しと出代りぬ　同
出代や心離れぬ母の年齢（とし）　同
出代の吃り〱や暇乞　同
出代れば嫁に貰ひに來りけり　同
出代の墓拜み行く誠かな　同
身代や柳くゞりてかへり見る　同
出代りて國へ戻れば京戀し　同
小人數の大きな家へ出代りぬ　同
出代や寢耳に慣れぬ鐘が鳴る　同
出代や江戸は嬉しき米の飯　同
出代つてどうする筈もなかり鳧　同
出代や結ひ直し行く古簪　同

出代りて忘れし戀も昔かな　同
出代のかしこくも愚を守りけり　同
母の事問けば泣きけり出代女　同
出代やそれも癖なる笑ひ好　同
出代や行李に收む母の文　同
妬まれて出代る人を惜みけり　同
出代や國の四五人眼に浮ぶ　同
出代りて麥食ふ里へ嫁ぎけり　同
出代や母へ土産の一包　峽花
出代の名殘や京の薄化粧　寒山老
戀仲の二人出代る噂かな　賢子
出代に口喧しきが來りけり　廣子
出代や百がゝのある古つゞら　渓外
馬の如く使はれもして出代りぬ　彼岸堂
出代のふみと名乘りて字を好む　驟雨
出代やいさゝか妻がこゝろざし　哲郎
出代の明日と畑見る裏戸口　患多
なれもせば別れ惜まれ出代りぬ　しのゑ
出代女隣同士の同じ日を　葉舟
出代の傍輩送る戸口かな　四絃郎
出代に六尺男來りけり　萍月

出代や上手になりし京訛り　蓼南
出代の出代ろ度の荷物哉　野分
出代りや酒ずきなりし寺男　一枕橋
出代や床敷き慣れし女部屋　呑哉
出代や油にしみし枕紙　銀波
出代の其日となればなかく〵に　沐雨
三十を過ぎて出代る男かな　奇溪
出代の年をかくせる女かな　春嶺
出代の歸つて來るや伯母の家　茶童
出代に拼の藥を與へけり　草平水
出代やお里自慢を訛りつゝ　衣軒
出代りの叔母に見せたる貯金哉　秀藻
出代に傘めぐむ小雨かな　桃華
中京に出代り人の往來かな　樵子
出代の淋し顔なる火のあかり　幽溪
夫定め祕して出代る女かな　菫五
家つとの元結買ひぬ出代女　黑星
馬の顔撫てゝ出代る男かな　吼天
出代りの町家の風に馴染けり　のぶる
出代や蒲團積みたる部屋の隅　梁村
出代の雨に一夜をとまりけり　不言

御覺え目出度かりしを出代りぬ　靜阜
出代の持佛包みし覆紗哉　枯葉
寫眞撮つて出代る京の名殘哉　同
出代りの隱すとすれど國訛り　起堂
出代りの炊ぎし飯の硬さ哉　同
出代りぬ馬に別れを惜みつゝ　狠子
明日出代るといふに畑打つ男哉　同
出代の五尺にあまる女かな　北舟
出代女村の芝居を語りけり　同
出代つて妹の小さきが來りけり　鶴々樓
出代らず父子に仕へて老にけり　同
出代て我家のまろ寢主家の夢　曉耕
出代や主家定紋の一と重ね　同
噓交る奉公話や出代女　茶月公
出代りの餞に夫ある女かな　同
出代の狆に物やる名殘かな　餓鑑堂
出代の天窓引くを忘れけり　同
下駄さげて出代りらしき女かな　畝人
出代のみめよき女殘りけり　同
出代の去にともなげの會釋かな　刀川
出代りの男涙ぞしほらしき　同

出代や物はみ出たる小、風呂敷　其蜩

出代や忘れて戻る髪道具　同

出代や雨に濡れたる小風呂敷　木哉

出代の男に膳の古びかな　同

拭き掃除終へて出代る女かな　春溪

大甕に水汲み溜めて出代りぬ　同

出代や皆が眞似する國なまり　壺人

出代の吉原を見て歸りけり　同

出代やかしこまりては里言葉　背南

出代や思ひぞあたる母の恩　同

出代や梅の小村をたちいてゝ　紅梯梧

出代や母が手紙の緣不緣　同

出代の惜しまれて出る戸口かな　青雉

出代や先の婢のきれい好き　同

出代の年若うしておとなしき　茶青

出代の身の上語るほどに慣れ　同

出代の三釜の養を怠らぬ　鬼洗

出代るに機織り急ぐ灯かな　同

出代つて安き一日を過しけり　抱虎兒

出代女明日は聟取る日なりけり　同

出代や一夜戀物語して　同

出代や信濃女に馬馴るゝ　吟朗

出代や名物大根背負ひ來る　同

出代の下し置かれし守かな　同

出代りて前の主人のよかりけり　溪月

いさゝかの衣裳も持ちて出代女　同

出代の暇乞する隣かな　同

出代や身に大望の武家奉公　魯斧

出代りの髪結ふて居る臺處　同

出代や餞もののの一ト包　同

出代りの見たよな女來りけり　平凡骨

出代や主のまことと下女の嘘　同

戸々つ風呂敷一つ出代りぬ　同

出代や暗悲のある此の衾　潤南

出代や調度古びし京の家　同

針箱を讓り與へて出代りぬ　同

出代の和尚の留守を憾みけり　尺水

出代や釜癖知らぬ飯のこげ　同

出代や門出る腰に替草鞋　同

兎に角にかな文字覺へ出代りぬ　琴星

出代や橋を限りに暇乞　同

出代りて浄瑠璃好の男かな　同

出代りて呼びにくき名の女かな　同
出代の小包くゝる襷かな　青可
出代の近所に歸る午下り　同
出代の名名乘らんも恥しき　同
よき縁に母迎ひ來て出代りぬ　同
出代や僞寒論も聞き噛り　溢翁
出代の大望も無き男かな　同
出代に繪踏せしむる主かな　同
出代や身の上を聞く辻八卦　同
出代に金千足や志　五得
出代や親から來る嘘の文　同
出代の辭儀幾度や飯の前　同
出代や五人のうちの四人まで　同
出代のそれは弓師の娘かな　秋紅蓼
出代や婚儀ある家の門を過ぐ　同
主家の犬出代る我に馴れにけり　同
出代の起居なまめく女かな　同
出代やいつもお千代と呼びよる名　人生
出代や江戸に五年の江戸言葉　同
出代や親も一所に芋のつと　同
出る女代る女といとこかな　同

出代の賢過ぎたる子守哉　如是庵
出代て鈍な女が來りけり　同
出代になれたる四十女かな　同
出代の同じ村から來りけり　同
出代や新しき下駄はいて來し　同
挨拶もそこ〳〵にして出代女　雨圃
出代女紅などつけて參りけり　同
出代の江戸の女や口達者　同
恥しと灯ともし頃を出代女　同
出代りし奴が戀や古き文　同
出代や名殘に通る芝居町　霖雨
さりげなく子の髮結ふて出代りぬ　同
出代や娘と對の紅だすき　同
出代や目見得のうさをおもほゆる　同
出代や貰ひためたる繪番附　同
出代や本屋へ返す武勇傳　春夢
出代や角の八百屋へ一ト言葉　同
出代や奉公つらき異人館　同
出代やつゞらにつけし女下駄　同
出代や飴賣と行く町端れ　同
出代の己が辛口責たきかな　青城

つゝましの小金も溜めて出代ぬ　同
出代の廓に姉を訪ひよりぬ　同
出代も馴染早さや子守同士　同
出代や丁稚長太も十代目　同
子の病心にかけて出代りぬ　鳴象
出代の名殘の風呂を焚きにけり　同
氣安さは裸一貫出代りぬ　同
兄死して跡繼ぐ事に出代りぬ　同
出代や灸點もする寺男　同
出代や篤德翁が治下の村　不可知
出代やはした女なれど律義者　同
出代や着更を負ふて男親
門先に遇ふや出る下女代る下女　同
出代や珠數ははなさぬ寺男　同
出代女着て躾とる羽織かな　汀蒼
出代の渡舟に逢ひぬ見知り越し　同
伐る古木伐るなと言ふて出代ぬ　同
出代の潮來より來て唄よくす　同
膝に來る猫に言葉や出代女　同
出代りに家の掟を聞かせけり　同
出代の言葉尠なに歸りけり　化翁

出代を角まで送る子供かな　同
出代や丹波へ歸る赤ら顏　同
出代の心もとなき手つきかな　同
出代や初といふ名の三代目　同
出代や星占ふて代りけり　同
深川に身寄のありぬ出代女　梅史
出代の荷物受くるや船の窓　同
出代の四五人溜る關所かな　同
出代や袂の底の胼藥　同
車屋と話して行くや出代女　同
淀舟の隅に鼾や出代女　同
出代りや今樣めかす髮容　春陵
出代りや數の傍輩つれなかり　同
出代りや妻に嫉妬の病あり　同
出代りの胸に一物藏しけり　同
出代りてこゝな天地の二疊かな　同
出代りや主家が内輪のかくし事　同
產衣縫ふて抱かぬ兒惜しく出代りぬ　太郎
出代や貸して忘れし馬の糧　同
出代の行灯に淋し忘れ針　同
出代や母には若き假の親　同

代り來て水仕易けれ車井戸　同
出代や前借申す二兩二分　同
出代や慣れて重たき此處の臼　同
假の名に馴れぬ日數や出代女　鱶洲
出代や一ト日腹やむ水あたり　同
出代や方角知れぬ町使ひ　同
出代や米搗くことを一能に　同
出代りて寺に味噌する朝かな　同
出代や梅の戸を出て柳の戸　同
出代や覺束なくも禮手紙　同
出代や燃えてわびしき風呂勝手　同
出代の行李引きしむる灯影哉　小々
出代の指輪に契る戀もあり　同
出代りの荷物抱へて來りけり　同
出代のいつ縫ひ置きし羽織哉　同
出代りや紙に包みし古木履　同
出代の朝茶に名殘語りけり　同
出代や犬逐ひ返す橋向ふ　同
出代のついでにとぐや明日の米　同
誰が妻となりて出代る女かな　同
出代りの掻きて行きけり鍋の墨　同
名を継いで姉に出代る妹かな　同
出代や袂から出す赤襷　同
出代や下駄よ傘よと引くゝる　同
出代の大風呂敷や萌黄色　同
出代の娘と同じ名なりけり　同

本號應募者總て九十九名、句數千八百二十六句、應募句數の多かりしは、小々氏の八十八句、雨圃氏の四十二句、奇渓氏の四十句、不可知氏の三十六句、背南氏の三十五句、紅梯梧氏の三十三句、忠多氏の三十一句、彼岸堂、北舟、樵子、飛十、鳴泉、春陵六氏の二十句づゝなりき。

募集課題

雀の子　二月十五日締切
木蓮花　三月十日締切

定め

應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁大谷正信宛の事
句數は今後十句以上三十句以下の事
締切當日までに當方へ屆くやう郵送の事

前號俳句の校正に誤植の多かりしを謝す　（校正者）



文士招待會に於ける發見

松逕生

去月十九日に於ける文相邸の文士招待會は、一昨年に於ける首相邸の文士招待會のそれにも優りて一般の注目するところとなりたり、前者は唯首相が公退の餘暇の風流韻事と見做さるゝの他何等の注目すべき内容其中に存せざるに反し、後者には政府者に大に焦心期劃する所あり、決して尋常置酒暢飲の類にあらざるべき事、早くも坊間に喧傳せられしものありたればによる。

招待會前の巷説によれば、曰く森鷗外博士の建白あり、之ぞ其因をなしたるものなり、曰く上田萬年博士こそ其發頭人なれ、文藝院設立は博士の持論にして、之を鷗外博士に謀り、遂に事實として此度の招待會なるもの催さるゝに至れりと、而して政府者の意嚮を揣摩する者の説も亦定まらず、或は眞面目に文藝の進歩を促すべく鋭意なるものなりともいひ、或は冷かに、今の政府者としては左迄の依賴心を逞うすべきにあらず、惡文藝の處置に困りて行政上の苦心を訴へ、少くも文壇のオーソリテーたる、翹楚として一世の視聽を集め居る人々に對し、戒飭ともいふべき呆氣たる相談を持ち掛くるならんともいふ。

文部はいざ知らず、否啻に文部とのみはいはず、今の内閣は總じて保守的色彩を以て一抹過せられたるものなりと見らる、從つて文藝の取締に於ても、筆少しく閨閣の事に涉らんか、忽ち苛酷なる發賣禁止處分の下るも亦免れざる處とせらる、唯それ文部はその色彩の尤も濃厚に現れたるものなり、前文相の爲せし所必ずしも事の機宜に適して遺憾なしと言はず、否遺憾なしとせざるところにはあらず、假名遣の改良の如き啻に朝令暮改の陋を敢てしたるのみかは、更に思へば口語假字と文語假字とその使用法を兩立せしめ、之が爲

に唯さへ假字使用法に苦む幼少なる學生の頭上に、更にハンデキャップを戴かしめたるが如き、志は多とすべきものあるも、その功過に於ては強ちに推讃の辭を奉り兼ぬる節ありとはいへ、そは改善に志してその途上に立てるもの、世人の慊らずとするものは、左顧右眄未だ以て敢往勇爲の大猛斷に出づる能はず、難有からざる中庸の德を守り、不快なる微溫湯の味を與へたるの點に存す、然るを現文相の爲す所は如何、世人の希望ずる所より言へば、現文相の爲すべき所は當に前文相の遺緒を尋いて、その缺を補ひ、ハンデキャップを去らんとして却つて一層ハンデキャップを加へたるの陋を去り、進んで大勇猛心を起し一切のハンデキャップを排除し盡すに在りき、即ち火力を更に熾烈にして微溫湯をして快き熱湯たらしむるに在りき、改善の途上に立てるものをして更に進むこと一歩たらしむるにありき、否全く目的地に到着せしむるに在りき、然るに現文相の爲す所は全然之に反す、即ち假字使用法を復舊せしのみかは近者又小學讀本中に用ふる漢字の數の增加を以てするが如きあり、その爲す所甚だ文化促進の理數に明ならず、株を守つて兎を待つの稚態を存す、更に況んや文士招待會の當日に先つこと數日、一片の訓令を出して諸學校を戒めたるが如き、言ふ所爲す所如何にしても傳習を奉じて移らず、微動する新氣運新事相に對して何等の不安の念畏怖の思あることきを免れず、即ち右の訓令に對して鎌田榮吉氏は公言して曰く、こは政府者は出過ぎたり、吾人は初より訓令なるものを讀まんともせざれば、之を耳にするも亦之を奉ぜんともせず、吾人の爲さんと欲する所は吾人は斷々乎として行はんのみと、聞く所によれば鎌田氏の支配する慶應義塾大學にては敢然校內に於て劇を奬勵すべく、我國人の談話法の、常に體容を伴はざるを弊とし、先づ之を矯めん爲、事によらば高麗藏等を聘してその敎授を學生に試みんとすともいふ、吾人の耳朶に觸れて甚だ壯なる所ありとせずんばあらず。兎に角に現文相の爲す所は事毎に新事相に驚き新氣運に怯ずるの跡あり、而して幾多無用の反感を買ひ居る憾あるを禁ぜず、此間にして文士招待會の事あり、一方に多大なる期待を有するものあらしむると同時に、他の一方には馬鹿氣切つたる揶揄嘲弄の辭を酬ゐしむるものある事元より免れざるべきの數なり、文藝院設立の事は頗る進歩的の事なりハイカラの事なり、漢字增加芝居物禁止などの事はオヤンカラの事なり蠻カラの事

なり、氷と炭となり、月と鼈となり、一蛇に於ける兩頭なり、頭首各向ふ所を異にするなり、政府者の心事を了解せざる事前に於ては明かに此外面觀をなす事必ずしも誰人の罪なりとも斷じ難からん。

　此の如き不審の眼、要するに不審の眼を以て此等の文士招待會なるものは一般に待たれたるものなりき、されど案ずるよりは生むが易し、左迄馬鹿にすべきものにあらざりしと同時に政府者の措置往々機宜を誤るもの過去に於てありしとはいへ其志尙の決して頑昧一圖にはあらざるを知るべきものあり、從つて蒼生をして一點の星火を前路に認めしむる者ありとはいへ、決して深く杞憂を抱かしむべきにも非る事、少くも文藝の一面に於ては髣髴するを得たり。

　招待會に於ける政府側の諸公は思ひの外に打解けたる人々なりき、主客膝を交えて對酌歡語するの間、內相は曰く小說の發賣禁止、そは予の意に出づるに非ず、警察側より上げて來る故仕方なく承認する迄なりと、文相は曰く、諸君の敎を請うて文藝に通じたしと、文部次官は曰く、今の小說は結末に讀み至るとすつぽかされたる樣なりと、或は公然たる挨拶に於てし、或は一二士を捉へての座談に於てすとはいへ、要するに腹藏なく自家の胸底を赤裸々に暴露したるものなり。

　予は之を以て想ふ、今の政府者の忠忱國を思ふは疑はざれ、私心を挾みて私功を立つるに急なるものとはなす勿れ、唯それ趣味識見甚だ議すべきものあるは免れず、之によつて文藝の事に關し、往々にして世間の惡議を容るゝことあるのみと、文部次官が今の小說を讀めばすつぽかさるゝ心地ありといふの告白、少くも今の小說が過去に於て柳浪一葉等の全盛時代に於ける、或る事相の變化の一動機を濃厚に描寫し、小說の能事茲に終れりとせし時代の趣味と、その相去る數萬里、單に事を孤立したる事とせしめず、物を孤立したる物とせしめず、事、物と相關し、此、彼と相涉り、其處に天衣無縫の渾然たる一體を造る、一語にしていへばアトモスフエヤを寫す迄に至れる現代の趣味を解するに至らざるを示すものに非ずして何ぞ、而して此事幽微なるが如くにして其實現代の文藝を判斷するには實に一大須要事たらずんばあらず、虎を描いて猫に類するは描かれたるものの氣勢が虎たるに缺くるものあればによる、之を以て譬へんか、氣勢は即此アトモスフエヤに當る、氛圍氣に當る、而して虎を以て成効したる作物とすれば猫を以て成効せざる作物とすべし、等しく

狹斜の巷、若くは立入つて閨房裡の事が匂はさるゝにせよ、それが作者の目指す所にあらず、別にそれ等を包みし全體の事相のアトモスフエアがその所なりとせんか、而してそれに於て成効したりとせんか、狹斜の巷と閨房裡の事と又何の累をかなさん、而かも如何に成効したる作なりとはいへ、畫品に於ける氣勢を解せざる人々の前には凡ての虎凡て是れ猫たるべきと同時に、目指す所のアトモスフエアを解する能はざる人々の前には、凡ての成効の作凡て是れ亦不成効の作と擇ぶ所なく、一篇の作意何處に存するぞと強いて尋ねて、こは閨房裡の秘事を寫し性慾を刺激するにありとする發見に滿足を得るにも了らん。

一文部次官の告白と雖も、是れ即今の官僚側の告白ならずとせんや、而して內相の談話、而して文相の挨拶、その眞率なる所に益々その然るを見ると同時に、吾人は政府者が泊然拘る所なく、猛然提撕を得るべく玆に文壇の耆宿と握手せるに至れる勇斷を喜ぶ、想ふに當時の形勢より察すれば文藝院設立の事も、尚ほ幾回かの會合を重ねたる末、遠からず具體的に現せらるべきか、文藝院に就いては吾人に多くの希望あれども今玆に之を語るべき餘白を缺くを遺憾とす、兎もあれ如此きの會合はその頻々なる程政府者が謬見を打破すると同時に、又その現代趣味の向ふ所を了解せしむるの點に於て多大の裨益なくんばあらず、吾人は來るべき內相主人役の招待會が甚だ遠からざる未來に於てあらん事、並に尚ほ此催の續出せん事を欲す、蓋し此の如くんば、文藝獎勵の積極的方法成らざる迄も、猶ほ消極的意味に於て文藝沮害の一事の甚だ減ぜらるべきを愛するものなり。

新春文壇に於ける各作家短評

▲星雲子
○空明子

(一) 島崎藤村氏

▲「伯爵夫人」では家族のものが夫人の來訪を待受けて居る一節のみがよい。外は見るに足らぬ。殊に此篇の大部分を占めて居る夫人の手紙の輕浮な口調が厭やだ。こんな夫人が所謂新時代の女性なら、僕等は新時代の女性を呪はずに居られぬ。こういふ夫人を解せずして全く[illegible]付け

て了ふ社會も固より考へればならぬ、が夫れよりも先づ夫人自らが考へなければならぬと思ふ。內容の事實に對する議論は兎に角、作としては明かに失敗の作だ。「一夜」のアートは實に渾然として居る。他人の作に見られぬフレッシュなイムプレッションを與へる。大都の眞中に、しかも夜、無邪氣な娘を迷兒にして、一家擧つて之が捜索に苦心する一夜の光景、娘が無事に歸て喜ぶ有樣、床に入つても寢られずに一人起き二人起きて二階の椽に集ひし情合、水に死き雨戸を開けば、夜も亦明けなんとする詩趣、繰り返して讀めば讀む程益々アートの巧みなるを覺える。「螢」と似通へる節あつて、技巧は遙かに圓熟して居る。新年小說の白眉と思ふ。「苦しき人々」は其取材は「一夜」よりも深い所を覗つて居る。が行き方が「一夜」よりも稍々古く、又描寫敍述の釣合もよく取れて居らぬ。藝術としては未成品のやうな氣がする。が初め一回讀む時は何だか氣味が惡るくて胸がわく／＼した。餅、鱓、數の子、それから鹽鮭を三片許り古新聞に包んで廣岡老人に持たせた結末も情趣があつてよい。佳作といふべきである。氏の作は、數、量、共に少いが甚だ振つてゐる。

○「一夜」卷を掩ふてから何物かを想像せずには居られぬ。作者が簡單に說明した事象は、何等かの意味を以て讀者の胸を捉へずには置かぬ。新年小說の白眉である。前評に同意する。「伯爵夫人」一枚許り讀んで廢めた。彼れ是れ言ふべき權利はない。「苦しき人々」是れは讀まぬ。

(二) 德田秋聲氏

○「四十女」描かんとする事柄は描かれ盡してゐる。此の點に於て殆ど遺憾を感ぜない。よくもあれ程の事柄を、隙を見せずにコンデンスして書けたものだ。佳い作である。「日向ぼつこ」氏の特色は明かに見える。「四十女」ては少し力を入れ過ぎたと云ふ惑を抱いたが「日向ぼつこ」ては少し投げ遣りの氣味があるやうに思ふ。之れは敢て作の批評ではない。「おやぢ」之れ程油の乘らぬ者は、秋聲氏の作では始めてゞある。筆が無理に運ばれて居る。「大祭日」惡いものでもないが、之れ位の事なら、秋聲氏の筆を假らずともと思つた。「夜能」感じが餘計でもなく、不足でもなく、すつくりと出て居る、寫生文派の人々ては、到底かうは書けまい。物を敍すること斯くの如くんば文章の能事は即ち了れりと云ふて好い。

▲五六枚のスケッチであるが「夜能」の感じは氏でなければ到底出ない。殊に前半がよい。小品文の上乘なるものだ。「ふる年」も一寸よかつた。「おやぢ」は材料はよいが描寫が乾いて居る。空明子の評言通りく油の乘らぬ作と思ふ。「日向ぼつこ」の三分の二迄の描寫は實に旨い。昌吉も、お冬も、老母も、十一になる長男の幸一も皆暗い一家の中に活きて居る。只終りの方が書き足らない爲めに折角の作を少し呆つ氣なくした。が新年小說中の優れたものゝ一つである。「四十女」てはお里が養女のお鶴に菓子を呉れて、出て行く後姿を見送るあたりの描寫が何ともいはれぬ程よい。があの一節を除けば部分／＼の描寫は寧ろ「日向ぼつこ」より平面的である。けれど全體としては最も整ふた作て、成上り者の家庭、人に愛せられずして淋しく老いて行く女の一生、身に沁みて哀深い。新年の小說の最も傑れたものゝ一つである。「大祭日」大したものてはないが、一種の平和な念ひが滲み渡つて居る。殊に子供の相澤に對する態度がよく描けて居る。氏の滋味ある筆致の益々圓熟するのを淡む。

(三) 正宗白鳥氏

○「強者」讀んで底痛いやうに思つた。近代的の懸痛が潜んで居る。如此作は氏ならでは望まれぬものであらう。が、一本調子と云ふ嫌はないてもない。「地獄」筆は細く行き渡つて居る。村正の切尖が差し付けら

れたやうな氣がした。「最初の記憶」白鳥氏の作として可もなく、不可もない位の所であらう。これ迄を褒め立てるは、少しく買ひ被つた評である。「涎」覗つた箇所が餘りに見え透いて居る。此處だ、此所だと說明を聞かされてゐるやうだ。主人公を飜弄してゐるので、作者の態度は浮ついたものになつて仕舞つた。「二階の窓」頃の氏なら兎に角、今日には似合はぬ事である。けれど氏の作には駄作といふべき者ないのを多とする。

▲「涎」はチエホフの「官吏の死」あたりからヒントを得たらしい。前半の筆は細かく行届いて居るが、作者の態度が浮ついて居るといふ空明子の評は當つて居る。「最初の記憶」は惡い作ではない。が大した作でもない。けれど氏の作の範圍が次第〱に擴がつて行くのを感ぜずには居られない。又描寫にもホヽと具體的に出て居る所があつてよかつた。「未見の人」は氏の好んで書く性格小說であつて、惡るくはないが、在來の作物よりも優つて居るとは思はぬ。「强者」は「何處へ」「世間並」等に試みたミサンスロヒスト的人物を描いたものだが、內容も一層充實し、技巧も非常に進んで居る。新年小說中の最も傑れたるものゝ一つである。只氏は將來こういふ風の作物よりも「二家族」「明日」等の行き方の者に更らに價値ある作を書き得るに至るべきは僕の信じて疑はぬ所である。「地獄」は綺麗に臆目なく書いてあり、人をして一種不安の念を起さしむる丈けの力はあるが、餘り傑れたものではない。然し佳作の一つとはいへる。氏のますく向上精進して怠らざる眞面目なる態度に敬服する。

(四)　小栗風葉氏

▲氏の作を讀めば僕は何時でもフワーベルの所謂「一語主義（ドクトリン、オブ、ゼ、シングル、ワールド）」といふ言葉を思ひ出す。文字の選擇、辭句の洗練に苦心すること氏の如きは恐らくあるまい。「耽溺」は「青春」以後に於ける氏の短篇中最も長きもので、氏の苦心の痕も歷々讀まれる。全體としては感じが痛切でない、深酷でない。何處となくダラケて居る。殊に「意識せざる內部生命の苦悶」とか「羽色の美しい若鳥は……」といふやうな新派がつた所は厭だ。が部分〱の描寫敍述には堪らなくよい處がある。殊に感想より敍述、敍述より追憶、追憶より描寫と移りゆく所に少しの縫目をも見せぬ手際は老練此上ない。又子供に對する情愛と、妻君の心情とは沁々と書かれて居る。女が逃れて大師詣に行く一節などは氏ならでは到底書けぬ。又小料理屋の有樣なども寫實的ながら描けて居る。今少し印象的に細かく切り詰めて書いたら更らに傑れたものとなつたらうに惜しい事をした。然し長い丈け、苦心の作丈け、讀み應へはある。「好意」は極く短い物だが一寸氣が利いて居る。只少し樂屋落ちの氣味で趣向が充分讀者に響かぬ。「長男」はスラ〱と平淡に書けて居る。描寫も敍述も共に達者だが只作者の覗つた感じが出て居らぬ。「沁々私は思つた」と最後に斷はつてあるが、讀者には沁々した感じが餘り起らない。却て牛肉屋の女中とふざける邊りが旨いと思ふ。氏の新年の作物には完全なものはないが、皆相當に讀まれるし、又部分〱には到底他人の及び難き長所あるを認める。兎に角氏の力量は駈出し作家などの及びもつかぬ所だ。

○「耽溺」篇には流石に他人の及び難き妙味がある。餘り旨ま過ぎて文章に釣り込まれて仕舞ふ。兎角の評はあるものゝ、矢張り大家の風格は何處かに見える。「長男」大したものではない。如何にも樂に書いて居る。「好意」書き方が老練なものだと思つた。然し只其丈けだと思つた。

（五）　田山花袋氏

○「手紙」腹て書いたものでなく、筆先て書いたものだ。「此處の叔父さんもそりや新派だから」など鼻に附いた。これが新派なら、新派とは

厭なものだと云ふ感を、與へられた。「白紙」肉や戀の文字が仰々しく眼に映つる。末節の「其の日の新聞云々」は別段必要は無さ相に思ふ。「薮」全體として感服せぬ、部分には好い處があつた。之を氏の佳作中に數うるのは、氏に對して禮を失ふものである。僕は氏を以てまだ〳〵力量ある作家と信じて居る。何故かこの新年には氏は甚だ振はなかつた。

▲氏の作では「おし炎」が最も傑れて居る。充分フックリと情趣があるやうに描かれて、色も香もある。難をいへば多少寫實的の古い行き方てあるが、あの位よく出來て居れば必ずしも新舊を問ふの要はない。藝術品として立派なものだ。新年小説中最も傑れたる者の一つである。「薮」には田舍道の暮れゆく光景が油繪を見るやうに巧みに描かれて居る。放火した火の燃え上るのを落付いて叙して居る作者の態度がよい。が、目と心と共に耳をも一所に働かせた書き振りは、新らしき試てはあるが、不熟で失敗に歸つたやうに思ふ。「手紙」は厭やな作だ。忌憚なくいへばつまらぬ作だ。現時の女學生氣質を最も淺薄に見て、最も浮ついた調子で書いたものと思ふ。「白紙」は作者の覗つた所まで行て居らぬ。深酷らしいが深酷ではない。殊に肉、戀等の文字を連發した所が非常に厭やだ。

（六）眞山青果氏

▲「埋立地」總ての人物の性格がハッキリと出て居る。殊に一家皆思ひ〳〵の、心そぐはぬ生活をして居る、荒さんだ、何等の興味もなき家庭の悲哀が深く人の胸を壓する。殊に主人公殿吉は最もよく氏の筆に描つた人物て、紙上より浮出る程力強く描かれて居る。新年小説中の最も傑れたる一つである。「三軒目」もなか〳〵よい。氏の好んで書く題材て、篇中の人物は是迄も氏の作て逢つたことがあるやうな氣がするが、それ丈け氏の筆によく書きこなされて居る。佳作といつてよからう。「父母の家」は疵もあるが、よい所も少くはない。氏の作は三篇共音揃つて居た。

○「埋立地」出る人物の悉く活躍して居るのに感服した。これ程強く個性を描くは青果氏を措いて他にない。讀んで胸がすいと透いた。「三軒目」「父母の家」氏の作として、特別に是れと言ふべき所がない。無論惡いと云ふてはない、從來のゝにもかう云ふのはあつたと云ふ意味だ。氏の作は概して皆いゝのに、大して評判にならぬのはどうした譯だらう。

（七）高濱虚子氏

▲「揺れる家」はつまらぬ作だ。いやに衆貴がつた所が鼻につく。が「三疊と四疊半」はなか〳〵よい。あの精細周到な描寫、又描寫の奥にある一種の感じ。氏の益々エラクなつて行くには驚く。お秋の性格は最も明かに書かれ、又お秋とお島との衝突も振つてゐる。お秋の父親の人物も面白く出來て居る。新年小説中の最も傑れたるものゝ一つである。

○「三疊と四疊半」かうすら〳〵と書いて、少しも岐路に遷らぬのは偉いものだ。敬服に堪へぬ。氏の將來は最も注目に値するものだらう。

（八）水野葉舟氏

○「吐息」少しく支え切れぬやうだ。かやうな感情をかうも並べ立てられては、讀む方も吐息せざるを得ない。「石」そつがなく書けてゐる。「吐息」より佳い。將來のある人であると思ふ。今一層の奮勵を望む。

（九）小杉天外氏

▲「零餘子」は失敗の作だ。二行か三行しかない地の文も死んで居るし、氏の得意とする會話も此篇では全く拵へ物になつて居る。「何に………？お前の名は保さ、僕は讓、親父の名は竹田直則……。此處は神奈川縣

三浦郡……」などゝ來ては正さに本郷座以上の科白と思ふ。內容も新らいものを捉へんとして、捉へ損れたもの。「長者星」を書いた同じ人の作とは思はれぬ程まづいと思ふ。一考を煩はさゞるを得ぬやうに感ずる。

○書き流しのやうに思はれる。鳥渡思ひ立つて鳥渡書いたと云ふ風だ。

(十) 小山內薫氏

▲「先の亭主」一つしか讀まない。よい材料を捉へて居ながら意味のない、感じのない者にして了つた。作者が早呑込をしてはア〱こんな者だと頭て極めて了ふので、極く淺い者になるのではないかと思つた。

(十一) 永井荷風氏

▲「祭の夜語り」物の見方と感じ方には新らしい處がある。モダンスと思はるゝ處がある。が文章は旨くない。殊にコンヴエンショナルな文句(例へば「兩の朱なす脣をば、眞珠のやうな白い齒と、花瓣のやうな舌の先」)と舊き硯友社風の文章の止め方(例へば「理由はなく〱!」「なるんだもの!」「居たからで」「例とやら」などいふ止め方)がいやになる程ある。今少しく文章に苦心せんことを氏の如き素養のある作家に望む。

(十二) 泉鏡花氏

▲「七草」二行目から、いやに捻つた文章だなと思つたが、三行目の「ちやく〱と椿へた叔父貴である」といふ所に來て吹き出して了た。



筆まかせ

醉美生

○「女義太夫は聞かれませんね」などと得意相にいふ者あり。生れてから多くも四五十度位しか義太夫を聽いた事のない生半可通の輩は、得てこんな事をいひたがる者なり。笑止の事哉。女義太夫には女義太夫の特徴あつて、到底男には及び難き長所あるものを、一概に貶し去るは未だ其道の修業足らぬを表白するに止る。耻づべし。謹むべし。

○女義太夫のまづいのは辛棒すれば辛棒し得られざるにあらず。けれど男太夫の下手だのと來てはどうしても我慢し切れる者ではなし。之れは評者が男だから同性反撥する爲めてあらうといやに氣を廻す奴があるかも知れぬが、それは決して左にあらずと答へて置く。

○大阪から來た若手の女義太夫ては團司が最も上手なり。聲の柄も小さく、旨味もないが、情合て語つて行て人を動かす所は感心。あれて顔てもよければワイ〳〵騒がれしならん。然しあれ位旨くなつたのは騒がれないお蔭かも知れず。

○僕の最も感心して居る義太夫は大隅の「合邦」「すしや」「壺坂」。南部の「岸姫」。瓢（素行時代）の「講七」「質屋」「俊寛」「忠四」。小清の「鰻谷」。「大晏寺」。生駒の「陣屋」「寺子屋」等なり。若手のつまらぬ奴など聞くと同じ語物てもかうも違ふものかと腹立しくなるなり。

○綾の助は聲清けれども情なし。太棹よりは細棹に成功すべし。組幸は柄大きく語口しつかりして居れど、未だ語る以外の情趣なし。朝太夫は美音を身上にしてダラ〳〵と歌つて居る丈け、綾瀬は語口仰々しくして品なし。殊に右手を妙に動かすのが目觸りなり。攝津は名て以て素人を嚇がすのみ。デン界も亦人なき哉。

○吉右衛門の高時、お坊つちやんに見えるのは年の罪止むを得ないが、科白は例によつて旨いもの、あの力ある底錆のある聲は優の獨得。何ともいはれぬ程よし。只「高時の性質である」とかいつた時は妙に新派らしくなつて一寸困つたり。

新刊批評

▲俳諧師　高濱虚子著　民友社發行

撰和三藏といふ男が中學を出て、京都の高等學校を中途て殿して、東京に來て俳諧師の生活を初める迄に遭遇した事件や觀察や感想などを書いてある。三藏（俳號山僧）は虚子氏自身をモデルにしたものらしいが、此人の生涯には別に人を動かす程の事が書いてない。又所々に漱石氏の口調を張つたやうな所もあり、文章にも巧を弄し過ぎたと思はるゝ節もないてはない。例へば寂光院を訪ふたくだりの「叩く」の字を重ね用ひた所などは今日になれば鼻につく。けれど十風夫婦の生涯丈けは全くよく出來て居る。描寫が活きて居るのみてなく、中の感情も活きて居る。深き悲痛の念を起さずして讀むことが出來ぬ。漱石氏も評した通り、明治文壇に類稀れなる出來榮てある。或意味からいへば俳諧師は十風夫婦の描寫のみて不朽の價値がある。又小光などもスラ〳〵と書かれて居る割合によく出來た。近來の最も傑出したる小説として之を江湖に推奬する。殊に特製は白絹の表紙に銀箔塗といふ品のよい製本、小説界未曾有の美本てある。函が淺くて蓋のよく合はぬのは疵だが其他は申分がない。（特製貳圓）

▲長者星（前編）　小杉天外著　春陽堂發行

著者近來の短篇には少からざる失望の念を起さしめられたが、こういふ力を入れた長編になれば流石に旨いものだ。叙景や形容詞などには多少誇張の點もあるが、面白く讀ませる腕は充分ある。讀み初むれば讀み

畢る迄卷を措てさせない。此前編丈けでは實業界の傑物よりも實業界に興味を有せざる工學士の方が悉しく書かれて居る。然し終りの方には主人公らしき駒次郎が活動しかけて居るので、此れから先きが大いに實業界を活現させるのかと思はれる。會話の溌溂たると、事件を叙して行く手際の勝れたるとは著者の壇場。今の所なかなか眞似手はない。何人も一讀すべき小說である。(定價九十五錢)

▲足利尊氏

山路愛山著
玄黃社發行

時代代表「日本英雄傳」の一編として出でたるもの也。發端に「我等は既に頼朝と其時代とを語りたり」とあれど、「頼朝」は未だ出でざる故何だか妙な心地す。著者の都合にて此編を先きにしたるなるべけれど、かう書いてあれば「頼朝」が出てから讀んだ方がよいやうにも思はる。議論に一々出處を示し、明快なると共に信用を置くに足る史論は著者の獨壇、史的智識を得ると共に讀みものとしても面白し。但し文體は昔の民友社調にして少しイヤな心地す。「現代金權史」「豐太閤」などの文體の方遙かに新らしき印象を殘す。爾後の諸篇は全く調子を代ふる譯には行くまじけれど、少しく著者の鹽加減を望むもの也(定價九十五錢)

▲愛弟通信

國木田獨歩著
佐久良書房發行

日清戰爭當時國木田獨歩氏が民友社員として戰地に渡り、弟に送るに擬して戰況を報じたる通信を集めたるもの也。處々に例のキビキビしたる獨歩の姿を見得べきも、大したものではなし。序文も何もなきは讀者に對して不親切なるもの といふべく、 定價九十五錢 は本に比して高價也(定價九十五錢)

▲日本高等文法

三矢重松著
明治書院發行

文語口語を併說して國語の正しき智識を與へんとしたるもの、著者の勞を多とせざる能はず。國語問題の全く解釋せられざる折柄、多大の參考となるべし(定價一圓六十錢)

▲澁澤榮一評傳

生駒翔翔著
有樂社發行

明治實業界の偉人澁澤男を評傳したるものにして、久しく「報知」に連載したるものを一冊に集めたるもの也、一種の立志傳として讀むを得べく、又一種の史料としても見るを得べし(定價八拾錢)

▲西洋史便覽

村川堅固著
寶文館發行

歷史地圖、地名索引、系譜、列國對照年表の四綱に分ち、歷史研究者の爲めに便利となるべき事項を忠實に網羅したるものにして、學生を益すること尠少にあらざるべし(定價一圓廿錢)

▲響

水野葉舟著
新潮社發行

氣が利いたのもある。デリケートな感情を書きあらはしたのもある。詩的なのもある。文章は少しく洗練を缺く所があるが、小品文を集めたものでは最も傑れたるもの丶一つであらう。(定價參拾五錢)

▲奔流

眞山青果著
新潮社發行

「青果集」以後の著者の短篇七篇及び脚本「生れざりしならば」を集めたるもの、小說中では「病歷」「家鴨飼」が最も傑れて居る。著者の力ある作風は此編に遺憾なくあらはれて居る。稍々詳しい評は前號の「戊申文壇

概觀にある。（定價七十五錢）

▲半生

中村星湖著兼發行

新進作家として有望なる中村星湖氏の短篇十二篇を集めたり。精讀の上次號に批評すべし（定價五拾錢）

▲染香錄

安藤洲一著
無我山房發行

所有一切の智見を棄てゝ遂に浄土新宗の堅き信仰に入れる著者の秘めざる告白には甚だ首肯すべきものがある、之は卷頭に於ける數章に於て認めらるべきものだが、以下十數章に於ける悟後の感想を述べたるもの皆求道者の細心翫味すべきものである、（價七十錢）

▲俗曲評釋（箏唄）

佐々醒雪著
忠文堂發行

俗曲評釋第一篇長唄の卷に次いで本書を成したもの、德川文學に造詣深き著者が、古曲新曲の數々に對し忠實なる評釋を下したもの、初の總說に於て、先づ箏曲の由來を委しく說明してある、その周密なる點に於ては甚だ推稱すべきものである、淸方の挿畫、亦趣味多きものである、（價六拾錢）

▲痛快

吉野臥城著
昭文堂發行

その氣に喰はぬ點を言へば新體詩仕込の用語、普通の文章としては如何と傾かれる樣な用語が偶には見えるのと、事件の連鎖の描寫に不用意の處が出るのとだが、その氣に入つた點をいへば自然な描くところに恍然神往せしむる樣な妙趣が潜むのと描かれたる場面が從來餘り寫されてない地方新聞の內部で、種々な性格な人物が寄り合つて利慾やら情勢やらで互に相嫉視反目する暗黑の空氣が明かに看取せられる點とにある、暗黑とは言ふ條その中に戀愛もあれば義俠もある、弱者の反抗心もある、一讀の價はある（定價金五十錢）

▲家康公前記

塚原澁柿著
佐久良書房發行

德川三百年の覇業の基を成した家康は、元は三州岡崎の孤城に據る松平廣忠が、武運の衰へたる際に生れたる身、七歲の幼冲にして早くも今川への人質と定められる、其間に潮見坂の災難あり、流離間關備さに苦辛を嘗めた末、遂に織田今川の合戰の折織田方より救はれ戻る事となる、後年その能く四海を掩ふに到る竹千代の竹の生立には極めて波瀾の起伏がある、之を例の澁柿園の情を盡し景を盡した健筆によつて描き出したもの、何の惡からう筈はない、卷首に當時の地理の明細なものを添えてある、小說にあらずして卽正史の感も起る。（定價一圓三十錢）

▲明治四十二年重寶記

實業之日本社發行

初には略曆次に日記三則なる注意書を付し、更に毎月の初の處には家庭曆と名けて行事、料理、季節、遊樂等の欄を設けて簡單に記述す、日々の處には甲子天氣寒暖の小欄外、上欄を豫定、摘要の二部に分ち日常の

要務處理に便ならしめ、各月末及年末に金錢の收支記載の欄あり、卷末添ふるに日用諸規則類を以てしたる尊重寶記の名に背かぬ(正價五十錢)

▲生存競爭法

成功致富の資格、成功致富の方法成功致富の調音の三篇に分ち、何人も欲する成功致富には自ら到達すべき至當の手段あり、徑路あることを諄々として說き、急燥者流をして悔なからしめんとする者だ(定價金五十錢)

▲最良の機會　　蘆川忠雄　實業之日本社發行

前題には髮あり後題にはなしとせられる機會なるものは、之を捉へるには其術容易ならず、本書はその容易ならぬ術を教えたものだ(正價三十五錢)

▲日蓮主義　　大溪敏郎著　佛教圖書出版協會發行

說の口の遭厄氷と冴ゆる劍光下にピクともせず、一片耿々の所信は石に匪ず轉ばすべからず、席に匪ず捲く可からずとして自若たりし傑僧日蓮はそも何者ぞ、その健闘的精神を解說し鼓吹し以て惰容ある一代の民心に活を入れんとするのが本書てある、(正價八十錢)

中央公論 前號(新年號)要目

▲日本の大外交……社論
▲政友會大同派合同論
○所謂文明の弊の源……丘淺次郎
○先帮者は後發者となれり……志賀重昂
○國家、人道、個人……藤井健治郎
○京都大學論……戸川秋骨
○日米協約を評す……池邊吉太郎
○清國の將來……大隈重信
○海外消息……無念庵
○時子……杉村楚人冠
○人相談片……大町桂月
○帝都の新聞經營者……黑頭巾
○桂侯論(冷眼子、三宅雪嶺、松井柏軒、局外人、島田三郎、建部遯吾、靜觀居主人、田川大吉郎)
○耽溺(小說)……小栗風葉
○一夜(小說)……島崎藤村
○埋立地(小說)……眞山青果
○蕣(小說)……田山花袋
○強者(小說)……正宗白鳥
○四十女(小說)……德田秋聲
○過去一年の政治外交宗教文學……社同人
○廿五議會の夢……黑顏子
○攝津大掾の一座……空明子

▲本號限り定價金四十錢(郵稅二錢)▲本號再版殘部僅少あり

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 日本橋呉服町 北隆館
仝 本郷本富士町 盛春堂
仝 京橋鎗屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵稅共

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年一月廿七日印刷
明治四十二年二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所 反省社（電話下谷九一九）

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ